

< 令和 3 年度修士論文(静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科)>

演劇活動を通じた若者の居場所づくりの可能性

The Prospect of Creating “Ibasho” for the Adolescents through Theatre Activities

藤田 仁美 FUJITA Hitomi

(論文指導：静岡文化芸術大学准教授 高島知佐子)

目次

論文要旨	1
第 1 章 研究の背景	3
第 2 章 居場所に関する先行研究	6
第 3 章 若者の居場所に関する先行研究	12
第 4 章 研究の目的と方法	16
第 5 章 杉並区立児童青少年センター「ゆう杉並」の「オフィシャル演劇」	20
第 6 章 穂の国とよはし芸術劇場「PLAT」の「高校生と創る演劇」	33
第 7 章 結論と今後の展望・課題	45
謝辞	52
参考文献	53
図表	58

要旨

2021年4月、子ども・若者育成支援推進本部は、「子供・若者育成支援推進大綱～全ての孩子・若者が自らの居場所を得て、成長・活躍できる社会を目指して～」(以下「大綱」という)を策定した。その経緯には、子ども・若者を取り巻く状況が深刻さを増しているという認識が示されている。大綱において作成、公開された「子供・若者インデックスボード」で、子ども・若者の居場所の数の多さと自己認識の前向きさが概ね相関関係にあるというデータを示した。特に、各国に比して低いとされる日本の高校生の自己肯定感を高めるためには、彼らの居場所の数を確保することが必要であると考えられる。

居場所という言葉は、きわめて現代的なテーマ、教育的な用語として使用されており、概念的定義は一貫していない。先行研究に共通していえることは、ある場所を居場所であるにとらえることは当事者の主観・認知に左右されるものであり、居場所概念は心理的な意味を多く含んでいるということである。そして、その中心には、他者とのつながりという関係性がおかれているということが指摘されている。当事者が居場所を認識するとき感じられるものが居場所感であり、その主たる要素に自己肯定感、自己有用感、被受容感、安心感があることも示されている。

また、若者の居場所づくり研究が数少ないことも指摘されている。

本稿では、先行研究に拠り、若者の居場所づくりを自己の再認識の機会をもたらし自己肯定感を高める活動とし、大人との関係性を課題ととらえる。若者の居場所づくりの中で、自己肯定感を高める可能性のある演劇活動を通したものに注目し、そこでの若者への大人の関わり方と、それを生み出す仕組みを明らかにすることを目的とした。

東京都杉並区立児童青少年センター「ゆう杉並」の「オフィシャル演劇」と、愛知県豊橋市の穂の国とよはし芸術劇場「PLAT」の「高校生と創る演劇」を調査対象とした事例研究を行い、インタビュー・アンケート・参与観察データを分析した。そこでは、大人が若者の個を尊重して、主体性を促すために「教えない」という関わり方をしていることが明らかになった。その関わり方をうむ仕組みには、目的と情報を共有できる円滑な職場内コミュニケーションのある良好な大人同士の関係性と、キー・パーソンによる人員配置の二つがあり、それらに加えて、演劇活動の非効率的な時間と舞台発表のかたち、特別なスキルや準備の不要な点、スタッフワークを含めて多くの役割を持つ点などが、若者の自己肯定感を高め、主体的参加をうながす可能性をもつ。

事例研究を通して、演劇活動を通した若者の居場所づくりは、その活動の特性から、参加する若者の主体性を重要視し、教えない、個を尊重するという大人の関わり方を生みやすくし、演劇活動を通した居場所は、若者の自己肯定感を高める可能性を持つと示唆された。

キーワード：居場所 高校生 演劇 関係性 ゆう杉並 PLAT

Abstract

In April 2021, the Headquarters for the Promotion of Measures to Support Children and Youth Development launched a policy to support children and youth development, aiming for a society in which all children and youth can find their "ibasho", grow, and play an active role in their community. The framework was developed in recognition of the worsening state of children and youth. The data from the "Children and Youth Index Board" revealed a link between "ibasho" and their self-affirmation. To boost the self-esteem of Japanese high school students, which is thought to be low in comparison to other countries, it is deemed crucial to secure a sufficient sense of "ibasho" for them.

The Japanese term "ibasho" is broadly referring to the sense of belongingness. It has been employed as a highly modern subject and educational phrase, with an inconsistent conceptual definition. What this study and earlier research have in common is that the perception of an "ibasho" is subjectivity and cognition dependent, and that the concept of an "ibasho" involves numerous psychological implications. At its core, "ibasho" is the relationship of connection with others. Self-affirmation, self-usefulness, acceptance, and a sense of security are the primary components of a sense of "ibasho". The objective of this study is to shed light on how adults interact with adolescents and the factors that underpin such interactions.

Case studies were conducted of "Official Theatre", a children's and youth center in Tokyo and at Toyohashi Arts Theatre "PLAT," analyzing interviews, questionnaires, and participant observation data. Adults are observed to respect adolescents' individuality and do not rely on one-directional teaching in order to foster their independence. Additionally, theatrical activities including the limit of the time and format of the theatrical presentation, the flexibility of specialized skills and preparation, the large number of roles, and menial work all contribute to the project's success. Furthermore, all the above factors have proven to contribute to the youth's sense of self-affirmation and active engagement. The case study demonstrated that creating a place "ibasho" for adolescents through theatrical activities can increase their sense of self-affirmation, as the nature of the activities highlights their independence and facilitates adult involvement that is not instructive and respects the individual.

Keywords: ibasho, high school students, theatre, relationships, Yu-Suginami, PLAT

第1章 研究の背景

1-1. 自己肯定感の低い日本の高校生

2021年4月、子ども・若者育成支援推進本部¹は、「子供・若者育成支援推進大綱～全ての子供・若者が自らの居場所を得て、成長・活躍できる社会を目指して～」(以下「大綱」という)を策定した。これは、2010年4月に施行された「子ども・若者育成支援推進法」²(以下「子若法」という)に基づき策定されてきた、2010年、2015年の2次にわたる大綱に続くものである。「子若法」施行の背景には、子ども・若者をめぐる有害情報の氾濫等の環境の悪化や、ニート、ひきこもり、不登校、発達障害等の問題の深刻化があった³。その施行より約10年が経過した現在、新たな大綱策定の経緯には、子ども・若者を取り巻く状況が、深刻さを増しているとの認識が示されている。例えば、厚生労働省・警察庁「令和2年中における自殺の状況」⁴によると、2020年の自殺者数は前年比912人増(4.5%増)の201,081人、2009年以来11年ぶりに増加に転じ、そのうち、19歳までの者が118人増(17.9%増)、20歳～29歳までの者が404人増(19.1%増)となっている。15歳から39歳の死因の第1位を自殺が占める状態が続いていることや、ユニセフによる国際調査結果において日本の子どもの精神的幸福度が38か国中37位となっていること⁵等、多くの子ども・若者が不安を高め、孤独・孤立の問題が顕在化している状況があげられている。

そして、「大綱」において作成、公開された「子供・若者インデックスボード」⁶では、こういった子ども・若者の現状を主観、客観の両面から明らかにするため、「Ⅰ.子供・若者の意識」「Ⅱ.子供・若者及び子供・若者を取り巻く状況」の2部構成でデータがまとめられている。前者の「1.自己について」には、「自己有用感」「今の充実度」「将来への希望」等という項目と並んで、「自己肯定感」という項目があり、「今の自分が好きだ」という自己肯定感を尋ねる質問に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者は46.5%であったという結果があげられている(図1)⁷。日本の若者の自己意識の中で、自己肯定感の低さについては一般的に言及されることも多いが、特に高校生については、「高校生

¹ 2010年4月施行の「子ども・若者育成支援推進法」により、総合的な子ども・若者育成支援のための施策を推進するために設置されたものであり、内閣総理大臣を本部長とし、全閣僚により構成される。

² 日本国憲法及び児童の権利に関する条約のっとり、総合的な子ども・若者支援施策を推進する目的のもの。国における本部の設置、子供・若者育成支援施策の推進を図るための大綱の作成、地域における子供・若者育成支援についての計画の作成、ワンストップ相談窓口の整備といった枠組みの整備、社会生活を円滑に営む上で困難を有する子供や若者を支援するための地域ネットワークの整備を主な内容とする。

³ 「子若法」第1章総則(目的)第1条より。

⁴ 厚生労働省自殺対策推進室・警察庁生活安全局生活安全企画課「令和2年中における自殺の状況」2021年3月。
(<http://www.nhlw.go.jp>、2021年12月15日閲覧)

⁵ ユニセフ・イノチェンティ研究所「レポートカード16 子どもたちに影響する世界 先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か」による。(https://www.unicef.or.jp/library/pdf/labo_rc16j.pdf、2021年11月12日閲覧)。

⁶ 内閣府「子供・若者インデックスボード」2021年6月。子供・若者の生育状況等に関する各種指標を整理し、可視化したデータ集。(https://www8.cao.go.jp/youth/index_board/pdf/print.pdf、2021年11月12日閲覧)。

⁷ 内閣府「子供・若者の意識に関する調査(令和元年度)」2019年11月。全国の13歳以上29歳以下の者を対象にしたインターネット調査によるもの。標本数は10,000。これを出典としたデータである。

(<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r01/pdf/s2-1.pdf>、2021年11月12日閲覧)

の心と体の健康に関する意識調査—日本・米国・中国・韓国の比較」⁸において、自己肯定感に関する4国比較がなされ、日本の高校生は自己肯定的な項目に対する評価が米中韓に比べて低く、しかもその差が大きいと分析されている。この調査の「自己評価」質問項目には、「あまり得意なことがないと思う」「何をやってもうまくいかないことが多い」「価値のある人間だと思う」「いまの自分に満足している」などがあり、それらに対して、日本の高校生は自己を肯定的に捉えていない。

1-2. 高校生の自己肯定感を高める取り組み

こういった高校生の自己肯定感の低さについて、文部科学省では、教育再生実行会議⁹において、2016年10月より、「子供たちの自己肯定感が低い現状を改善するための環境づくり」という検討会が行われている。そして、その審議の積み重ねを「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上（第十次提言）」¹⁰にまとめている。そこでは、高校生の自己肯定感を育むために、自己肯定感を次の二つの側面から捉えることが可能と示されている。一つは、勉強やスポーツ等を通じた競い合いなど、自らの力の向上に向けて努力することで得られる達成感などを通じて育まれる自己肯定感であり、もう一つは、自らのアイデンティティに目を向け、短所を含めた自分らしさや個性を冷静に受け止めることで身につけられる自己肯定感である。自己肯定感を育むための提言としては、幼児から高校生までの生活習慣改善に向けた家庭教育支援の推進、学校内外での多世代交流・異年齢交流等の推進、青少年教育施設などの地域資源の活用や、民間機関等との連携による体験活動の積極的推進、民間業者と協働した「ネットいじめ」への相談体制の構築、放課後の居場所づくりの推進、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学校指導体制の充実や業務改善の推進等があげられている。

一方、1-1で記した「大綱」では、居場所に注目し、その副題を「～全ての子供・若者が自らの居場所を得て、成長・活躍できる社会を目指して～」としている。同時に前述の「子供・若者インデックスボード」でも、居場所の数と自己認識の関係を分析し、「自己肯定感」や「今の充実感」など自己認識の前向きさは居場所の数（自室、家庭、学校、地域、職場、インターネット空間）の多さと概ね相関関係にあるというデータが示されている。そのうえで、子供・若者の成長のための社会環境の整備の一つとして、多様な居場所づくりを挙げている。

⁸ 国立青少年教育振興機構「高校生の心と体の健康に関する意識調査—日本・米国・中国・韓国の比較」2018年3月。（https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/126/、2020年10月29日閲覧）。

⁹ 2013年1月より開催されている、21世紀の日本にふさわしい教育体制を構築し、教育の再生を実行に移していくための会議。

¹⁰ 文部科学広報「教育再生実行会議第十次提言について」2017年6月、内閣官房教育再生実行会議担当室。

1-3.研究の目的

以上述べてきたように、各国に比して低いとされた日本の高校生の自己肯定感を高めるためには、彼らの居場所の数を確保することが必要であると考えられる。彼らが、学校、家庭以外の居場所を持つことは、彼らの自己肯定感が高まる可能性を示すものといえる。本稿では、高校生を対象とする居場所についてどのような研究がなされているのかを整理し、それがどのようにして作られているのかを検証していく。そして、自己肯定感を高める可能性のある活動として演劇に注目する。演劇活動を対象とする根拠は第 4 章で詳述するが、近年、演劇活動は教育や社会包摂などの分野で活用されている。演劇活動を通した、学校、家庭以外での自己肯定感を高める可能性のある高校生の居場所づくりの手法と仕組みを明らかにすることを目的とする。本稿では、高校生の年代の者を若者と記す。

以下、本稿の構成を述べておく。第 1 章では、研究の背景と目的を示した。第 2 章では、居場所研究全体において何が述べられているのかを総括的にながめてみる。第 3 章では、若者の居場所に関する研究について整理する。第 4 章では、演劇活動と若者の居場所づくりについて述べ、研究の目的、方法と事例の選定について明示する。第 5、6 章では事例について記述し、大人の若者への関わり方を分析し、その関わり方を生み出す仕組みについて論じる。

第2章 居場所に関する先行研究

先行研究の整理に先立ち、居場所という言葉そのものがどのように使われているかということ述べる。言葉は概念であるが、居場所という言葉は一般的にも用いられているので、学術的な研究を整理する以前にその用いられ方を確認していく。

2-1. 居場所という言葉

今では日常的に目にする居場所という言葉が注目され始めたのは、学校教育において不登校問題が取り上げられるようになった1980年代のことである。その当時から、居場所という言葉は心理的な意味を持って使われていた¹¹。1980年代半ばには、居場所といえば、東京シューレ¹²のような学校に行けない子どもたちのフリースペースやフリースクールをさし、居場所は子どもの学校以外の行き場として注目されるようになった。1992年には、文部省（現文部科学省）学校不適応対策調査研究協力者会議が「登校拒否（不登校）問題について—児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して」という報告を出し、学校内での「心の居場所」づくりの必要性が指摘されたことにより¹³、居場所が不登校の子どもや若者の状況を表現し、支援を行うための場としての意味を持つようになっていった（藤原 2010）。

その後、居場所という言葉は、子どもに限らず様々な困難を抱える人たちを支援する場という意味で用いられるようになっていき、一般的な問題を表す言葉として共有されるようになった（服部 2017、石本 2009）。また、新聞紙上において「居場所」や「居場所がない」といった表現も頻出するようになり、居場所という言葉は、きわめて現代的なテーマ、教育的な用語として使用されている（藤原 2010）。

藤原は、居場所がきわめて日本的な言葉であると述べ、国外では日本のように心理的側面を含めた居場所のような言葉の概念がないために研究はほとんど行われていないのが現状であるとしている。杉本・庄司（2006）も同様に海外の研究は行われていないと指摘している。実際に、これまでの研究でも「居場所」の英訳には、「Ibasho」あるいは、「Ibasyo」等が充てられており、その後に補足説明がなされていることが多い。その補足説明も、研究者間で統一されているとは言い難い（中藤 2015）。例えば、藤原（2010）は、「i-basyo」（a psychological place where one feels one belongs）とし、杉本・庄司（2006）は、「Ibasho」（Existential Place）としている。中藤（2015）は、心理的側面の含まれた日本語の「居場所」という言葉を海外の言葉に翻訳することの困難さを指摘している。最近では、海外でも居場所研究がなされているが、「Ibasho」の語が用いられているので、「居場所」はやはり

¹¹ 中島ほか（2007）によると、居場所という言葉が新聞記事に登場し始めたのは、1980年代に入ってからである。それ以前には「いどころ」「座る場所」など物理的な側面でとらえられることが多かった。

¹² 東京シューレは、1985年奥地（現NPO法人東京シューレ理事長）によって開設された学校外の学びの場、支援の場である。

¹³ 文部科学省国立教育政策研究所（2015）『生徒指導リーフ』第2版より。

日本の概念であり、その社会構造等に大きく影響される。よって、本稿では居場所という言葉をもとに、日本の居場所研究に着目していく。第2節では、日本国内の居場所についての先行研究全体を概観する。

2-2. 居場所研究の概観

居場所についての研究は数多くなされているが、石本（2009）と中島ほか（2007）が分類した建築、心理、教育、社会の分野が多いといえる。石本は、教育、心理、建築という大分類で居場所についての先行研究全体をとらえ、そのうえで心理学とその関連分野の研究を心理学的立場からの考察と臨床事例や居場所づくり実践からの研究、さらに居場所に関する実証的研究に分けている。中島ほかは、「社会学・教育学系」と「建築学・住居学系」という大分類でとらえ、先行研究の内容を一覧表に整理している。社会学・教育学系先行研究として29件がまとめられた中には、「居場所づくり」というキーワードを用いたものが7件あった。ほかに「居場所感」というものも1件あった。

本稿では、石本、中島ほかの分類などを参考に、キーワードを設定して居場所研究全体を概観するための分類をすることとした。居場所研究を「居場所」そのものの概念、定義、意味、分類についてのもの、「居場所感」として居場所から得られる、もしくはそこに求められる意識・感覚についてのもの、「居場所づくり」という方法論・事例研究のもの大きく三つに分けて整理した。それぞれについて研究の視点となり得る語として考えられるものをプラスしてみた。居場所は物理的空間、場所であることから「建築」という視点を想定し、研究領域が「心理」、「教育」、「社会」であることから、その三つも視点に加えた。キーワードをCinii（NII 学術情報ナビゲータ）により検索した結果をまとめたものが表1である。

居場所が学校教育問題から端を発したテーマであることからもうなずけるように、教育の視点から論じられているものが1306件ある。建築分野は977件であり、物理的な観点中心に論じられている。その数の多さは、現在、建築物としての居場所が求められていることや、建築物に居場所の機能を持たせる点が求められていることを示している。社会というキーワードも977件見受けられるが、社会という言葉は幅広いものであり、そこには地域社会や社会参加の視点も含まれ、増えつつあるといえる。4つの中では、心理の分野が最小件数であるが、それは他の分野に比して専門性が高くなるという点と、心理的な意味を持つ居場所であるので分野横断的に論じられているのではないかという点が理由として考えられる。

居場所感というキーワードのみでの検索数は207件であり、教育という語をたしてみると78件、社会という語では30件となる。これは、居場所を論じる際には、居場所感という心理面に言及することがあることを示している。建築分野では3件しか見受けられず、居場所の心理面についての検討はあまりなされていない。

居場所づくりというキーワードは、石本、中島ほかともに先行研究の分類としてあげ、実践的な研究、事例研究といった研究が多数なされていることを指摘している。ここでは特に、教育と社会の分野が多い。学校教育、社会教育、生涯教育に関連して居場所をつくらうとする取組があることが見て取れる。

現在の居場所研究は、建築、教育、心理、社会の 4 つの分野で研究されているものが多く、その内容は、幅広く居場所に関するもの、居場所感など心理的なものを中心となるもの、居場所づくり、事例研究などであるといえる。

本稿では、若者である高校生の自己肯定感に着目し、学校、家庭以外の居場所づくりの手法と仕組みについて明らかにすることが目的であるので、心理、社会分野の先行研究に注目し、「居場所」「居場所感」「居場所づくり」について、順に整理していくこととする。物理的な検討が中心である建築分野と、学校教育の場が対象となる教育分野については、取り上げないこととする。

2-3.居場所

2-1 で述べたように、1992 年、文部省は、学校不適応対策調査研究協力者会議報告「登校拒否（不登校）問題について―児童生徒の『心の居場所』づくりをめざして―」において「心の居場所」を「自己の存在感を実感し精神的に安心していられる場所」と定義し、学校がその役割を果たすことを求めた。しかし、文部省の定義は必ずしも共通の認識として捉えられておらず、居場所そのものの定義は一貫しておらず、さまざまな視点で捉えられている。

例えば、藤竹（2000）は、他者との関わりの視点から、居場所を社会的居場所（他人によって自分が必要とされている場所、職場など）と、人間的居場所（または、個人的な居場所、自分を取りもどすことのできる場所、自室など）に分類し、その定義を「人間がそこに居ることを、他人によって必要とされている場所である。また、本来の自分を取り戻すことのできる場所である。」（48 ページ）としている。住田（2003）は、居場所を分類することにより、その構成要因に迫ろうとしている。住田は、社会的と個人的という対立概念で構成されている関係性の軸と、社会的場所と個人的場所という対立概念で構成されている空間性の軸で 4 象限分類を試み、臨床教育社会学の視点から、「子ども自身がホッとして安心できる、心が落ち着ける、そこに居る他者から受容され、肯定されていると実感が出来るような空間」（5 ページ）と定義している。杉本・庄司（2006）は、居場所を「いつも生活している中で、特にいたいと感じる場所」（290 ページ）と定義し、他者の存在により、「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「家族以外の人いる居場所」に分類して調査を行っている。その結果、発達段階により選択される「居場所」が異なることを示している。

こういった状況について藤原（2010）は、定義を整理・検討した研究はほとんど存在していないとし、定義が確立していないことによる問題点として、ある場所が居場所となっているかどうかを判断する明確な基準がないことをあげ、居場所の定義の整理・類型化を試みた。

そして、「①社会生活の拠点となる物理的な意味での場、②自由な場、③居心地がよく、精神的に安心・安定していられる場もしくは人間関係、④一人で過ごせる場、⑤休息、癒し、一時的な逃避の場、⑥役割が与えられる、所属感や満足感が感じられる場、⑦他者や社会とのつながりがある場、⑧遊びや活動を行う場、将来のための多様な学び・体験ができる成長の場、⑨自己の存在感・受容感を感じさせる場、⑩安全な場」（171～172 ページ）という 10 の類型をまとめた。さらに、藤原は、ある場所を居場所として捉える際には、認知されるその場所の状態が個々人によって異なることを指摘し、その個人差を解消するために、彼のあげた定義の 10 類型のうち 1 つでも当てはめることが可能であれば、そこが居場所になれる可能性があることを認知してよいと述べている。

以上のように、さまざまなことが言われているが、共通することとしてとりあげられているのは、ある場所を居場所であると捉えることは当事者の主観・認知に左右されるものであり、居場所概念は心理的な意味を多く含んでいるということである。そして、居場所概念の中心には、他者とのつながりという関係性がおかれているということも指摘されている。

次節では、居場所の心理的な意味についての先行研究を整理する。

2-4.居場所感

居場所概念の心理的意味に関する先行研究には、居場所感についてのものがあげられる。居場所感とは、居場所で得られる感覚や居場所でもたらされる感覚であり、対人関係が大きく影響を与えるものであると考えられている（益川 2019）。西中・石本（2017）は、「『居場所感』を感じられる、物理的空間や対人関係、時間や状況を含む『場』を居場所と定義」（34 ページ）し、居場所感の要素を「被受容感」「自己有用感」「自己存在感」「充実感」「安心感」「自由の確保」「本来感」「内省」と分類、命名している。そして、これらは個人が主観的に居場所を規定する要因であるとしている。こういった居場所感が自己肯定感に影響するという見解があり、居場所感を高めることが自己肯定感の向上につながるということが指摘されている（小野田・吉岡 2014、石本 2010、芝崎・芝崎 2016、甲村・飯田 2013）。

居場所感に類するものとして、居場所の心理的機能、「居場所がある/ない」という意識について明らかにしようとする研究も存在する。杉本・庄司（2006）は、居場所の心理的機能には、「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の 6 因子があるとして、発達段階により選択される居場所が異なることを明らかにした。くわえて、「自分一人の居場所」では、「行動の自由」「思考・内省」「他者からの自由」が高く、「被受容感」「自己肯定感」が低いという傾向があり、反対に「家族以外の人という居場所」では「被受容感」「自己肯定感」が高く、「行動の自由」「思考・内省」「他者からの自由」が低いということを示した。

このように、当事者が居場所を認識するときに感じられるものが居場所感であり、その主たる要素に自己肯定感、自己有用感、被受容感、安心感があることが指摘されている。次に、

居場所感を有する居場所はどのような具体的展開をみせているのか、居場所づくりについての研究を整理する。

2-5.居場所づくり

個々人の認知によって異なる様相をみせる居場所は、個々の居場所が持つ固有性の面からの分析と、それらを組み合わせて個人が持っている複数の「居場所」を包括的に捉えた分析も必要とされ、多くの検討・分析がなされている。ここでは、居場所についての事例研究を中心に居場所づくり研究として整理していく。

居場所づくりの先行研究でとりあげられた事例は、支援目的、対象、場所によって分類できる。居場所づくりの目的は何らかの支援であることが多く、対象者の抱える問題に着目すると、「つながり」「適応」「生活」「学習」「自立」「健康」という6項目に整理にできる。「つながり」とは、他者との関係構築支援を目的とし、「適応」とは、学校、家庭、職場、地域社会、市民社会などの場での円滑な活動・生活支援を目的とし、「生活」とは、人間らしい衣食住生活をおくる支援を目的とする。「学習」とは、学校教育や対象者の不足する部分を習得という方法で補う支援を目的とし、「自立」とは、就労、社会参加支援を目的とし、「健康」は、治療、健康増進、各種予防、防災支援を目的とする。次に、その対象は、子ども（小学生まで）、高齢者、要介護者、障がい者、疾病を抱える人、母子家庭、不登校、引きこもり、社会的に疎外されている人、生活困窮者など、何らかの支援を必要とする人たちが多く、さらに、その場所は、学校（相談室含む）、公共施設（図書館・美術館・スポーツ施設を含む）、コミュニティフリースペース（地域集会所・生協・NPO など）、子ども食堂、市民食堂、カフェ、学童保育、病院（カウンセリングルーム含む）、養護施設、高齢者施設、公園（遊び場）などがあげられる。以上をまとめたものが表2である。

以上のように居場所づくりの様相を概観した結果、若者が対象となっている事例研究は少ないことが指摘されている（石本 2010、斎藤ほか 2008、中島ほか 2007、中島ほか 2011、渡辺ほか 2006）。また、顕在的に何らかの支援を必要とする人が対象となっているものが多く、支援目的も、困窮度が高いものから取り上げられていて、日常的・全般的な支援目的のものは少ないことも述べられている（中島ほか 2007）。

服部（2017）は、こういった居場所づくりを自尊感情や自己肯定感の充足に着目した活動であり、「かかわり」と「参画」を重視する特徴があるとしている。また、本村（2018）も、子どもの居場所支援において、貧困の状況下にある子どもたちの自己肯定感の低下をとらえ、その向上のために、子どもたちにとって身近な存在である学生ボランティアの果たす役割は大きいと述べている。学校の教師や支援員という役割を持つ大人とは異なり、学生自身が子どもたちに支えられているということがみられ、それが子どもたちの自己肯定感の向上を促す可能性を示唆している。

以上をまとめると、居場所づくりは自己肯定感を高めることに着目した活動であり、何らかの支援を目的として行われているが、若者対象のものは少ない。居場所づくりの様相は多様であるが、いずれも支援者（主催者）と被支援者（参加者）の関係性が重要であると指摘されている。居場所は、当事者である被支援者や参加者の主体性や主観に拠るものであるので、「参画」を重視する視点が生まれることとなる。しかし、当事者主体の取り組みを、支援者や主催者が設計していくことは難しく、今後の課題であると考えられている。

本章では、居場所についての研究の全体像を整理してきた。そこで次章では、本稿の研究目的である若者の居場所づくりについて、先行研究を整理していく¹⁴。

¹⁴ 居場所づくり研究に関連した研究としてあげられるサード・プレイス研究について言及しておく。サード・プレイスとは、「人々が日々の生活の中で多くの時間を過ごす自宅（ファースト・プレイス）や職場・学校（セカンド・プレイス）に次ぐ第三の居場所のことであり、アメリカの都市社会学者レイ・オルデンバーグが著書 **THE GREAT GOOD PLACE**（邦題『サードプレイス』）で提唱した概念である。」（高谷 2019、1 ページ）具体的には、「フランスのカフェ、イギリスのパブやスペインのバルのような居酒屋、書店、理髪店、公園など」（高谷 2019、1 ページ）のような場所のことである。近年、日本でもオンラインコミュニティやツイッター、コミュニティスタジオなどを事例として研究する動きがある。さらに、サード・プレイスを社会的居場所（藤竹 2000）に類する概念と捉える研究者（相良 2020）も表れている。しかし、サード・プレイスは「自宅や職場において他者からの承認を経て確立した自己像を有する個人が、社会的望ましさから解放され精神的な安寧や新たな関係資本を確保するための居場所」（高田 2018、435 ページ）と考えられていて、本稿で扱う居場所概念とは性格を異にする。

第3章 若者の居場所に関する先行研究

3-1. 若者の特性とその居場所

一般的にもいわれているように、若者は、心理的にも、経済的、社会的にも自立に向かう年代であるが、海野・三浦（2007）は、心理学において、高校生を含む青年期の特徴として「自分とは何か」ということに疑問を持つようになるときであり、友人への一時的な依存を通して、親からの分離および自立が可能になっていくときであると述べている。

2-4 で述べたが、杉本・庄司（2006）は、発達段階により選択される居場所が異なることを明らかにしたが、具体的には、小学生では「家族のいる場所」を、中・高生では「自分ひとりの居場所」を自分の居場所として多く選択することを指摘し、そこで得られる心理的機能は「思考・内省」「行動の自由」「他者からの自由」であるとしている。高校生の居場所については、西中・石本（2017）も、リラックスできてありのままでいられ、自分を受け入れてくれる対人関係がもてるような「私的居場所」と、自分の成長を実感でき共に目標に向かって努力する関係性や自分を必要としてくれる関係性を築き、自分を振り返りみつめることができる「社会的居場所」とに分類されることを示した。また、住田（2003）は、成長期にある者にとって居場所において共感的な他者との関係を通して自己概念を再認識できることの重要性を指摘している。

これらは、若者が自己についての意識の高まりによって「自分とは何か」を考える時期であるということと一致し、若者の居場所の特性といえる。若者の居場所で、他者から自由になることによって得られるものと、共感的な他者との関係を通して得られるもの、その両者には自己の再認識という点があることが共通している。

2-5 で、服部（2017）が、居場所づくりは自己肯定感を高めることに着目した活動であり、「かかわり」と「参画」を重視する特徴を持つと指摘したことをみたが、若者の居場所づくりには、自己の再認識という点を付け加えておく。本稿では、若者の居場所づくりを自己の再認識の機会をもたらし自己肯定感を高める活動とし、「かかわり」（関係性）と「参画」を重視するものととらえていく。次節では、若者の居場所づくり研究を整理していく。

3-2. 若者の居場所づくり

小中学生に比して、また、3-1 で述べたような若者が自立に向かうという特性からも、若者を対象とする具体的支援は顕在化しにくく、支援目的を絞る難しさがある。困窮度に応じた支援というよりは場所を提供して、若者の成長を促す、若者自身のニーズに応えるという取り組みが多い。提供されている場所としては、フリースクール、学校（相談室・校内カフェ含む）、公共施設（図書館・美術館・スポーツ施設を含む）、コミュニティフリースペース（地域集会所・生協・NPO 法人など）、病院（カウンセリングルーム含む）などがあげられている。具体的、物理的な場所の他に、インターネット上の場所も居場所として考えら

れる。近年、SNS などのインターネット上のコミュニケーションツールが日常生活に浸透し、特に若者はスマートフォンの保持率が高く、その利用頻度も高くなっている。藤原(2010)は携帯電話等のバーチャルな世界における居場所についても考察されるべきであるとし、加えてテレビや映画、書籍などその時代を反映したものに関する居場所研究もすすめられる必要についても言及している。最近では、わずかではあるが、若者のインターネット上の居場所についても研究がなされている。藤野(2017)は平均年齢 21.9 歳の 103 名の対象者にアンケート調査を実施し、その分析結果として、ネット上でも現実と同程度の心理的居場所感が得られるが、その性質については同質であるとはいえず、ネット上の居場所は藤竹(2000)のいう個人的居場所に近いのではないかと示唆している。

中島ほか(2011)は、公共施設を利用した中高生のための居場所形成について、その実態をまとめ、中高校生の事業参加状況の問題を指摘した。大人が主体となって企画・運営される事業には中高生の興味・関心を引くものは多くないことが考えられるとしている。大人が若者のニーズに応えることが難しく、若者の居場所づくりが場所提供中心となりやすい背景がうかがえるが、この中島ほか(2011)の指摘は、居場所づくりでの若者の「参画」の視点の重要性も示している。

「参画」を重視する若者の居場所づくり研究として、ユースワーク研究をあげることができる。ユースワークとは、大人による若者の支援の総称(田中 2012)であり、1960～70 年代に主にイギリスでの議論が紹介されるかたちで日本でも議論され始めた(青山 2017)。日本では、戦後、「青少年育成」ないしは「青少年健全育成」の語を用いて、「大人」である世代が「子ども・若者」を指導、支援、保護することが盛んであったが、1980 年代にはその限界がみえ、それに代わって「居場所づくり」が提唱されるようになったといわれている(田中 2012)。近年のユースワークをめぐる議論は、1990 年以降の青少年の「居場所」をめぐる議論の延長線上に位置づくものである(青山 2017)。田中(2012)は、ユースワーク研究においては、「若者の居場所」を論じるが、「居場所のない若者に居場所を提供してあげるといような慈善的スタンスをとるものではない」(8 ページ)と述べている。また、田中は、居場所は他者によって与えられるものではなく、自ら見いだしていくべきものであり、若者は一方では支援される対象ではあるが、同時に他者を支援したり、社会を形成したりする主体でもあると指摘し、その意味で「若者の参加」や「社会への関わり」が一つの大きなテーマであると述べている。この若者自らの社会への関わりに注目する点は、なんらかの支援を目的とする居場所づくり研究とは性格を異にする。居場所づくり研究、ユースワーク研究ともに、若者当事者の主観・認知を重視し、若者を中心に据えて議論するという点は共通しているが、両研究は性格の異なるものと考えられる。

若者の居場所づくり研究の多くは、前述の中島ほか(2011)のように、若者の参画や参加をどのように促すかという視点を持つ。尾崎(2013)は、「居場所における参画」(居場所の設置や運営に関して若者が意思決定や実行過程に加わること)として「ゆう杉並」(杉並

区立児童青少年センター) の中高生運営委員会の事例を研究した。会議を通して仲間意識が形成され、集団の一員として主体的に行動する委員が多く見られるようになったことを示し、中高生の背中を押す「良きアドバイザー」に徹する職員の存在が重要であったとしている。仲間意識などの若者同士の関係性は、居場所に参加、参画することで育まれるものであり、その参加、参画を後押しするものとして大人の関わりがあるといえる。

参加、参画を促す関係性を育む居場所づくりには、演劇活動を用いたものがある。古賀(2019)は、フリースクールに通う中学生を対象とし、子どもたちが自信やプラスの感情を持ったり、コミュニケーションに関する変化をみせたりすること、また、子ども同士の関係性の変化などを目的として10回の演劇ワークショップを行い、その結果を検証している。フリースクールという居場所において、演劇ワークショップによって、参加者同士の関係性の変化や、居場所感といえる自信やプラスの感情という参加者の心理的側面へのアプローチを試みたこの研究では、子どもたちに変化のきざしが見えながらもそれが彼らの日常生活にまで及ばなかったことを課題としている。しかし、継続的な活動となれば、さらなる変化が見込めるのではないかという期待が関係者である大人に持たれたことをひとつの成果に挙げている。奥地(2019)は、フリースクール「東京シュレー」で、1985年開設当初より現在まで様々な演劇活動がなされ、それは、子どもたちが主体的に取り組もうとした活動であり、スタッフである大人の意図したものではなかったが、その活動による子どもたちの自己存在の確認や、やりきったという自信と達成感が、子どもたちを生き生きさせてきたと主催者としての実感を示している。

若者の主体性を重んじながら、支援者・指導者・職員などがどのように関わっていくかを検討する研究は多く、若者と大人が対等な関係で居場所をつくりあげることが重要視されている(太田 2000、尾崎 2013、川上 2008、新谷 2001、中島ほか 2011)。その点に関して、阿比留(2020)は、「大人によってひらかれる『居場所』の活動は、しばしば『居場所づくり』と称されて展開されている。この『居場所づくり』という言葉は、第三者である大人が子ども・若者の『居場所』に対して問題意識をもって、意識的に介入することで『居場所』をつくろうとする姿勢を端的に示した言葉である」(62-63 ページ)と述べ、若者の居場所への大人の関わり方について論じている。若者自らが居場所を勝ち取っていけるよう手を添えることが大人の重要な役割の一つであると述べている。その大人の関わり方に関連して、川上(2008)は、茅野市こども館「CHUKO らんどチノチノ」の中高生世代の居場所づくり実践において、居場所が中高生世代の現状に合うような機能を発揮するための原則として「非学校」「非家庭」「非連携」「非指導」「受容」「見守り」「教育」の7点が成立するとした。その7点を施設職員・地域住民という大人が担っており、中高生世代の主体的参加を促していると述べている。

以上の先行研究の整理をして明らかになったことは、若者の主体的参加、自己肯定感の高まり、つまり、若者の居場所感の醸成に大人がどのように関わっていくかが重要ということ

である。しかし、先行研究ではその関わり方についての研究は少なく、居場所感を醸成する具体的な活動における大人のその関わり方は明らかになっていない。

次章では、研究目的を新たに記し、研究の方法を述べていく。

第4章 研究の目的と方法

4-1. 研究の目的

第1章で述べたように、現在、若者の自己肯定感を高めるために、若者の居場所の数を増やすことが求められている。先行研究では、若者の居場所づくりは、若者に自己の再認識の機会をもたらし、彼らの自己肯定感を高める活動と捉えられることが提示された。そして、自己肯定感を醸成するには大人の関わり方が重要であるにも関わらず、十分に研究されていないこともわかった。このような中、演劇ワークショップを対象に、関係性に着目した研究がなされており、演劇活動を通して関係性や居場所感への前向きな変化がもたらされる可能性があることが示されている。

そこで、本研究では、自己肯定感を高める可能性のある継続的な演劇活動を事例に、若者の居場所感の醸成につながる大人の関わり方を明らかにする。演劇活動での主体的参加者である若者への主催者、支援者としての大人の関わり方と、それを生み出す仕組みや手法を解明することで居場所づくりの新たな可能性を提示したいと考える。

4-2. 関係性、自己肯定感を育む演劇活動

3-2 でみたように、演劇活動を用いた関係性や自己肯定感を育む居場所づくりの実証的な研究は、古賀（2019）のもののみであるが、演劇活動やその手法研究は、多く行われている。本節では、演劇活動を通じた取り組みの先行研究について整理する。先行研究では、コミュニケーション能力の育成などの教育的効果、参加者の実感の変化、参加による自己効力感・自己肯定感の向上、制作者と参加者の関係性構築とコミュニティ醸成の効果など様々な検証が試みられている（伊藤 2017、古賀 2015、成澤 2019、服部 2010、松井・田室 2020、松本・安井 2019）。古賀・藤本（2018）は、演劇の手法を問題の解決に適用する応用演劇によるホームレス就労自立支援の実践を参加者のアンケート調査と心理テストにより分析した。その結果、参加者のコミュニケーションに関する意識の肯定的変化を明らかにした。

しかし、澁谷（2017）は、人間関係を学ぶものとしての演劇の重要性は提言されているが、演劇的なアプローチを系統的に検討した研究はほとんどみられないと述べている。そのうえで、澁谷は、対人援助職（医療、教育、福祉領域にわたる職業の総称）を対象に演劇的方法を取り入れた心理教育的アプローチを作成するために、演劇ワークショップを検討した。その結果、様々な人間関係を形成する必要がある対人援助職において、演劇的手法は有効であるとしている。また、中野（2018）は、自治体と大学が主催の演劇共同事業の参加者同士が演劇活動を通してどのようなネットワークを構築するかを研究し、「ルール」の共有」「場所の共有」「時間の共有」「本番前の感情」「演出家による調整」「人生の共有」「メンバー間の調整」「上演後の関係」という8つの構築要因を提示した。「無駄」な要素の多い演劇が持つ「非効率性」がネットワーク構築を促進させていることも明らかにした。

先行研究では演劇活動の有効性や重要性は提示されており、関係性や自己肯定感を育むということも述べられている。本稿では、この点をふまえて、継続的な演劇活動を通じた居場所づくりに注目していくこととする。居場所を規定する居場所感とは演劇活動によって参加者にもたらされる自己効力感・自己肯定感の向上、参加者同士、または制作者と参加者の関係性構築とコミュニティ醸成の効果などと同様のものだといえる。演劇活動の特性として、答えがないものを協働して創り上げること（成澤 2019）、自己表現や自己決定の機会が多いこと（伊藤 2017）などがあげられているが、そこにも参加者の自己肯定感を高める居場所づくりへの可能性が示されている。

本稿の研究の方法は 4-4 で詳述するが、継続的な演劇活動を通じた若者の居場所づくりの事例研究という方法をとる。次節では、若者対象の演劇活動が学校・家庭以外の場所で実施されている現状を調査した結果をまとめ、継続的な演劇活動を通じた居場所づくりの事例選定の詳細を述べる。

4-3. 事例選定

若者に向けた演劇活動を行っている場を調査するにあたり、文化施設、劇場の悉皆調査は難しく、対象を絞るために、文化庁の補助金に着目した¹⁵。助成を受けて演劇活動を行っている文化施設、劇場は、報告書¹⁶の提出が義務付けられており、取り組み内容の確認ができる。補助金を受けている施設のリストから、複数年にわたる助成を受けている「劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業」と、単年度である「地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業」のうち補助金を受けているところを抽出し、報告書を確認した。これらの補助金に着目したのは、予算をとって安定した取り組みを目指していることが考えられるからである。報告書の内容に基づき、若者対象事業を抽出した。その結果を、表 3 にまとめた。

表 3 でリストアップした 5 つの活動のうち、前年度も含めて継続的に 2020 年度実施予定のもの、短期間ではなくある程度長期にわたって実施されるものに対象を限定し、数日間の実施である「こまばアゴラ劇場・アトリエ春風舎」と、2020 年度は企画がコロナ禍のため中止となった「北九州芸術劇場」を除外した。2020 年 8 月～10 月、実際に現地施設に赴き、その結果、「富山県利賀芸術公園」と「鳥の劇場」では、例年若者対象企画が継続的に行われているが、演技と演劇スタッフワークの講習会の位置付けで、若者を育成する性格であったので除外した。「兵庫県立尼崎青少年創造劇場」は全年齢の志望者対象の歴史ある教育施設であったので除外した。「穂の国とよはし芸術劇場」は、7 年目の活動を継続中であり、劇場独自の活動報告には演劇上演に際しての高校生の所感等も掲載されていた。よって、

¹⁵ 令和 2 年度文化芸術振興費補助金。現在は、独立行政法人日本芸術文化振興会が実施している。

¹⁶ 平成 30 年度劇場・音楽堂機能強化推進事業（劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業）自己点検報告書（https://gekijo-ongakudo.ntj.jac.go.jp/hyouka/2019hyouka_list1.html、2021 年 11 月 21 日）、並びに、同じく（地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業）成果報告書（https://gekijo-ngakudo.ntj.jac.go.jp/hyouka/2019hyouka_list2.html、2021 年 11 月 21 日）。

「穂の国とよはし芸術劇場」を文化施設、劇場の事例候補とした。なお、劇場として抽出できた事例はこの1件のみである。

演劇を専門としない施設における取り組みにも目を向け、劇場以外の場所での事例を検討した。場所提供型の若者対象の居場所として23年間活動している東京都杉並区立児童青少年センターに「オフィシャル演劇」という活動があることがわかり、児童館という福祉施設での演劇活動を通じた居場所づくりの事例として候補に加えた。

演劇活動を通じた居場所づくりは劇場、児童館の他に、NPO法人でも展開されているのではないかと考え、事例を探した。インターネット上のCANPAN FIELDS¹⁷サイトで「若者」「演劇」「居場所」のキーワード検索をしたところ、1件見当たった。NPO法人「北摂こども文化協会（大阪府）」が実施している「大阪高校生演劇フェスティバル in 池田」の活動である。この活動は学校単位での参加によるものであり、若者個人の意志によるものではなかった。よってこの事例は除外した。

以上のように事例選定についての調査を実施し、穂の国とよはし芸術劇場の「高校生と創る演劇」と杉並区立児童青少年センターの「オフィシャル演劇」の二事例を対象とした。その一つ目の理由は、長年継続した活動であることである。「高校生と創る演劇」は7年目、「オフィシャル演劇」は8年目の活動であり、その実績の経緯を見ることが可能である。二つ目は、それぞれ専門家とスタッフという大人と、若者の活動であることである。演劇の専門家が大人に加わっていることで、演劇活動を通じた居場所づくりの特性が見られるのではないかと考えた。三つ目は、長期間にわたる活動であることをあげる。それぞれ一時的なものではなく、4か月から11か月の期間、実施されている。大人と若者、同一メンバーで長期にわたって活動することで関係性も生まれやすいと考えられる。四つ目の理由には、両活動の違いがある点をあげる。「高校生と創る演劇」は劇場がチケット販売する上演目的で実施する活動だが、主催者の意図しないところで若者の居場所となっている可能性を含んでいる。それに反して、「オフィシャル演劇」は主催者が意図して作った若者の居場所での活動であり、そこに演劇活動が取り入れられている。それぞれ、劇場と福祉施設という性格の異なる場所での企画を比較対照することで、両者の違いが居場所づくりや若者と大人の関係性の相違点や共通点を生み出すのか否かという検討も可能となる。以上四点から、演劇活動を通じた居場所づくりでの主体的参加者である若者への主催者、支援者としての大人の関わり方を明らかにするため、対象事例を「オフィシャル演劇」と「高校生と創る演劇」に決定した。

¹⁷CANPAN FIELDS 日本財団運営の web サイト、NPO 活動支援プロジェクト。（<https://fields.canpan.info/>、2021 年 11 月 21 日閲覧）

4-4.研究の方法と分析の視点

本稿では、演劇活動を通じた居場所での若者への大人の関わり方を明らかにするため、杉並区立児童青少年センターの「オフィシャル演劇」と、穂の国とよはし芸術劇場の「高校生と創る演劇」を対象とした事例研究を行う。2020年8月21日～2021年12月12日の間に、参与観察調査、半構造化インタビュー調査、アンケート調査、文献資料調査を実施し、データを収集した。その調査一覧を表4、5にまとめた。それらのデータ全てをもとに、若者と大人に分けてデータを整理し分析する。

第5章 杉並区立児童青少年センター「ゆう杉並」の「オフィシャル演劇」

5-1.施設の概要

5-1-1.設立の経緯と施設概要

杉並区立児童青少年センター「ゆう杉並」（以下、「ゆう杉並」）は、東京都杉並区が1997年に全国の自治体に先駆けて開館した、中高生を主な対象とする児童館¹⁸である。開館の契機となったのは、中高校生の声である。1990年ごろ杉並区内の児童館の事業内容は、中高生が利用したくてもスペースもなく内容も彼らのニーズに合うものではなかった。開館時間の延長など中高生も使いやすくなる取り組みを各児童館で始めていったところ、徐々に中高生の利用が増え、中高生が楽しめる児童館を建ててほしいという要望があがってきた。児童館職員も区の施策に活かすべく働きかけ、利用者である中高生自身の要望を聞き取り、設計に反映させるという方法を採用し、開館3年前の1994年5月「中高校生建設委員会¹⁹」の委員を募集し検討が始まった。その結果「いつでも使える競技のできる広さの体育館」「バンド活動が出来るスタジオ」「テレビゲームが出来る部屋」「閉塞感のない学習コーナー」「何もしなくても居心地の良い開放的なロビー」など、中高生の提言が反映され、中高生の視点に立った、中高生のための施設の誕生となった。その後、「中・高校生運営委員会²⁰」に「中高校生建設委員会」の参画の精神は引き継がれ、23年目を迎えた今も続いている。このような経緯で開館した「ゆう杉並」には、中高生の居場所としての注目が集まり、先行研究も多く見受けられる。

施設は、東京メトロ丸ノ内線南阿佐ヶ谷駅から、徒歩12分、JR中央線荻窪駅から徒歩15分の閑静な住宅地の一角に立地する。地上2階、地下1階の建物であり、1階には、ゆったりとしたロビーを中心にホール、会議室などがある。2階には、スタジオ、ミキシングルーム、テレビゲーム機でゲームのできる鑑賞コーナー、学習コーナーを配している。地下1階には、体育室、工芸調理室もあり、充実した設備である。中高生の居場所・成長支援、参画、心理的援助、行政機関等との連携の推進を運営の基本姿勢とし、「ようこそ、ゆう杉並へ！」の気持ちで暖かく迎える、ロビーワーク²¹の強化、地域連携の推進の3点を2020年度のコンセプトにあげている（杉並区子ども家庭部児童青少年課事業係2020b）。

¹⁸ 児童館とは、児童福祉法40条に規定する児童厚生施設の1つで、地域において児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操をゆたかにすることを目的とする児童福祉施設。（厚生労働省HPより）
（<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/jidoukan.html>、2021年12月1日閲覧）

¹⁹ 「ゆう杉並」の建設の検討のための43名の中高校生からなる組織である。開館時には解散した。

²⁰ 中・高校生運営委員会は、「ゆう杉並」唯一の委員会で、公募や学校推薦により参加する約20名の委員からなり、利用者の代表として、意見の聞き取り、運営への提案、事業への協力を行っている。

²¹ ロビーワークとは、スタッフによるロビー（フリースペース）に集まる利用者たちとの関わり合いやそこで行われる様々な事業の総称。（財団法人横浜市青少年育成協会2008）「横浜市青少年交流センター事業計画」（http://www.city.yokohama.lg.jp/business/kyoso/public-facility/kaku-katsuyou/kodomo/dounyu.files/1103_20180801.pdf、2021年12月4日閲覧）

杉並区の児童館は杉並区子ども家庭部児童青少年課の管轄であり、職員は杉並区子ども家庭部児童青少年課事業係である。その18名が1日3ローテーション勤務で運営にあっている。事業係のうち11名が杉並区職員で、7名が一ヶ月16日勤務の嘱託員である。事業係の平均年齢は30代半ばで、18名中13人が30代であり、11名の杉並区職員のうち10名が保育士資格保持者である。杉並区家庭部児童青少年課では、最長7年間の勤務で人事異動が実施されているので、他の児童館勤務歴のあるものが多い。また、児童館には、学童保育が原則、併設されているという事情があり、幼児や児童と関わってきた経験が豊富な者が多い。「ゆう杉並」には、適切な距離感で親でも教師でもなく友達でもない大人として中高校生に寄り添う職員の存在があると述べた研究者もいる（尾崎 2013、新谷 2001）。

5-1-2.利用形態と事業の概要

原則、第2・4月曜日と年末年始を休館日とし、火曜日から土曜日の午前9時から午後9時、日曜日・祝日の午前9時から午後5時まで開館している。1日あたりの平均利用人数は160.3人、そのうち57.4%を高校生が占めている（杉並区子ども家庭部児童青少年課事業係 2020a）。施設利用形態には、個人による自由利用と登録した団体による占有利用と企画への参加がある。個人による自由利用の場合、保護者同伴の乳幼児と小学生は午後5時まで、中高生は午後7時（日曜日・祝日は午後5時）まで利用できる。第1・3・5月曜日の午前9時から5時には、サンカードによる親子等の特別利用²²ができる。一方、登録団体による占有利用は、中高生のみ午後9時（日曜日・祝日は午後5時）まで利用できる。2019年3月末の高校生の目的内登録団体²³は356件となっている。その内訳を表6に示した。企画への参加は、「ゆう杉並」で実施される様々な単発的、継続的企画事業に参加するものである。以下に、その詳細を記す。

(1) 自主企画事業

中・高校生が「やってみたいこと」を企画立案から実施まで自分たちの手で行うものである。2019年度は、「バンドライブ」「ゲーム大会」「ダーツ大会」等9件が実施された。

(2) 中・高校生運営委員会

2019年度は、19回の定例委員会が開かれ、合宿や施設見学会等のイベントが7回実施された。

(3) 「オフィシャルチーム」事業

「ゆう杉並」を拠点に活動する年度ごとの登録メンバー制のチームであり、継続して参加することが原則である。ゆう杉並の職員企画事業として、学校や学年、地域を越えて共通の興味を追求する仲間と活動する。練習を重ねて技術を高め、仲間関係を深めていくと同時に、

²² サンカードとは、杉並区の日曜日等利用事前承認証であり、その提示で体育室・ロビーの利用ができる。

²³ 目的内登録団体とは、「ゆう杉並」の無料利用のできる目的内である高校生の団体を示す。目的外登録団体もあり、例えば大人の卓球団体などが有料利用している。

出演依頼を受け、地域の施設での催しに参加することもある。現在、「オフィシャルボーカル」「オフィシャル演劇」「オフィシャルアニメ」「オフィシャル鉄道」の4活動がある。

「オフィシャルボーカル」は、講師指導を受けながら、歌の技術向上と区内で行われるイベントや施設での公演を目標に活動する。2019年度は、毎週木曜日18:30～20:45に全36回実施され、登録者は8人であった。「オフィシャル演劇」は、講師指導を受けながら、表現技術の向上と区内で行われるイベントや施設での公演を目標に活動する。2019年度は、毎週水曜日18:30～20:30に全23回実施され、登録者は5人であった。「オフィシャルアニメ」は、アニメの話やアニメをテーマにした様々な活動(キャラ弁作り、お絵かき大会等)を通して、交流を深める。2019年度は、月1～2回主として土曜日に、全13回実施され、登録者は16人であった。「オフィシャル鉄道」は、写真展への参加や、模型走行会、写真撮影講座への参加、他の児童館での鉄道イベントへの協力等の活動をする。2019年度は、月1～3回主として土曜日に、全25回、15:00～17:00に実施され、登録者は14人であった。

(4) その他

職員企画事業には、「オフィシャルチーム」事業の他に、ギター、ベース、ボーカル、演劇等の講座や、団体利用講習会、クライミングやバスケットボール等の、事前申し込みをせず、当日自由に参加できる人数制限を設けない定例活動等の事業もある。

次節では、事例である「オフィシャル演劇」企画の概要を述べる。

5-2.「オフィシャル演劇」企画

5-2-1.設立の経緯

「オフィシャル演劇」設立当時、現在の事業係長が事業係として「ゆう杉並」に勤務しており、「オフィシャル演劇」を立ち上げに関わった。「ゆう杉並」には当初、ダンス、バスケット、バドミントン等のオフィシャルチームがあり、継続的に活動していた。その後、運動以外の企画の増設が検討された。「ゆう杉並」のある阿佐ヶ谷地区には「阿佐ヶ谷ジャズストリート²⁴」という地域イベントがあったことから、「オフィシャルジャズ」が増設された。しかし、「オフィシャルジャズ」は、各楽器の講師が必要で経費がかかりすぎることから継続が難しく断念することとなり、経費がかからず、身軽で何の準備も必要ない演劇という案となり、2011年度より開始された。講師には、現事業係長の友人の、女優であり、ワークショップファシリテーターでもある武藤晃子²⁵を招いた。プロの講師がレッスンしてくれる

²⁴ 阿佐ヶ谷ジャズストリートとは、「阿佐谷のまちをジャズで明るく楽しいまちに」を合言葉として1995年にはじまった東京都杉並区阿佐谷のイベントで、地域住民ボランティアによって運営されている。(阿佐ヶ谷ジャズストリートHPより、<https://asagayajazzstreets.com/about.html>、2021年12月1日閲覧)。

²⁵ 株式会社bamboo所属、演技講師、演出家としても活動している。(bambooHPより、<https://bam-boo.biz/>、2021年12月12日閲覧)。

という点が中・高校生の関心をよび、少人数ながらも 2021 年まで継続して活動している企画である。

5-2-2.活動の概要

2011 年度は、講師が主導し、参加者の意見を引き出して作品を作った。2012 年度は、参加者からダンスをやりたいという希望が出て、ダンスも作品に取り入れた。その後、武藤講師が多忙となり、2013 年度からは、現在の万田祐介講師に指導を引き継いだ。

例年、4 月に募集をかける。募集は、館内告知、ゆう杉広報誌「ゆう杉タイムズ」等で告知し、近隣の高等学校（杉並、荻窪、都立西、杉並総合、豊多摩）と杉並区立中学校（全 21 校）に配布、杉並区広報掲載、依頼のあった高等学校に赴いた職員からの告知などの方法で実施している。募集定員は、過去に 2～3 名で実施した年度があったが、少人数では活動の幅も狭まるので、10 名ぐらいを目安としている。活動開始は 5 月で、3 月までの年度単位で継続することが原則である。運営には 2 名の担当職員があたっている。

次節では、本稿の調査事例となる 2021 年度の「オフィシャル演劇」企画について述べていく。

5-3.2021 年度の「オフィシャル演劇」企画

最初に、活動の詳細を述べるが、その際に登場する、後に述べる参加した若者と主催した大人についての表 7、8 を予め示しておく。

5-3-1.活動の詳細

2021 年度活動年間スケジュールを表 9 に示した。週に 1 度の活動で、11 月 10 日までに 19 回の練習（ミーティングを含む）があった。そのうちオンラインは 8 回、対面は 11 回であった。参加者の出席状況はまちまちであり、それぞれの定期考査等の学校行事優先となっている。

初回 5 月 19 日は、東京都新型コロナウイルス感染症緊急事態措置下にあり、若者 3 名が参加してのオンラインでの活動計画ミーティングとなった。オンラインの手法は 2020 年度に講師の提案で採用された。具体的には、杉並区のオンラインツールである Webex アプリケーションを用いて、「ゆう杉並」担当者がホストとなり、講師と参加者を招待するかたちで実施される。講師主導で参加者に意見を求めたり、順番に台本読みをやったりする。担当者は、無連絡の欠席参加者の対応、参加者の接続トラブル対応をするが、オンラインでの活動にも参加する。オンラインでの活動は、参加者同士の自由なやりとりには困難があるが、2020 年度の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言以来、参加する大人も若者も様々なかたちでのオンライン利用に慣れてきて活動実施できていた。オンライン活動の一例を表 10 に示して説明する。表 10 は、2021 年 6 月 9 日のオンラインでの様子を示す。18:02～18:11

は、出欠と接続の確認を実施する部分である。講師中心とする大人が若者に挙手を促したり、指名して発言を求めたりしている。18:11～18:30 は、この日が若者全員そろそろ予定の初回ということで、自己紹介が行われた。これも講師が主導した。自己紹介後、講師作の台本「バトン」と2020年度「オフィシャル演劇」参加者共同作の台本「占い師」のグループ分けを行った。講師より「ブレイク（休憩）」の提案があり、皆退室した。18:30に全員再入室し、一旦何かのトラブルで退室していたDも再入室した。Cも遅れて入室した。Cの音声接続トラブルがあり、講師、担当者が対応している。19:00からは、3グループに分かれて、台本読みの練習をしている。若者たちは、グループに分かれたのち、積極的に会話して練習している。主体的に誰かがグループ練習をリードして、皆が協力していた。大人3人が、それぞれ3グループの練習に顔を出すかたちで進められ、講師は順番にグループを移動して助言している。20:10に全員が集合して活動を終えている。オンラインの活動では、全員そろそろ場面では講師が主導し、グループに分かれる場面では、若者同士積極的、主体的に練習した。

6月9日の後もオンラインと対面をおりませ、「バトン」と「占い師」を練習し、7月21日には、「ゆうホール」で参加者の家族、保護者を観客に迎えて対面での発表会を実施した。発表前日よりの急性胃腸炎で当日欠席した若者があり、11名が参加した。講師、担当者2名の他に保護者、家族5名と「ゆう杉並」スタッフ2名、筆者の計8名の観客がいた。「バトン」と「占い師」の2作品を若者3名ずつ5グループに分かれて（一人複数回出演が3名）発表した。1回の発表は4分程度で、発表後の保護者の感想、講師のコメントを合わせて会全体は1時間弱であった。発表中は、講師は客席後方から見ていた。担当者は司会進行と照明係を務めた。7月28日以降は、12月22日の発表会を目指しての練習を実施している。次回発表会は、講師作台本の「はじまるよ」上演予定である。

11月10日からは、若者創作台本「海は彼方へ」の対面練習が開始された。その日の練習は、見学者1名を含む若者10名と他児童館よりの研修者1名を含む大人4名で実施された。「ゆうホール」内に各自の椅子を円形に並べ、18:11にミーティングから始まった。講師よりコロナ対策を含むスケジュール説明と注意があり、「海は彼方へ」の作者、H主導で台本読みをやることが告げられた。その後、台本読みを1回実施し、休憩に入った。19:00から練習再開し、台本の疑問点についてのミーティングをHの司会で実施した後に、台本読みを繰り返した。最終的に、台本を持ちながらの立ち稽古も実施した。講師は舞台への踏み台の配置や、舞台上への平台の配置をサポートした。2担当者は、照明を入れた。20:05には、再度、円形に座って、Hからの連絡と講師からのコメントで活動を終了した。Hを中心に活動し、大人はHを始めとする若者をサポートするかたちで活動していた。

2021年度は、館外発表の機会はないが、2月19日にも3回目となる発表会が予定されている。そこでは、「海は彼方へ」を上演する予定である。

次節では、参加する若者について述べていく。

5-3-2.参加する若者

2021年度は、高校生のみ12名登録している。学年も学校も多様であり、その詳細を表7にまとめた。近隣からの参加がほとんどだが、23区外からの参加が1名ある。1年生4名、2年生6名、3年生2名の構成である。全体的に口数は少なく、あまり表情の変化も見せない若者たちであるが、自分の意見を発信したり、人前で表現したりして、主体的に参加している。

演劇部に所属している者は、5名であるが、学校、地域などの演劇企画、劇団に参加するなど、なんらかのかたちで演劇や表現活動に興味関心を持っていた者たちである。演劇部の活動に活かしたい者や、演技力の向上を目標とする者、ほとんどの若者が、過去の演劇体験を興味の契機としている。

参加者の多くの者は、「ゆう杉並」職員の声掛け、チラシ、説明会やネット、杉並区広報などで情報を得て参加を決めている。この点は、「ゆう杉並」が居場所としての存在感を地域に示し、その活動が広報や学校・地域との連携により幅広く伝わっていることを反映している。

以上のように、参加の動機は、演劇への興味からという者が大半である。そのため、多くの者は「ゆう杉並」に「オフィシャル演劇」参加のためのみに足を運んでいる。その他、友人からの誘いで参加した者もいる。演技のスキルアップのための専門家の指導を無料で受けることができるという点が大きな魅力となっている。

また、12名中8名が過年度からの継続参加者である。継続の理由には、活動の楽しさや意義、他学年、他校生との交流の楽しさ、講師の専門性と人柄、「ゆう杉並」担当者の親切さなどがあがった。参加時は演劇活動が目的であった若者が、「オフィシャル演劇」の演劇活動以外の部分に参加目的を見出している。ここで、実施したアンケート調査の質問用紙と集計結果を表11、12に示す²⁶。

5-3-3.主催する大人

2021年度「オフィシャル演劇」では、万田講師と2名の担当者の合計3名が毎回大人として関わっている。その3名に加えて、「オフィシャル演劇」と関連する事業係長と2020年度担当者について述べていく。

(1) 事業係長

²⁶このアンケートは、ゆう杉並「オフィシャル演劇」参加前後の変化を調査する目的で実施した。その詳細については、7-2で後述するが、回答の自由記述部分より、「オフィシャル演劇」に対して肯定的な感情を持つ者が存在する事のみ触れておく。「オフィシャル演劇」の特性について、「演劇以外にも定期テスト情報とか異年齢集団の多様な意見、普通科、運動部系など、考え方の違う人と話せる」「老人ホームや『ゆう杉』での発表会」などと、あげている。「オフィシャル演劇」に参加していなければ、出会わない人々との交流に意義をみだしている。

5-2-1.で述べたように、この企画を立ち上げに関わった人物である。保育専門学校卒業後、杉並区職員として4年間の保育園勤務を始めに、杉並区立南伊豆健康学園²⁷、児童館で勤務、2009年から2012年「ゆう杉並」で勤務している。「オフィシャル演劇」の立ち上げに関わり、2年間担当している。その後、他の児童館勤務を経て、2019年からは「ゆう杉並」で事業係長として、事業係18名を統括している。

「ゆう杉並」の2020年度のコンセプトである「ようこそ、ゆう杉並へ!」の気持ちで暖かく迎える、ロビーワークの強化、地域連携の推進の3点を自分の言動で周囲に波及させている人物である。若者の参加、参画を重視している。「大人の考えているものは、子どもにささらない」という自己の体験からの考えがあり、若者のニーズに応えること、若者の自主企画を実現させることを第一としている。若者一人ひとりの自主性を重んじる。

「オフィシャル演劇」担当時には、出席すると約束しつつも無連絡で欠席した参加者に、返事をもらうまで何度も連絡し、話し合いを重ねて、破ってしまった約束をそのままにさせないようにした。つながり続けることで、若者が自分で責任をとりやすい状況を作った。若者が主体的になることを根気よく支援する姿勢を持つ。

現在、「自分はプレーヤー（直接担当者の意味：筆者注）ではない、スタッフのサポート役である」と語っているが、受付業務に入ることもあり、来館者に積極的に声掛けしている。また、自分の休日には、「ゆう杉並」利用OBのことも気遣い、成人したOBと地域の「子ども食堂」にボランティアに入ることもある。人間、若者への興味が強く、職場のキー・パーソンである。

(2) 担当者（2021年度担当者2名、2020年度担当者1名）

2021年度は、2017年度に続いて2回目の担当となる30代の男性正規職員と2020年度に続いて2年目の担当である20代の女性嘱託職員が担当している。男性担当者は嘱託員経験を含めて、「ゆう杉並」8年目の勤務となる。2階の音楽系担当を5年務めた。「オフィシャル演劇」担当の仕事は、講師と若者をつなぐ連絡調整、若者のスケジュール管理、週1回の活動日の具体的運営、活動中の講師と若者のサポート、活動の記録、欠席した若者の代役で練習に参加することなどである。この企画の予算管理も行っている。特に、若者とこまめにメールや電話の連絡をとり出欠状況を把握し、欠席者には実施した活動内容連絡を徹底している。

担当者3名は、事業係長と同様に「ゆう杉並」の若者の参加、参画を促す運営方針を若者への関わり方の基本姿勢とする。日常的に実施している個別対応の連絡調整は若者の参加

²⁷ 1974年に、杉並区が区立小学校に在籍する病虚弱児童を対象とした施設「南伊豆養護学園」（のちに「南伊豆健康学園」に）を南伊豆町湊に開設したことに端を発し、その後昭和55年に、杉並区が「弓ヶ浜学園」を開設し、区立小学校の移動教室が長年に渡って行われてきた。弓ヶ浜学園は、平成14年4月から施設を民営化し施設名称を改め「弓ヶ浜クラブ」として今日に至っている。

を促進している。男性担当者は、傾聴と関係作りを大切にしている。傾聴について以下のよう
な言葉があった。

基本的には傾聴、とりあえず話聞いて受け入れて、どうやって解決していくか...、そう
ならってきた。話をよく聞いてくれてる印象、きっとそれが大事、自分の中の大人像（中
高生のころ：筆者注）話を聞いてくれないという印象があったから、そうなりたくないか
ら。

若者一人ひとりの大人に話を聞いてもらいたがっている気持ちを汲み取ってこうとし
ている。関係作りについては、「どこでもする」と言っている。2階音楽系の担当であった
とき、若者がスタジオに入るまでの短いやりとりの間にいかに関係作りをするかを工夫し
た。自分の興味以外のことにも幅広く興味を持ち、若者との会話が続くようにした。

「オフィシャル演劇」での若者への関わり方は、第一に、若者の意見の発信を支援する点
があげられる。若者が意見を言いやすいように「わざと講師の指導中に口をはさむ」ことも
あり若者の主体性が働きやすいように工夫している。第二に、個を尊重している。以下は、
創作台本執筆に立候補したが、なかなか台本が具体化しない H について、男性担当者が語
った部分である。

突然 1 本電話（H から：筆者注）があって、明日来たいと言って、勤務時間じゃなか
ったけど OK した。...H ちゃん本人は喜んでいて。やりたい気持ちが強い子だから抱え
落ちが心配、重要な役割（台本を書くという：筆者注）になったまま離れちゃう心配、...
任せるとこ任せるけど、早めに引き取っちゃわないと（支援しないと：筆者注）...

担当者 3 名は、若者個人個人の動きや心情の特性に注意深く気配りし、現状を把握して活
動の順調な実施をはかっている。若者がやりたいことの実現を支援している。

（3）講師

講師は、大学在学中から演劇活動を開始し、卒業後も数多くの舞台に出演している。脚本・
演出・ファシリテーターとしても幅広く活動し、劇団「ひまわり」の演技講師にも就いてい
る。大学で表現教育を専攻したこともあって、演劇教育活動に意欲的である。

「ゆう杉並」の中高生の参加、参画を尊重する姿勢に共感し、参加者の自主性を重んじ、
彼らがイメージしているものを実現させる支援をしたいと考えている。そのため自身の劇
団養成所での指導とは異なり、「ゆう杉並」の参画重視の方針と、参加者のやりたいこと
の実現と、自身の助言・指導、この三つのバランスをとることを大切にしている。しかし、講
師としての役目は、養成所も「ゆう杉並」も同じで、参加者の本人も知らない持ち味を活か
すことだと考え、人前での発表の機会を増やし、舞台の上で言葉を発したり、身体を動かし

たりする体験をさせたりしている。特にカリキュラムを設けず、参加者からの聞き取りを土台として作品を作っている。参加者のやりたいことを重視し、方法論等の情報を与えるようにする方針である。また、講師は、特に「オフィシャル演劇」活動では、若者の「心の解放」することを心がけている。次のような言葉がある。

（若者たちは：筆者注）きついだろうな、自分に置き換えている点がある。その対象の立場に立って考えてる、家にまっすぐ帰らないでここにいる。だから心を解放させてやる。

講師自身の高校、大学時代の経験から、将来のことがはっきりしない、理想と現実の間で悶々とする時間を過ごしたこと、それがみんなで何かを作り上げる演劇活動のわけのわからない感覚で浄化されたのかもしれないといった体験があるといいこうしたことから、若者の「心の解放」を心がけている。

若者の意見を引き出す、自己決定を促す関わり方をしている。講師不在の状態や、少人数の場を設けることなどして、若者が意見を出しやすくしている。以下は、オンラインでの活動開始直後のやりとりである。

講師：声聞こえる？聞こえない人手あげて... 来週、みんな来れるのか？活動的にはオンラインでもできるんだけど、僕的には緊急事態だから、オンラインの方が
2担当者：リアルにオンラインか、舞台でやるか...
講師：対面になるとマスク付けながら...やりたい、やりたくないって問題じゃなく、オンラインの方がいいかな、みんなはどう？・・・杉並区強気だね。
2担当者：杉並区強気です。次は、オンラインで。
講師：時間遅れるから、ずらして全員で始めよう、多数決で 6:00 がいい人、6:20
（全員 6:20 挙手）

このやりとりから、次のようなことがわかる。講師は、担当者との会話を交えて若者が意志表明しやすいかたちを作っている。若者に問いかけ、選択肢を提示して答えやすい状況を作っている。柔軟に開始時間を現状に合わせると判断し、断定的な叙述は避け、間をとり、待つ姿勢と若者の意見に柔軟に対応する姿勢を見せている。

練習中や休憩中に、練習内容とは無関係に、講師から若者一人ひとりへの声掛けが実施される。例えば、市民ミュージカルにも参加している A に講師が様子を聞いた際、A から「どうしてこういうところに入ったんだろうって、まわりと比較しちゃって...」という言葉が発せられたことがある。講師は以下のように答えた。

大丈夫だよ、このオンラインで寿司食ってるぐらいなんだから、大丈夫だよ、いいねえ、いいすね、素直でいいすね、そうだね、気持ちは変わるもんだから、ミュージカルってこういうもんだから、研究の時間にする、学校の勉強じゃないんだから。

講師は、ユーモアを交えて A の気持ちを受容し励ましている。若者一人ひとりを見て、単純に講師自身が興味のあることを話しかけ、日常的個人的な会話を交わしている。形式ばらないように飾らないありのままの講師自身の話もしながら、特定の若者に偏らない配慮もしていると言う。自分から話しかけることのできない若者の存在にも気を配り、講師からできるだけ個人的に話しかけている。若者を「ほめる」ことも大切にしている。発表会終了後のコメントで次のような言葉がある。

素敵な時間を作れてみんな見に来てくれてうれしいです。...中略...C、ベストパフォーマンス、見に来ている人がいると、演技もかわる。何かを指導するというよりも、皆のやりたいことをかたちにしていきたいです。力を貸してください。

全体についてもほめていたが、代役を含めて3回舞台に上がったCを個人的にほめている。発表の機会を重視していることもわかる。「見られる」ことの有用性にも触れている。発表の後日、講師の以下のような言葉もある。

今の子どもたちと接するとき、緊張感の中でやらせることも大切だが...中略...いいのはいいって言ったほうが前に進みやすい。みんなのやりたいことにそって、みんながいい気持ちになる時間をつくる。何かと比較したり、演技レベルを問題にしない。個々の舞台上でのありようそのままとほめる。

目指すところが演技力の向上や作品の完成度ではなく、参加者が「いい気持ちになる時間をつくる」ことであると明確に語られ、「個々の舞台上でのありよう」を重視している。比較をしないことやレベルを問題視しないことも示している。

5-3-4.まとめ—大人の関わり方

講師と担当者たちの若者への関わり方には基本姿勢として若者の主体性を重んじ参画を促すという「ゆう杉並」の運営方針がある。若者のやりたいことの実現を支援する居場所づくりの姿勢である。若者の主体性が働きやすいように多くの工夫をしている。具体的には、第一に、若者一人ひとりへの個別対応、個の尊重があげられる。事業係長は若者一人ひとりに声掛けを行っている。担当者は若者各自の言葉を傾聴し、目を配り、緊密に連絡したり、ルールを伝えたりしている。講師も若者各自にそれぞれにあった言葉選びで声をかけてい

る。若者全体に対応することが効率的であるが、効率性よりも個の尊重を重視している。第二に、若者の意見を発掘し、自己決定を促し、発信させている。担当者が講師との会話を若者に聞かせることで若者の口火を切ろうとしたり、講師が断定的な言い方を避け、若者とのやりとりに間をもたせ、若者の意見に柔軟な姿勢をみせて若者の発言を促したりしている。第三に、大人が若者の特性を自分の体験と照らして思い起こし、若者を一人の人間としてみて、興味、関心を持っている。その興味、関心から会話が生まれコミュニケーションが豊かになっている。第四に、講師は、比較したり、レベルを問題にしたりせず、個々の若者を見て受容している。それが、活動内で若者が精神的に解放され、舞台上で充実感を得る要素となっている。

こういった関わり方は、大人たちが協議して実行しているものではない。大人個人の性格や考え方という問題でもない。講師、担当者が代わる際に、引継ぎとしてなされる類のものでもない。ここには、「ゆう杉並」独自の仕組みがある。

5-4. 「ゆう杉並」の大人の関わり方をうむ仕組み

ここでは、「ゆう杉並」の大人たちの若者への関わり方がどのようにしてうみだされているのかをみていく。最初に、「ロビーワーク」について述べる。

5-4-1. ロビーワーク

5-1-1 で述べたが、「ロビーワーク」とは、児童館、青少年センター、図書館等で職員の正規の職務内容として位置付けて若者の利用に対応してきたものである(田中・萩原 2012) 事業係長は、「児童館用語であり、自分にとって最も大切な用語である」と語っている。受付、ロビーでは、事業係の全職員がシフト制で関わっている。例えば、男子3名が来館した際、ロビーのテーブルについていた女性スタッフがすかさず立って「何やる？」と声掛けしていた。若者への声掛けについて、2020年度担当者は、「何書いてるの～みたいな、スタッフは、子供全体に声かける、ウロウロする、暇そうな子とは、一緒にゲーム、クラフトなどをやる」と語っている。事業係長は2020年度のコンセプトの「ロビーワークの強化」について以下のように述べている。

多様な利用者に対応するため、関わるスキルを磨いていこうというものです。そのために、利用者情報の共有を円滑に徹底することと職場内研修の充実を図っています。

全職員で実施する「ロビーワーク」が、若者と関わるスキルを磨く場であることが示され、情報共有と研修が図られていることがわかる。次項では、情報共有と研修がどのように実施されているのかを述べる。

5-4-2.情報共有と研修

利用者情報を含むあらゆる情報の共有は事業係全体会議や各部署でのミーティングのかたちをとるよりも、日常的に実施されている。受付、ロビー、担当部署、事務室での会話で共有されている。これは、全職員が「ロビーワーク」に関わり、ほとんどの利用者を知っている点と職員間のコミュニケーションがとりやすい「ゆう杉並」の職場環境という点に起因すると示唆される。コミュニケーションがとりやすい点について、事業係長と2担当者は次のように語っている。

事業係長：職場内コミュニケーションは、受付や事務室や体育館担当になったときによくとっている。自分は若い人を質問攻めにする。知りたいし、知ってもらいたい、その人に興味ないと話がつづかない、でも心の余裕が必要。

担当者：児童館職員の先輩が自分の話を全部聞いてくれた体験、ダメな理由も教えてくれた、やったことに対して、いい悪いだけでなく、視野を広げて理由付けして納得させてくれる、もうひとひねり...一緒になって考えてくれる。

ここでは、興味関心がコミュニケーションを生むという係長の姿勢が示され、その姿勢が全職員に影響していることが考えられる。興味関心を持つためには「心の余裕」が必要だと明示されている。また、「ゆう杉並」職員の中では、長年、傾聴の実践がなされ、職員間の円滑なコミュニケーションが実現している。

研修は、「ゆう杉マニュアル」と「OJT 計画」という「ゆう杉並」独自のものにもとづいて、計画的に実施されている。開館当初は、他の児童館同様マニュアルも手探りだったが、2008 年ごろ、マニュアル、OJT 計画等が確立し、それをわかりやすい言葉遣いに改変したり、現状に合わせて改訂したりしている。2014 年に大改訂して使用している。現在、コロナ禍で、ほぼ毎月のように現状に合わせるかたちに改訂している。それらを用いて、事業係新採用職員に対して、4 月から約 1 か月間が研修期間となっている。ロビーなど若者と接する研修は、新人がベテランと組んでベテランの接し方を学ぶ OJT である。仕事終わりに 15 分程度の振り返りをやる。コロナ禍の今年度は計画通りには進んでいない。OJT 担当者は、「人を育てる仕事だから、それが子どもから大人に変わっただけ、この OJT をないがしろにするわけにはいかない」と語っている。

「ゆう杉マニュアル」の主な内容には、基本姿勢、運営方針、体育館等各場所の説明と利用者対応の記載がある。例えば、「体育館」の説明には、「職員が関係を築ける機会が多くあります。」と記載され、利用者対応として「利用者一人ひとりに声をかける」「関係作り」「危機管理」の見出しがある。「関係作り」部分には、「遊びや会話を通して、利用者自身を知っていき、身近な相談役としていつでもサポートできるようにします。」と記載してあ

る。「オフィシャル演劇」活動が実施されている「ゆうホール」の利用者対応は、「初心者
が活動しやすいように」「活動場所がないダンサーへの対応」「利用者へのコエカケは慎重
に」（集中して練習していることが多いので、休憩中にコエカケするなどの配慮が必要だ
という内容：筆者注）などの見出しがある。全体的に、具体的な若者との関わり方が記載さ
れている（杉並区子ども家庭部児童青少年課事業係 2021）。上記マニュアルの他に、「動き
方マニュアル」というものもあり、そちらは具体的な業務内容について示してある。

「OJT 計画」には、時期と内容の記載があり、初日～2 日目の箇所には「まずは動き方
中心だが、中高校生との関わり方は経験のある職員と実際にシフトに入りながら実践する。」
（杉並区子ども家庭部児童青少年課事業係 OJT 担当 2021）と書いてある。

事業係長は、「ゆう杉並」報告集や上記三つのような内部資料を簡潔かつ具体的表現に改
訂し、外部の人や職員にとってわかりやすい伝え方をしよう心掛けている。改訂の労苦を
避け、汎用性を高めるために、抽象的で曖昧な表現を用いることの多いマニュアル等の言葉
遣いをリアルタイムに使えるわかりやすく具体的なものにしている。前述したように、コロ
ナ禍の現在は毎月のように改訂している。ここには、事業係長をはじめとする職員が、現場
の利用者対応と関係作りに集中した視点を注いでいることがわかる。また、わかりやすいマ
ニュアル等を用いることにより、職員の意思統一や異動に伴う引継ぎが円滑に行われると
考えられる。

「ゆう杉並」は、キー・パーソンとなる事業係長を中心に、系統だった研修方式を確立し、
継承している。

5-5.まとめ

「ゆう杉並」では、開館当初からの中高生の居場所として若者の主体的参画の推進する基
本姿勢が職員全体に浸透している。その背景には、キー・パーソン主導の現場の利用者対応
と関係作りに集中した視点をそそぐ具体的に明文化したマニュアルにもとづく研修と、長
年培われた職員同士の傾聴の姿勢による円滑なコミュニケーションがあった。研修は、若者
との関わり方、関係性の作り方にあつた。「ゆう杉並」全体の取り組みが「オフィシャル演劇」
担当者にも影響しているが、「オフィシャル演劇」の大人の若者への関わり
方の特徴は、「個を尊重すること」「若者の意見の発信と自己決定を促すこと」「若者を一
人の人間としてみて興味、関心を持つこと」「比較したり、レベルを問題にしたりせず個々
の若者を受容すること」の 4 点にあつた。その関わり方を生む「オフィシャル演劇」の仕組
みとしては、若者一人ひとりが舞台上での発表の機会を持つことがあげられる。「オフィシ
ャル演劇」では、若者のやりたいことの実現を支援する居場所づくりを支える大人の関わり
方があつた。

第6章 穂の国とよはし芸術劇場「PLAT」の「高校生と創る演劇」

6-1.施設の概要

6-1-1.設立の経緯と施設概要

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT（以下「PLAT」）は、2013年4月、愛知県豊橋市が東三河²⁸市民のための演劇・舞踊・音楽等の芸術文化の振興と芸術文化を活用した市民の交流と創造活動の活性化を図るために開館した。「PLAT」開館以前に、豊橋市では、市民による文化活動の発表の場や音楽利用の場は既に整備されていたが、舞台芸術の創造活動を展開していくための機能や設備、運営システムを有した適切な規模の場が十分に整備されていなかった。そこで、豊橋市により、「豊橋市芸術文化交流施設整備事業」として PFI 事業の手法²⁹を用いて整備が行われることになったという経緯で開館に至っている。

「PLAT」は、指定管理者を、公益財団法人豊橋文化振興財団³⁰とする 778 席の主ホールを擁する公立文化施設³¹である。主ホールの他に 226 席のアールスペース、創造活動室 7 室、研修室 2 室、製作工房、交流スクエア、カフェ、託児室、授乳室など充実した設備を持つ個性ある劇場として芸術創造と芸術文化の振興を推進している。

財団理事会の常任理事兼務の館長のもと、芸術文化アドバイザーとして、劇団「KAKUTA」主宰の桑原裕子³²が就任し、事業全般の企画運営をする事業制作部と、舞台を技術的にサポートする技術部と、総務、財政を担当する事務局からなる組織である。事業制作部は、芸術文化プロデューサーが統括し、施設管理リーダー、事業制作リーダー、教育普及リーダー、各 1 名と、事業制作スタッフ 7 名の総勢 11 名からなっている。スタッフの担当部署は決められておらず、様々なキャリアが積めるような配慮がなされている。技術部は、テクニカルマネージャーが統括し、舞台技術リーダー 1 名と、舞台、音響、照明の舞台技術スタッフ 5 名の総勢 7 名からなっている。事務局は、事務局長兼次長が統括し、総務・経理リーダー 1 名、総務・経理スタッフ 3 名の総勢 5 名からなっている。

²⁸ 東三河とは、愛知県東部を指す。豊橋市を中心地とする、豊川市、蒲郡市、新城市、田原市、設楽町、東栄町、豊根町の 8 市町村で構成されている地方である。

²⁹ PFI（プライベート・ファイナンス・イニシアティブ）事業とは、民間の資金やノウハウを導入し、効率的、効果的に公共サービスを提供する手法である。

³⁰ 豊橋文化振興財団：社団法人豊橋文化協会の実績と精神を継承し、さらに大きな枠組みにより個性豊かな魅力ある市民文化の創造に寄与するため、新たな文化事業の推進組織として、設立された。

³¹ 公立文化施設とは、国及び地方公共団体等により設置された全国の劇場・音楽堂等の文化施設である。（「公益社団法人全国公立文化施設協会 定款」より）（https://www.zenkoubun.jp/about/pdf/teikan_r02.pdf、12 月 1 日閲覧）

³² 劇作家、演出家、俳優。2015 年、KAKUTA「痕跡（あとあと）」が第 18 回鶴屋南北戯曲賞受賞。18 年「荒野」が第 6 回ハヤカワ悲劇喜劇賞受賞等、高い評価を得ている。2018 年 4 月から PLAT に就任。なお、前任は豊橋出身の俳優、平田満が開館時より就任していた。

6-1-2.利用形態と事業の概要

原則第3月曜日と年末年始を休館日とし、9:00から22:00まで開館している。豊橋駅南口から徒歩3分のロケーションの良さから東三河地域外の利用者も多い。2019年度の公演事業は44事業87回入場者数67,056人、ファシリテーター養成講座等の普及啓発・人材養成事業は33事業94回参加者1,259人、小学生及び中学生を対象としたワークショップ「芸術文化普及体験事業」等の受託事業は12事業77回参加者2,904人、東三河高等学校演劇活動支援等の地域連携事業は6事業63回参加者18,254人となっている³³。2019年度の開館日数は349日で、開館1日当たりの利用者数は657人、貸館等稼働率は53.3%であった³⁴。

6-2.「高校生と創る演劇」企画

6-2-1.設立の経緯

「PLAT」開館の翌年、2014年から「高校生と創る演劇」企画は始まった。2013年開館当時、東京から着任した現芸術文化プロデューサー（以下「プロデューサー」）は、豊橋について、交通の便が良く物価が安い地の利はあるが、東京での劇場事業参加のメインターゲットであった大学生と30代前半の人たちの存在の見えにくさと、地方であるためのプロとの協働の難しさを感じた。2013年夏PLATで、東三河の高等学校演劇大会が開催された際、プロデューサーは、多数の高校演劇部員たちの存在に注目し、劇場に人を引き付けて土壌をつくる可能性を見出した。自身の高校生時代の体験が後の人生の土台となっているという点を足掛かりに、「高校生と創る演劇」企画を思い立った。このことについては、プロデューサーの以下のような文章がある。

高校生たちほぼ全員が集まった日のお昼休み、劇場前の広場で幾つもの円を作ってお弁当を頬ばっている図は圧巻でした。少子化が進んでいるといわれながらも、この地域にはこんなにも元気な高校生たちが大勢いるではないか。（穂の国とよはし芸術劇場 2015、1ページ）

プロデューサーがこのような着想を得て始動した企画であるが、チケット料金をとっての上演企画とした理由は、創る責任感を参加高校生と専門家に持たせ、観客にもお金を払って観るという責任を持ってもらうということであった。企画の実施には、プロデューサー自らの演劇体験と世田谷文化生活情報センター（以下「世田谷パブリックシアター」）でプロと

³³ 穂の国とよはし芸術劇場（2020b）『PLAT2019 アニュアルレポート』より。

（<https://www.toyohashi-at.jp/archive/pdf/annual2019.pdf>2021年11月21日）

³⁴ 豊橋市公共施設白書個別表より。

（<https://www.city.toyohashi.lg.jp/secure/55496/202012hakushokobetu03.pdf>2021年11月21日）

共に創るコンセプトを学んだ経験が活かされたという。企画の目的を若者の人材育成の視点と芸術文化普及、地域活性化の視点から、「高校生活の中では出会うことがないような新しい視点と思考を獲得し、自らが表現することに対して積極的に行動する力を獲得してくれること」（穂の国とよはし芸術劇場 2015、1 ページ）、部活動でも活かせる演劇のノウハウを知ること、この地域で生まれ育った若者が将来的に地域に誇りをもって地域を活かす立場になることなどとして開始した。

6-2-2.活動の概要

2021 年度で 8 回目となるこの企画の上演記録を表 13 にまとめた。なお、備考欄には文化庁助成金の有無を入れた。文化庁の他にも助成金、補助金を受けての企画である。

企画スケジュールの詳細は、次節で、2020 年度企画「Y に浮かぶ」の具体例をあげるが、8 回ともほぼ同じスケジュールで進められている。2 月に募集告知開始、4 月募集締め切り、5 月オーディション、8 月ワークショップ、9 月若者だけの自主稽古、9 月下旬から専門家（演出関係）が豊橋に滞在して本稽古開始、上演の 1～2 週間前には演出家以外の専門家スタッフも豊橋に滞在、11 月に 4 回から 5 回の上演、2 月上演舞台映像鑑賞会という一連の流れがある。愛知県高校演劇関連行事と重ならないスケジュールとなっているが、若者の学校行事とは重なる点も多々あり、参加者全員そろっての活動は難しい。

作品は、プロデューサーが決定している。2014 年度の「転校生」は、1994 年、青山円形劇場プロデュースで青山演劇ワークショップ選抜の女子高生による初演がある。その時の女子高校生役の何人かが演劇専門家に育っており、演劇人が生まれる可能性を感じて、「高校生と創る演劇」の初回は「転校生」に決定したとプロデューサーは語っている。2014、2018 年度の「転校生」と 2015 年度の「赤鬼」は既成台本であり、それ以外は新作書下ろし³⁵作品である。書き下ろすにあたっては、参加者への丹念なインタビューがもとになっている作品もあった。台本創作について、プロデューサーは、小説などの骨格となるものをベースにしたもの、少なくとも 10 人以上のキャスト人数が必要なものを書いてほしいと作家に伝え、それをもとにして作家に構想してもらっている。

演出家は、プロデューサーが人選している。プロデューサーは、演出家の条件として、第一に若者と真摯に協働できる人物であること、第二に若者にもってかえってもらえるものを提供できる人物、第三にこの機会を専門家自身の演劇観を見直すきっかけにできるような 30 代から 40 代であることなどをあげている。演出家は毎回替わっている。プロデューサーは、若者が自分の頭で考え実行する能力を高めてほしいと演出家に要請している。作家・演出家の他にも美術・音響・照明などの舞台専門家がプロデューサーと演出家の協議によって選ばれている。

³⁵ 書下ろしとは、その上演のために新しく書くこと。

劇場担当スタッフは、プロデューサーの他に若手事業制作スタッフ 2 名が、ほぼ 2 年ずつ、自然と引継ぎのできるような配置がなされている。制作助手というかたちで、短期契約の専門家も配置されている。その役割分担を表 14 に示した。

参加者の募集は、毎回公募で東三河地域を中心に愛知県内、隣接する静岡県からの応募も制限していない。愛知県高校演劇連盟には募集の協力要請をしている。東三河地区と隣接する浜松地区は「高校生と創る演劇」上演の 11 月に高校演劇大会があるので連携しての募集告知は行っていない。オーディションは作家、演出家、劇場スタッフで行われる。スタッフは、希望優先で、選考しない。

次節では、本稿の調査事例となる 2020 年度「Y に浮かぶ」、2021 年度「ミライハ」企画について述べていく。

6-3. 「高校生と創る演劇」2020 年度「Y に浮かぶ」、2021 年度「ミライハ」企画

最初に、活動の詳細を述べるが、その際に登場する、後に述べる参加した若者と主催した大人についての表 15、16、17、18 を予め示しておく。

6-3-1. 活動の詳細

本節では、2020 年度「Y に浮かぶ」の活動の詳細を記す。台本のストーリーのベースとなっているのは、豊橋市に伝わる民話である。そこに、作家であり演出家である藤原と演出助手 2 名が若者にインタビューした内容が盛り込まれている。作家がキャストの若者の持ち味、性格を把握して台本に活かしている。スケジュールをまとめたものが表 19 である。

2020 年度は、コロナ禍のため例年とはスケジュールがずれ、オーディション、ワークショップが 8 月の例年のプレ・ワークショップの時期に同時開催された。プレ・ワークショップは、本来ならば、参加するキャスト・スタッフが確定し、初めて顔をあわせて何かをする機会であるので、お互いを知るためのワークショップなどを行うとともに、9 月の自主練習のメニューを演出家に伝授してもらうことが主な目的となる活動である。9 月の専門家との本稽古開始までの約 10 回の自主練習の目的は、本番に向けての発声、身体作り、最終的に若者だけで基本的なウォームアップなどができるような環境を作るとともに、参加者の一体感を醸成することなどである。ボイストレーニングは東京から専門家を招いて、その後の自主練のメニューを作成してもらい、活かしている。チラシ・ポスター・パンフレット等印刷物は担当する事業制作者が、地元のデザイン事務所と相談して制作している。本番の会場（アートスペースとそのホワイエ）の飾りつけ案作成や、飾りつけは若者スタッフのアイディアを活かして行っている。舞台美術ワークショップは全員参加し、衣装ワークショップは新型コロナウイルス感染症の影響もあり、時間が限られていたため、スタッフのみ参加した。本稽古は、平日の放課後（18：00～21：00）と休日の終日（10：00～17：00）行われ、月

曜日は休みであった。参加者の居住地も学校も学年も様々なので、全員そろっての稽古はなかなか困難だった。

衣装パレードという衣装合わせは素舞台の本番会場で実施する。上演本番の約 2 週間前に舞台装置が仕込まれ、本番と同じ舞台装置上での稽古が開始される。2 月の本番映像上映会では、上演後久しぶりに演出家、スタッフ、若者が顔を合わせ、企画を締めくくる。

上演のチケットは、一般 2000 円、U25（25 歳以下）1000 円、高校生以下 500 円で販売された。観客数は表 19 の通りである。

2021 年度「ミライハ」は新作書下ろし台本を二人組の舞台作家が演出している。「Y に浮かぶ」と、ほぼ同様のスケジュールで活動した。参与観察した練習活動を表 20 に示す。発声、準備運動から始まり、キャスト各自が動きを創る作業に 1 時間半かけている。その後、各自の動きをキャスト全員で共有して動くシーンを約 2 時間かけて創った。休憩をはさんで、後半のセリフ回しと通し稽古の後に練習を終了している。

6-3-2.参加する若者

2020 年度「Y に浮かぶ」に参加した若者は、19 名であり、2021 年度「ミライハ」は、16 名であった。その居住地は、東三河地区の豊橋市 19 名、豊川市 2 名、田原市 1 名、蒲郡市 1 名、隣の西三河地区の豊田市 1 名、岡崎市 1 名、高浜市 2 名、西尾市 1 名、知多地区の大府市 1 名、尾張・名古屋地区の名古屋市 1 名、稲沢市 2 名、日進市 1 名、豊明市 1 名、県外であるが東三河地区隣接の静岡県湖西市 1 名となっている。性別は、女子 28 名、男子 5 名、不明 1 名、自認男子 1 名となっている。日本では 8.9%、10 人か 11 人に一人、が性別に違和感を持つという電通 LGBTQ+調査 2020 結果³⁶があるので、2020 年度参加者 19 人中の 2 人という数字は、一般的な性自認の比率に近いといえる。1 年生キャスト 3 名、スタッフ 3 名、2 年生キャスト 4 名、スタッフ 4 名、3 年生キャスト 15 名、スタッフ 6 名という構成で、募集開始時が中学生であることから 1 年生は少ない。3 年生は 21 名と全体の 6 割を占め、学年が上がるほど、演劇への興味関心、特に上演発表への意欲が強くなっていることがうかがえる。

公募からのオーディションを経ての参加ということで、演劇への興味関心は強く、積極的な姿勢がみられる。交通費とかなりの時間を割いての参加であるので、家族の協力があつたことが考えられる。全体的に人の話をよく聞き、求められれば、自分の考えを明確に述べることができる。インタビューやアンケートの中で、過去の不登校体験や学校、家庭生活に抱えた不安、人間関係の困難さを自分の言葉で表現する者が複数名いた。実施したアンケート

³⁶ 電通 LGBTQ+調査 2020 結果：対象を全国の 20～59 歳の個人 6,240 人とした、2020 年 12 月実施のインターネット調査、LGBTQ+層該当者 555 人/ストレート層該当者 5,685 人の結果を示す。LGBTQ+とはストレート（異性愛者であり、生まれたときに割り当てられた性と性自認が一致する人）以外の人を指す。（<https://www.dentsu.co.jp/news/release/2021/0408-010364.html>、2021 年 12 月 6 日閲覧）。

の内容は、5-3-2 で提示した「ゆう杉並」のものと同様である。「Y に浮かぶ」参加者 19 名全員の回答結果の集計を表 21 に示す³⁷。ある若者は、「中 2 の冬に笑えなくなり、皆のことが嫌いになった。今もその時のことを思い出すと嫌だ。生きていることがつらかった。」と回想している。多様な背景を持つ若者たちである。

演劇部に所属している者は、総勢 35 名のうち 25 名であり、参加者の 7 割を占める。「Y に浮かぶ」への参加動機は、「『高校生と創る演劇』の上演を見て」「兄弟が参加して」「顧問・先輩・保護者の勧め」「演劇（スタッフワーク含む）への興味」となっている。例えば、「将来の夢が照明スタッフであるから」と答えた⑫や、「プロの音響の仕事を見たい」と答えた⑬など、スタッフワークに強い興味を示す者の存在があるのは、特徴的である。⑮は、「高校演劇に飽きたから」と答え、専門家と演劇を創るということに関心を寄せている。高校演劇部の活動経験を背景にして、仕事としての演劇、専門家と創る演劇に興味を持っている。

参加者の多くは、実際に過去の「高校生と創る演劇」の上演を観て、高校演劇との違いを感じたり、感動したりしている。また、若者たちの周囲の教師、保護者や友人、先輩などという人物がこの企画に関わったり、関心を持ったり、上演を観たりしている。このことは、「高校生と創る演劇」が劇場の恒例企画として周辺に広く認知され、評価されていることを示す。

また、35 名のうち「高校生と創る演劇」のリピーターは 7 名である。継続参加の理由は、前回体験の充実感が主である。

以上のことから、参加者は、演劇への興味というよりも、この「高校生と創る演劇」企画上演への興味、関心があり、高校演劇とは異なる専門家の演劇の世界を見たいという動機があったといえる。

6-3-3.主催する大人

「高校生と創る演劇」企画では、多くの大人が関わっている。2021 年度「ミライハ」では、プロデューサー、企画担当者（以下「担当者」）、演出担当の舞台作家 2 名の 4 名を中心に、もう 1 名の担当者、PLAT 舞台技術スタッフ 4 名、演出補、制作助手、舞台美術、舞台監督、照明、音響、衣装各 1 名の合計 16 名の大人が関わっている。劇場職員以外の舞台専門家たちは、舞台制作の必要に応じて PLAT に来て、若者と関わっている。期間契約の制作助手だけは、9 月末の稽古開始から上演まで稽古場担当となっている。2020 年度「Y に浮かぶ」では、プロデューサー、担当者、演出家の 3 名を中心に、もう 1 名の担当者、PLAT

³⁷ 7-2 で詳述するが、アンケート結果から、「Y に浮かぶ」参加体験中に、何らかのかたちで自己を見つめ、参加後に精神的変化をとげている若者が多い。

舞台技術スタッフ 4 名、演出助手 2 名、制作助手、舞台美術、舞台監督、照明、音響、衣装各 1 名の合計 16 名の大人が関わっている。

本項では、オーディションから上演までの全期間大人として若者に関わっているプロデューサー、担当者、演出家に、本稽古開始からの約 1 か月半、稽古場担当として若者に最も近いところにいる 2021 年度の制作助手を加えて述べていく。

(1) プロデューサー

プロデューサーは、大学在学中から演劇活動を開始し、卒業後、劇団活動を経て、1998 年 4 月より世田谷パブリックシアターで劇場勤務を始めている。2012 年 4 月より「PLAT」開設準備のために来豊、公益財団法人豊橋文化振興財団事業制作チーフに就任し、以来現在に至るまで勤務している。2015 年度より芸術文化プロデューサーに就任し、事業制作部を統括する全ての事業責任者である。「高校生と創る演劇」を 2014 年度に立ち上げ、継続してきた。

地域での芸術文化の振興と市民の交流と創造活動の場の活性化を図るため、公演事業と普及啓発・人材養成事業のバランスをとっている。「劇場は使ってみてその理解が深まる」と考え、在来線 30 分圏内をターゲットに、多くの人々が劇場に足を運んでくれるような工夫をしている。「PLAT」開館前までは東三河地域で観賞することのできなかったような公演事業を実施したり、市民劇を実施したり、若者が観賞しやすくなるようなチケット割引制度³⁸を導入したりしている。

若者に対しては、特にその力をポジティブにとらえていて、いつかは地域を支える人材であると考えている。利用者、企画参加者、芸術の専門家、職員など全ての若者が活躍できるように支援する姿勢である。

「高校生と創る演劇」企画でプロデューサーが直接若者と接するのは、オーディション時とワークショップ開始時と上演後の舞台上でのアフタートーク時、そして終演後となる。そのほかは遠巻きにみている。プロデューサーは自身を「活動の最初に主旨を告げ、最後に若者を労う校長先生のような存在だ」と語っていた。活動中は、担当者たちが練習後スタッフルームで話したり、若者に連絡したりしている様子に注意を払い情報を得て、担当者たちを見守っている。

(2) 担当者

担当者は、2018 年度より PLAT 職員となり、希望して 2019 年度より「高校生と創る演劇」担当となった。希望した理由は、2017 年度の「ガンボ！」を観劇し、「高校生がここまでできるのか」という衝撃を受け演劇への興味を持ったからだという。担当者自身は、演劇に関わった経験はなく、劇場職員の業務も全くゼロからのスタートであったが、自分自身

³⁸ PLAT 上演公演で高校生以下料金と「U25」（25 歳以下の特別料金）が設定される制度

の高校時代を思い返し、悩んだり苦しんだりする時期だったとして、若者との協働に関わりたいと考えていた。

制作業務は、PLAT 職員 2 名の担当者と制作助手で分担している。その分担は表 14 の通りである。制作業務には、若者と若者、若者と演出家を始めとする専門家の連絡調整を行う他に広報業務がある。担当者は、「劇場制作の最重要業務は広報であり、観客動員にある」と考え、稽古現場に終始いることはしなかった。担当者は、自分の個人的価値観として誰をも一人の人として尊重したい、それぞれ別人格の一人の人間として接したいという姿勢である。しかし、以下のような反省の言葉もある。

アンケート（PLAT 作成の参加者用のもの：筆者注）を見て、とけこめなかった、緊張したといったコメントがあった。10 歳以上上の大人に対等に扱われても委縮する子もあるだろう、尊重するつもりが突き放してしまった、もう少し高校生の立場になって考えたらよかった。

若者を「尊重すること」と、「突き放すこと」の違いについて考え、若者に真摯に向かう姿勢がわかる。担当者は、若者の健康状態に配慮し、見守る姿勢を持っている。同時に、スケジュール調整並びに若者の出欠管理、様々な連絡調整、情報共有をする役目もあり、指導的な関わり方もしていた。子ども扱いを嫌がる一方で、甘える相手が必要とする若者の特徴に対応しようとしていた。若者たちは、稽古場担当の制作助手に接する機会が多く、担当者は制作助手との情報共有に特に努めたと言っている。担当者に対して、若者の中には、年齢差を感じない楽しい雰囲気を作ってくれたと感じている者がいた。

（3）制作助手

大学在学中から演劇活動を始め、卒業後 2009 年劇団を制作として主宰した。「高校生と創る演劇」企画では、2017 年、2019 年、2021 年に制作助手として稽古場を担当している。

「PLAT」の市民劇の制作助手を担当した経験もある。「高校生と創る演劇」企画について次のような制作助手の言葉がある。

劇場のコンセプトが高校生「と」創るだから、プロと高校生が一緒に創ると思っている。一緒に作品をつくる対等な相手として高校生を見ている。だから、言う通りにしなきゃいけない人と思われすぎないようにしている。

ここから、「高校生と創る演劇」企画の「劇場と若者が協働するというコンセプト」が浸透していることがわかる。制作助手は対等な立場で若者に接し、若者が受け身にならないように、主体性を発揮しやすいように心がけた。例えば、「高校生と創る演劇」の宣伝資料を作成するときに、若者に見本を提示し「なぜ、何のためにやるのか」の理解を促して、若者た

ちが考えやすいようにした。制作助手は、演劇に関わる活動を自分で考える活動ととらえ、「大人が正解を持っていると思わないでほしい」と若者に伝えている。

(4) 演出家

2020年度の「Yに浮かぶ」の演出家は、藤原佳奈である。演出家は、大学卒業後2011年演劇スクールに入学、演劇スクール卒業後、2013年から2020年まで演劇創作ユニット「mizhen」を主宰し、脚本・演出を担当していた。最近では、演劇を用いたワークショップや企業との共同企画、アートスナックの運営等、身体の触発を生む場づくりも積極的に行う。

問いや遊び道具、大事にしたいことを中心に置き、全員で意見を出し合う共同作業を作品創りの方法とする。「高校生と創る演劇」企画演出のオファーには、「高校生という分類をせずに、一人の人間として向かい合いたい」と思って応じた。実際に、「Yに浮かぶ」創作活動に入ると「（若者は：筆者注）問いに返ってくる言葉や考えが、想像以上に大人で、人間としてもリスペクトするところが沢山あった。吸収していくステップが、桁違いに早くて驚いた」と感じている。教育問題に関心を持つ以下のような言葉がある。

・私（演出家）が全体の前で話す時に、全員が体育座りしてこっち見て、「はいっ」と同じ声で、学校の「はい」を言うのが気持ち悪かった。学校じゃないから、それぞれが自分の聞き方で納得して返事しなかったら返事するんでいい、それぞれとコミュニケーション取りたいから「はい」でも「ほい」でもいいと言った。

・教育の問題、間違っちゃいけない、かっこいいことしなきゃいけない、正解を求める、競う、数出す、時間を決めるという反射行動をほぐしたい。これは演出家皆が言う。呪縛を解いていく、リハビリ的に。

以上から、演出家は、学校教育が効率的な均質の無個性集団をつくっているとの問題意識を持っていることがわかる。演劇活動の場では、一人ひとりを尊重して、心と身体を解放し、その持ち味を外に出させようとする考えも示唆されている。この演出家に対して、若者は、「正解はないと言われて衝撃だった」「（既成概念に）とらわれない考え方、今まであった大人とはちがう」「受け止めてくれる、否定しない、教育をしてこない」「尊重してくれた」「対等に接する、子ども扱いしない」「ずっと褒めてくれた」「自由にやった」「意見を受け止めてくれて発言しやすい」「一人の人間として聞いてくれた」「体当たりで、子ども扱いせず向き合ってくれた」などの言葉を残している。若者たちは、演出家が自分を一個人として受容し、認め、対等に接していたと感じている。自分たちの常識、固定概念を覆すような意外性をもった人物と捉えている。演出家と関わることで、若者の意見発信を促進したり、自信を持つことに繋がったりしている。若者が「教育をしてこない」と発言することは、多くの示唆を含んでいる。若者が「教育」を知識やルールなどの「正解」を与え

て覚えこませることだと感じている可能性があり、演劇活動の場で、若者が考え工夫し表現する学びとは異なるものだと感じている。

ここで、2021年度「ミライハ」観察記録からの演出担当の舞台作家の言葉をあげる。これはメンバーも作品も異なるが、「高校生と創る演劇」の稽古を観察したものである。「小屋入り」という本番舞台セットでの稽古開始を目前にした日の稽古終わりに、若者全員に向けて話された内容の一部である。

自分の中から出る集中が良い表現になる。周りがどうあれ、自分たちが考えたことがよい方向へ行く。...(中略)...クリエーションワーク、上演時間に何があっても対応できる、舞台上で危ないことをしていたら、お互いに注意できる関係性は作れている。ぼくら（大人：筆者注）は環境をつくる、それに対して自分たちがやっていることを順応、変化させる。それを徹底するのがみんなの来週（小屋入り中：筆者注）やること。

演出担当の舞台作家は、舞台上では、若者一人ひとりが考え表現して観客の前に立つしかないと強調している。この主体性をもって一人で存在して見られる点が、若者に自己肯定感をもたらす。そして、若者が主体性をもって一人で存在して見られるために、大人が環境を作り見守るという仕組みがある。若者が舞台上に存在する際、大人は傍観者となる。何の手助けもできない状態が対等な関係を生む。

6-3-4.まとめ—大人の関わり方

「高校生と創る演劇」企画の大人たちの若者への関わり方に共通することは、若者をポジティブにとらえる見方と「教えない」姿勢である。自分が若者であった頃の困難さやポテンシャルを思い起こし、参加する若者を指導する姿勢ではなく、協働する姿勢で接している。

「できない」若者を支援するのではなく、「できる」若者と共に創るという姿勢である。具体的には、第一に、若者一人ひとりへの個別対応があげられる。若者一人ひとりに興味、関心を持ち、一個人として若者を尊重している。第二に、若者の主体性を促している。若者自らが自分の思考と心と身体を動かして表現することを促している。周囲に同調するのではなく、自分自身を見つめることが演技表現の土台にあることを伝えている。演劇活動では技術よりも個人の内面や主体性が表現に大きく関係するときがある。そこには、他者の介在はない。舞台上でただ一人、生み出すこととなる。

「教えない」ことが、「個の尊重」「対等」「主体性」を生んでいる。そして、この関わり方が若者に自己の再認識の機会をもたらす、自己肯定感をもたらす要因となっていて、協働のアプローチによる「高校生と創る演劇」が若者の居場所となっている可能性が示されている。

6-4.大人の関わり方をうむ仕組み

6-4-1.共通の目標を持つプロと若者の協働と二つのリミット

6-2-1.で示したように、「高校生と創る演劇」企画には、チケット販売をして上演する責任分担が若者と大人の双方に伴う。演出家はもちろん、若者も料金発生の責任を分担する重さを理解して活動していた。そして、「チケット代金の発生する上演の成功」という共通の目標を持って、大人と若者が対等に責任分担する協働の仕組みがある。この仕組みから、若者を「対等に扱う」大人の接し方が生まれる。若者一人ひとりの「できること」を認めるという「個の尊重」の姿勢も生まれる。

また、この活動には二つのリミットがある。第一に期間限定である。「高校生」である原則3年間しか参加できない。11月には上演して活動を終える。現在のところ、演出家も1回だけの演出となっている。担当者も2年から3年で交代している。期間限定であると、人間関係が固定化されにくく、柔軟な対応、受容が可能となる。演出家が「限られた時間が変容を生む」という言葉を残しているように、終わりのみえる時間へのモチベーションは高い。第二に参加人数限定である。キャスト人数に限界がある。2021年現在までは、10人から21人のキャスト人数である。スタッフは人数制限しないとプロデューサーは、言っていたが、6人から12人という実績である。結果的に関わる大人の人数は、約16名であるので、大人が若者に個別対応しやすい。若者は限られた人数の中で埋もれることなく、自分への視線を感じることができる。特に、スタッフワーク、音響・照明の担当では、1~2人の配置となるので、そこを希望した若者は、大人と1対1で協働する機会を求めている可能性がある。

6-4-2. 運営管理事務室のコミュニケーション環境とキー・パーソンの存在

PLATは、若者との関わり方についての職員研修は実施していない。情報共有の会議やミーティングの時間も特別に設定していない。しかし、運営管理事務室での雑談を交えた情報共有が盛んで、プロデューサーや担当以外の職員もその場に居合わせることから耳に挟むかたちで情報共有できる環境にある。若者などへの電話連絡も運営管理事務室で実施されるので、周囲に伝わっていくことが多い。このような情報共有がなされやすい環境が個別対応しやすい仕組みとなっている。

また、「高校生と創る演劇」担当者は2~3年で交代していくため、8年の実績の中で、担当経験者が増加し、企画の事情を共有しやすく円滑なコミュニケーションが実施されている。その担当配置を決定するのは、企画を立ち上げたプロデューサーである。プロデューサーがキー・パーソンとなって、専門人材を始めとする大人の配置を毎回決定し、作品決定にも関わって、6-4-1の「チケット代金の発生する上演の成功」と「責任分担」の協働の仕組みを作っている。

6-5.まとめ

「高校生と創る演劇」は、その企画名に助詞「と」を用いているように、劇場の専門家と若者が上演作品を創る協働である。これは、若者と大人が対等な立場で創るという PLAT のコンセプトとして浸透している。これを背景として、「共通の目的を持ち、チケット代金の発生する責任を分担して作品を作る」「時間的、人数的限定のある企画」という仕組みと、職場内の円滑なコミュニケーション環境があった。キー・パーソンであるプロデューサーの専門人材と職員の配置がこの仕組みと環境を支えている。「高校生と創る演劇」では、大人が若者をポジティブにとらえる見方と「教えない」姿勢を持つ。「できない」若者を支援するのではなく、「できる」若者と共に創るという姿勢で「個の尊重」「若者自らの表現を促すこと」を実施している。

第7章 結論と今後の展望・課題

二事例を比較することで、若者への大人の関わり方とそれを生み出す仕組みを明らかにし、演劇活動を用いた若者の居場所づくりの展望を述べる。最後に、今後の課題を述べる。表 21 に二事例の比較を示す。

7-1. 結論

第5・6章で述べてきたように二事例の共通点として、第一に、若者への大人の関わり方があげられる。視点が異なり、仕組みや若者へのアプローチの仕方に相違点のある両事例ともに、大人が若者一人ひとりに興味関心をもって接し、若者の「個の尊重」がなされている。個を尊重することは、比較やレベルをはかることをせず、若者一個人をありのままに受け止めることである。その接し方が若者に「対等」に扱われているという印象や自己肯定感を生む。そして、「若者の主体性を促す、教えない」接し方をしている。若者が意見を発信しやすい話し方や場の雰囲気を作り、若者の言動をありのままに受け取り認めている。そして、この関わり方の背景には、第二の共通点がある。それは、職場での円滑なコミュニケーションがなされる良好な大人同士の関係性である。両事例ともに、大人同士の日常的な会話の中での情報共有がなされ、意思統一をはかることができている。大人の間で活動目的の共有がなされ、同じ姿勢で若者に関わっている。

職場内のコミュニケーションや共有を可能としているのは、キー・パーソンの存在とその人物主導での人員配置と手法の継承である。この点が第三の共通点となる。現在、両事例ともに、企画の立ち上げに関わった人物がキー・パーソンとなって企画を牽引、支援している。その人物が大人の配置を決定し、手法を継承しやすくしている。両事例のキー・パーソンは、それぞれタイプやリーダーシップの取り方は異なり、職場内の雰囲気も同じではない。しかし、大人同士の良好な関係性をうみだしている点は共通している。この大人同士の良好な関係性を背景として、大人が精神的余裕をもって若者に関わっていると考えられる。企画設立の経緯を知り、職員を統括する役目にある人物がキー・パーソンであることの意義は大きい。

二事例に共通する大人の関わり方うんでいるのは、職場での円滑なコミュニケーションがなされる良好な大人同士の関係性である。それを可能としているのは、キー・パーソンの存在とその人物主導での人員配置と手法の継承である。

7-2. 今後の展望

前節では、二事例の共通点を挙げて、明らかになった大人の関わり方とそれをうみだす仕組みについて述べた。ここでは、相違点と調査結果をもとに、みえてきたことを整理し、今後の展望を述べる。

7-2-1. 「支援」を表出しない居場所づくり

二事例の相違点の第一に、みているものが異なることがあげられる。「オフィシャル演劇」が実施される「ゆう杉並」は児童福祉法に拠る児童館として、根本に若者への視点がある。若者が「やりたいこと」の実現をめざし、「中高校生の居場所支援、参画、心理的援助、行政機関等との連携推進」を目的とする。そこには、若者のニーズを支援する居場所づくりの姿勢がある。しかし、ここでの「支援」は、先行研究での若者の顕在化した困窮度への「支援」とは大きく異なる。若者に視点をおき、彼らのやりたいことを支援するというポジティブなものである。顕在化していない若者のニーズを掘り起こして、その実現を支援するものである。そのために、日ごろから若者との関係性を構築し、若者の話に耳を傾けている。そして、「オフィシャル演劇」も、若者にフォーカスして、「表現技術の向上と区内イベントや他施設での発表、参加者の心の解放」を目的としている。その主催者側の意図を受けて、参加する若者は、アンケートの中で、参加後の学校生活の充実を示す者もいる。「積極的に人と関わり合おうとする意識になった」と回答をしたものもいる。自由記述部分では、交友関係の広がりや、自分がやりたいことの発見、考えの広がり、地域とのつながりなどを変化と捉えている者がいた。精神的な解放感を得たという以下のような記述もみられた。

演劇を学校以外で活動できて、学校というしばりから解放された気がします。世界が広がりました。

ここから、参加による生活上の大きな変化はみられないが、若者の精神的変化がもたらされている可能性がみて取れる。

一方、「PLAT」は、若者を含む地域住民をみている。「高校生と創る演劇」が実施される「PLAT」は文化芸術基本法、劇場・音楽堂等の活性化に関する法律に拠る公立文化施設として、根本に地域住民への視点がある。「地域住民のための芸術文化の振興、芸術文化を活用した市民の交流、創造活動の活性化」を目的とする。これにもとづいて「高校生と創る演劇」は「プロのスタッフとの協働で作品創造する機会の提供、参加者が新しい視点と思考や自らが表現することに対して積極的に行動する力を獲得すること」を目的としている。そこには、チケット販売実施のうえで地域住民のニーズに応じた上演を目指す若者と大人の責任分担の協働の姿勢があって、「支援」の姿勢はない。

しかし、参加した若者たちは、何らかのかたちで自己を見つめ、参加後に精神的変化をとげている者が多い。例えば、インタビューの中で、数名であるが学校が好きではないと語る者がおり、「先生と生徒が怖くて体調が悪くなりがちだった」「「良い思い出は無いに等しい、人間関係、大人（先生：筆者注）が怖い」「教室はいろいろな人がいて、無理やり距離感を詰めてくる」などという言葉があった。人間関係、特に、大人との関係性を保つことに困難を感じていたことがわかる。参加後の変化については、アンケートの自由記述で、「友

達との会話が増えた」「学校と稽古の両立を経験して、時間の使い方がうまくなった」と書いたり、以下のような言葉を書いたりした者もいる。

- ・人前に立つことにより、自分と向き合うことが増えたため、自信がもてるようになりました。
- ・参加前は自分の心や体の変化に流されるままに生きてきましたが、参加後は嬉しいとき、悔しいときの自分の変化に一つ一つ敏感になりました。

上演体験を「自分と向き合う」機会の増加ととらえそれが自信を生んだと考えたり、自分の変化に敏感になったと感じたりしている。参加前後の日常生活の変化はなかったが、内面の変化を自覚している。参加後、学校での充実感を覚える者が増加し、楽しさ、疲労感が減少した。「お金の発生する責任感を知った」「人間関係の作り方を考えるようになった」「人と関わるのが好きになった」「大人にほめてもらって、自分のよいところなど、自分について知ることができて前向きになれた」「いろいろな体験をしてきた大人と関わったことで、将来に向けた視野が広がった」などと、変化をとらえている。参加中に自分をみつめたり、周囲の大人から認められたりして、自己を改めてとらえなおして自己肯定感を高めている。自己肯定感と共に、演劇の専門家を身近にすることで様々な働き方や価値観があることを知り、先の展望が開けている。その展望が生まれたことで充実感が増していると考えられる。関連して、過年度の参加者は次のように述べている。

（専門家は：筆者注）はきはき、初めはちょっと怖かった、芸術に関わる仕事が身近になった、芸術で食べていける訳ないと反対されてて、食べていける人がいて、それを知ってうれしかった。

ここでも、専門家が職業として演劇に携わっていることを知って、視野が開け将来の進路選択の可能性が広がった経験が語られている。また、若者が日常的に身近に接する機会の少ない演劇専門職が新たに大人のモデルとして加わったことも示唆している。

また、2020年度参加者の自由記述欄には、次のような言葉もあった。

- ・自分の今までいた環境に何の疑問もなく存在していたけど、「Yに浮かぶ」が楽しすぎて、今までの環境がつらくなった。
- ・参加後、しんどくても死にたいと思うことが少なくなりました。
- ・いつ死んでも後悔しないように行動することが多くなった、その場を楽しむ自分だけじゃなく、みんな巻き込もうと意識した。

若者にとって、参加体験は大きな意味をもったことが示されている。自身をみつめ参加前とは異なる考えになったことがわかる。

アンケートで、変化を回答した 11 名のうち、通信制・定時制高校に通う者は 4 名、そのうち 2 名は「Y に浮かぶ」参加前後に進路を変更している。参加中に自己について考える機会を得たといえる。進路変更した 2 名のうちの一人の次のような言葉がある。

参加する前までは何も考えずに（学校に：筆者注）行けていたが、そんな自分がからっぽだと気が付いたのが（進路変更の：筆者注）原因だと思う。

企画参加前の自分を「からっぽ」と表現し、参加体験の中に、進路変更を決断し実行した自己変容の過程があったことが示唆される。この若者は、参加前の学校生活を負の印象でとらえていて、参加直後に進路変更してから、「退屈さ」と「苦しさ」は変わらないが、そこに「安心感」が加わった。またこの者は、参加後、「自分らしくいられると感じられる場所」が「ない」と答えている。自己について考えるなどの苦悩が続いていることがわかる。進路変更をしたもう一人には、参加前の自分の生活について、「学校、楽しくない、バイト、忙しい、家庭、この世の終わり」という言葉がある。参加後に進路変更し、「演劇とは奥深いものであり、頑張らねばと思った」「自分自身をありのままに表現できるようになった、特権的な（自分の特性のことかと思われる：筆者注）部分を見出せた」といった言葉を残している。この 2 名は、置かれた状況に苦しんだり、流されたりしていたことが示され、参加後、自分で考えて進んでいき始めたことがわかる。

以上述べてきたように、「Y に浮かぶ」参加体験中に、何らかのかたちで自己を見つめ、参加後に精神的変化をとげている若者が多い。これは、3-2 で述べた、若者の居場所づくりが「自己の再認識の機会をもたらし自己肯定感を高める活動」であることと合致し、協働のアプローチによる「高校生と創る演劇」が若者の居場所となっている可能性を示す。

多様な背景を持つ若者が参加し、「高校生と創る演劇」が結果的に若者の居場所となっている可能性が示された。このことから、真に「支援」を必要とする若者には、「支援」を表出しない手法が有効であることが示唆される。「高校生と創る演劇」は主催者が期せずして若者の居場所となっている。

7-2-2. 若者の参加

二事例は、活動内容も異なる。発表の機会の設定時期や方法、チケット料金の発生の有無が大きな違いである。特に、「高校生と創る演劇」でのチケット販売に伴う責任分担は、若者たちに明確な役割感を与え、自分が必要とされている実感を持たせている。この責任分担は、先行研究における「参画」と、社会参加、運営に関わるという点は共通している。しか

し、「高校生と創る演劇」参加者は、「参画」のようなリーダーシップを伴う積極的な参加を果たそうと思っているわけではない。若者自身を対等に扱って認めてくれる大人と、共通の目的に向かって、使命感をもって実践的に協働している。

また、二事例は、若者の参加動機が演劇への興味という点は共通するが、「オフィシャル演劇」参加者は演技力の向上やそこでの交流に意義をみだしている。「オフィシャル演劇」の「若者のやりたいこと支援のアプローチ」が作用していると考えられる。若者たちは、興味ある演劇活動ができることで楽しみを見いだしている。「高校生と創る演劇」参加者は、この上演企画そのものへの興味が強く、参加動機をうみだしている。さらに参加体験中に、何らかのかたちで自己を見つめ、参加後に精神的変化をとげている若者が多くみられる。この点は、この企画が期間限定である点も一因だと考えられるが、上演体験を「自分と向き合う」機会の増加ととらえ、それが自信を生んだり、自分の変化に敏感になったり、前向きな変化を生みだしている。これは、「協働のアプローチ」による「高校生と創る演劇」が若者に作用し、若者の居場所感を醸成していると考えられる。

両事例は、関わる大人の人数と役割が相違する点も相違している。「オフィシャル演劇」では、3人の大人が「講師」「担当者」として関わっている。常に同じ大人がいることで若者は安心感を得ている。ここには、地域性が関連すると考えられ、都市部に生活する若者に「心の解放」や安心感をもたらす「オフィシャル演劇」活動は意義深い。「高校生と創る演劇」では、16人の大人が、演劇専門家と担当者として関わっている。専門家はほとんど都市部からの来豊であり、地方で生活する若者にとって、「演劇専門家」である「都市部の大人」の多様性に多く関わることは大きな刺激となる。多様な大人の多く存在する東京で、若者に「安心感」を提供する「ゆう杉並」と、均質的な大人の多く存在する豊橋で、若者に「多様性」を提供する「PLAT」の対比からは、地域性によって必要とされるものが異なる点が示唆される。

7-2-3.演劇活動

本稿の問題意識のスタートは、高等学校教育に関わる大人たちの多忙さと若者たちの窮屈さにあった。その中で、演劇活動を通して生き生きとする若者をたくさん見てきた。授業参加はできなくとも、演劇部活動だけには参加できる若者、教室では全く気配を消して存在感のない若者が、演劇活動の場では別人のように振る舞う様子、そこで漠然とした演劇活動の力を感じていた。前節までに述べてきたように、若者の居場所づくりにおいては、演劇活動の数値化や明文化には困難を伴う有効性があった。

演劇活動は、参加者一人ひとりの主体的な表現と働きで成り立っている。舞台上では、原則一人で表現しなければならないし、キャスト、スタッフワークを含めて多様な役割で成り立っているため個人個人の責任ある協働がなされなければ上演に至らない。演劇活動は、その主体性を生むために多くの時間を費やすことをよしとする。大人が指示したりしない「教

えない」接し方は多くの時間を必要とする。それは、話し合いであったり、シアターゲームであったり、雑談であったりするが、非効率的な無駄と思われる時間である。具体的には、「オフィシャル演劇」において、若者の意見や自己決定を待つことや、大人が断定的な言い方を避けていることなどがあげられる。「高校生と創る演劇」でも2時間かけて1シーンを作り、最終的に本番ではそのシーンをカットしたりしている。表現を創る演劇活動にはこのような無駄と思われる時間が必要で、その時間が「主体性を生む、教えない」関わり方を生み、それぞれの若者の自己肯定感を高めている。多様な役割のある活動は、どれ一つ欠けても協働が成立しない点で、社会生活では感じにくい「自分の存在意義」を実感しやすい。

また、演劇活動は均一的な表現では作品として成立しないため、一人ひとりの表現の違いが尊重される。誰かと比較したり、スキルのレベルをはかったりする類の活動ではない。若者個人の表現が重視されることは「人と同じでなくてもよい自分への肯定感」をうみやすい。演劇の専門家にとっても、若者の表現に触れることは、自分たちとは異なる新たな表現に触れることとなり、今までにないものをうみだす「創作」を目指しているので、若者の表現が表出されるまで「待つ」ことができる。

その他にも、演劇活動は、誰もが幼少時から一度は体験したことのある舞台発表のかたちをとる。その経験が演劇活動への動機付けとなる場合がある。例えば、「オフィシャル演劇」4年目の参加となるDの以下のような言葉がある。

小学校の時とかに、3年生の学芸会の時「オズの魔法使い」で獵師の役、舞台上で役になるのは変な体験、自分なのに自分じゃない。

現在の日本の初等教育や幼児教育の中でほとんど全ての子どもが演劇体験を持っている状況が参加の契機となっている。また、舞台上で役を演じて人に見られる体験を非日常的なものと印象に残していることがわかる。こういった人から見られる主体的な発表体験は参加者の自己肯定感を高める。演劇活動は特別なスキルや準備の不要な場合があるうえに、スタッフワークを含めて多くの役割を持つ活動でもあるので、若者の多くの主体的参加を促す可能性がある。

事例研究を通して、制度や仕組みが異なっても、若者の居場所となる大人の関わり方がうまれていることから、両事例に共通する演劇活動がその関わり方を生んでいると示唆される。演劇活動を通した若者の居場所づくりは、その活動の特性から参加する若者の主体性を重要視し、教えない、個を尊重するという大人の接し方を生みやすくすることが示され、演劇活動を通した居場所は、若者の自己肯定感を高める可能性を持つことが明らかになった。

7-3. 今後の課題

若者の学校、家庭以外の居場所の数の確保のために、演劇活動を通した大人の関わり方とそれを生み出す仕組みを明らかにすることはできた。しかし、そこで若者たちが得ているものについて実証的に明らかにすることはできなかった。「居場所感」を数値化することは困難であり、本稿では若者たちの参加前後の変容に注目したが、それは制約ある条件のもとでのその場限りの変容であるかもしれず、大人の関わり方が若者の生活全般に影響していたのかどうかを明らかにすることはできなかった。また、大人についても、演劇活動の中での若者への関わり方のみとらえたにすぎず、各人の背景に踏み込むことはできなかった。今後、大人の関わり方と若者の変容をとらえるためには、長期的、全般的に参加観察する必要がある。また、本稿では調査によって収集したデータの種類が多く、その多様なデータをあわせとらえた点からみえたものもあったが、データの種類を絞って分析を深めることができなかった。若者の変容をみるために、参加観察は有効な方法であったが、オンラインでの観察は様々な制約があり、表情、声色などの変化をとらえることや日常的なやりとりを観察することはできなかった。今後、オンラインでの効果的な観察方法を探ることも必要である。

取り上げた二事例共に周到に設計され、多くの人材と安定した場所と確定した予算で実施されている成功例である。今後は、それらを汎用性のあるものとするための手法を明らかにすることが課題である。特に、参加者の性差の問題について検証する必要がある。二事例の共通点として、参加者の性別が女子に偏っている点があげられる。「オフィシャル演劇」では、女子 10 人に対して男子 2 人が参加している。「高校生と創る演劇」では女子 13～16 人に対して男子 2～3 人が参加している。これは、主催者が意図したものではなく、偶然の産物であるが、演劇活動に男子の参加者が少なくなる傾向はなぜなのか、ジェンダーの視点からも「演劇活動」をとらえて、より多くの若者の主体的参加を促す活動のあり方を探求する必要がある。主催者である大人にも視点をあて、若者への関わり方の背景となる若者観にまで踏み込んだ研究が求められる。

多様な演劇活動を通した居場所づくりについて、様々な視点からより多くの研究が行われることが期待される。また、今回明らかになった「教えない」関わり方がどのように若者の居場所づくりに波及するのかを長期的、全般的に観察して明らかにしたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、多くの方々から御指導、御協力をいただきました。

事例選定にあたり、施設見学やお話をうかがうなどさせていただいた、公益財団法人兵庫県立芸術文化協会「兵庫県立尼崎青少年創造劇場」の田房様、公益財団法人東京都歴史文化財団「東京芸術劇場」の田室様、公益財団法人可児市文化芸術振興財団「可児市文化創造センター」の河合様、お忙しいにもかかわらず、お時間をとっていただき、ありがとうございました。劇場の取り組みを勉強させていただき、大変参考になりました。

また、約1年間、調査させていただいた「ゆう杉並」の事業係長はじめ職員の皆様、「オフィシャル演劇」講師万田様、参加高校生の皆様、並びに、「PLAT」の芸術文化プロデューサーの矢作様はじめ職員、関係者の皆様、「高校生と創る演劇」演出家の藤原様、参加高校生の皆様、参加OG、OBの皆様に深く感謝いたします。参与観察、インタビュー、アンケートへの御協力、資料の御提供など、本研究のために多大なる御理解と御協力をいただきました。

主指導の高島知佐子先生には、大学院受験の時から大変お世話になりました。教育現場しか知らなかった私の問題意識を研究のかたちに導いてくださいました。心より感謝申し上げます。副指導の森俊太先生をはじめ、文化政策研究科の先生方には多くの御指導と御助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

＜書籍・論文・雑誌＞

- 青山鉄兵（2017）「青少年教育研究におけるユースワーク論の位置—集団と指導者・支援者に関する議論に注目して—」『人間科学研究』第 39 号、35～50 ページ.
- 阿比留久美（2020）「自分で選ぶ自分の『居場所』—子ども・若者と大人のかかわりかた—」『教育』No.893、62～69 ページ.
- 石本雄真（2009）「居場所概念の普及およびその研究と課題」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 3 巻第 1 号、93～100 ページ.
- 石本雄真（2010）「青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響」『発達心理学研究』第 21 巻第 3 号、278～286 ページ.
- 伊藤健（2017）『芸術団体における社会包摂活動の調査研究』公益社団法人日本劇団協議会、27～29 ページ.
- 海野裕子・三浦香苗（2007）「『ひとりの時間』の持ち方から見た現代青年期」『昭和女子大学生生活心理研究所紀要』第 10 巻、65～74 ページ.
- 太田由加里（2000）「中学生・高校生を取り巻く環境と居場所づくり—グループワークの活用を軸として—」『人間福祉研究』第 3 号、113～125 ページ.
- 奥地圭子（2019）「フリースクールと演劇活動」『演劇と教育』第 61 巻第 1 号、晩成書房、4～7 ページ.
- 尾崎菜々子（2013）「中高校生専用児童館「ゆう杉並」における中高生運営委員会の機能—居場所において育まれる委員の社会性及び自己肯定感—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊第 21 巻 1 号、1～11 ページ.
- 小野田瑠璃・吉岡和子（2014）「家庭における居場所感が思春期の子どもに与える影響—自己肯定感と友人に対する『甘え』との関係に注目して—」『福岡県立大学心理臨床研究』6 巻、75～84 ページ.
- 川上慶子（2008）「地域社会における中高生世代の居場所づくり実践に関する研究—長野県茅野市子ども館『CHUKO らんどチノチノ』の実践から—」『国立青少年教育振興機構研究紀要』第 8 号、13～23 ページ.
- 甲村和三・飯田沙依亜（2013）「大学生に見る居場所感と自己肯定感の関係」『日本心理学大会発表論文集』第 77 回、1134 ページ.
- 古賀弥生（2015）「演劇によるホームレスのためのコミュニケーション講座の実践と検証」『活水論文集文学部編』第 58 集、123～147 ページ.
- 古賀弥生・藤本学（2018）「応用演劇によるホームレス就労自立支援の実践と成果」『地域共創学会誌』創刊号、23～40 ページ.
- 古賀弥生（2019）「フリースクールにおける演劇ワークショップの実践と検証」『地域共創学会誌』vol.2、23～34 ページ.

- 斎藤富由起・小野淳・社浦竜太・守谷賢二（2008）「高校生における居場所感と自己肯定感および無効化環境体験との関連性」『千里金蘭大学紀要』第 5 巻、69～81 ページ。
- 相良友哉（2020）「地域住民の交流拠点としてのコミュニティスタジオに関する報告—『第三の場』としての機能と可能性—」『人間生活文化研究』No.30、852～859 ページ。
- 芝崎美和・芝崎良典（2016）「青年期女子の自己教育力を規定する要因の検討—居場所意識との関連性から—」『幼年教育研究年報』第 38 巻、77～84 ページ。
- 澁谷寛子（2017）「人間関係に焦点を当てた演劇的手法に関する研究の概観—対人援助職に対する心理教育的アプローチの実践に向けて—」『立教大学臨床心理学研究』第 11 巻、37～52 ページ。
- JATET 編集部（2013）『JANET Journal 2013 vol.5』公益社団法人劇場演出空間技術協会。
- 新谷周平（2001）「『居場所』型施設における若者の関わり方：公的中高生施設『ゆう杉並』のエスノグラフィー」『生涯学習・社会教育学研究』第 26 巻、21～30 ページ。
- 杉本希映・庄司一子（2006）「『居場所』の心理的機能の構造とその発達の変化」『教育心理学研究』第 54 巻第 3 号、289～299 ページ。
- 住田正樹（2003）「子どもたちの『居場所』と対人的世界」住田正樹・南博文（編）『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会、3～17 ページ。
- 高谷邦彦（2019）「サード・プレイスとしての Twitter—子育て主婦ユーザの場合—」『名古屋短期大学研究紀要』第 57 号、1～13 ページ。
- 高田佳輔（2018）「大規模多人数同時参加型オンラインロールプレイングゲームのエスノグラフィー 仮想世界において創発的サードプレイスをいかに生み育てるか—」『社会学評論』第 69 巻 4 号、434～452 ページ。
- 田中治彦・萩原建次郎（編著）（2012）『若者の居場所と参加』東洋館出版社、8 ページ。
- 中島喜代子・廣出円・小長井明美（2007）「『居場所』概念の検討」『三重大学教育学部研究紀要』第 58 巻、77～97 ページ。
- 中島喜代子・吉川静香・山中章子（2011）「中高生の居場所形成のための公共施設利用促進に関する研究—公共施設管理者に対する調査—」『三重大学教育学部研究紀要』第 62 巻、75～86 ページ。
- 中野遼子（2018）「演劇創作プロセスにおける人的ネットワーク構築に関する考察—ネットワーク構築要因を中心に—」『多文化関係学』15 巻、51～67 ページ。
- 中藤信哉（2015）「『居場所』概念と日本文化の関連について」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 61 号、1～10 ページ。
- 成澤久美（2019）「演劇の手法による教育的効果についての一考察—農業高校における食育を中心とした地域活動を通して—」山形大学大学院教育実践研究科年報』第 10 巻、268～271 ページ。
- 西中華子・石本雄真（2017）「児童期・青年期の居場所の分類とその機能の検討：居場所感の要素による居場所の分類」『神戸大学発達・臨床心理学研究』第 16 巻、32～41 ページ。
- 服部一枝（2010）「『生きる力』と『演劇』」『日本橋学館大学紀要』第 9 巻、49～60 ページ。

- 服部壮一郎（2017）「学習支援における「居場所」概念の考察」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』第 64 巻第 2 号、107～116 ページ。
- 藤竹暁（2000）「居場所を考える」藤竹暁（編）『現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ③現代人の居場所』至文堂、47～56 ページ。
- 藤野千種（2017）「SNS を介したインターネット上での心理的居場所と well-being の関連」『神戸大学発達・臨床心理学研究』第 16 巻、14～18 ページ。
- 藤原靖浩（2010）「居場所の定義についての研究」『教育学論究』第 2 号、169～177 ページ。
- 益川優子（2019）「中高生における教師からもたらされる居場所感～居場所感をもたらし教師の特徴とその発達の变化と性差の検討～」『奈良女子大学人間文化研究科年報』第 34 巻、35～45 ページ。
- 松井かおり（編著）・田室寿美子（著）（2020）『演劇ワークショップでつながる子ども達 多文化・多言語社会に生きる』成文堂。
- 松本奈津美・安井友康（2019）「障害者の演劇活動がもたらす社会関係性の変容—実践参加者へのインタビュー調査から—」『北海道教育大学紀要、教育科学編』第 70 巻第 1 号、145～153 ページ。
- 本村真（2018）「子どもの居場所支援における学生ボランティアの役割に関する考察」『ボランティア学研究』第 18 巻、41～50 ページ。
- レイ・オルデンバーク/忠平美幸（訳）（2013）『サードプレイス』みすず書房。
- 渡辺弥生・小高佐友里（2006）「高校生における『居場所』としての学校の認知について」『法政大学文学部紀要』第 53 号、1～15 ページ。

< 報告書・法律 >

- 国立青少年教育振興機構「高校生の心と体の健康に関する意識調査—日本・米国・中国・韓国の比較」2018 年 3 月。（https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/126/、2020 年 10 月 29 日閲覧）。
- 厚生労働省自殺対策推進室・警察庁生活安全局生活安全企画課（2021）「令和 2 年中における自殺の状況」2021 年 3 月。（<http://www.nhlw.go.jp>、2021 年 12 月 15 日閲覧）
- 財団法人横浜市青少年育成協会（2008）「横浜市青少年交流センター事業計画」（https://www.city.yokohama.lg.jp/business/kyoso/public-facility/kaku-katsuyou/kodomo/dounyu.files/1103_20180801.pdf、2021 年 12 月 4 日閲覧）
- 豊橋市公共施設白書個別表（<https://www.city.toyohashi.lg.jp/secure/55496/202012hakushokobetu03.pdf>2021 年 11 月 21 日）。
- 内閣官房教育再生実行会議担当室（2017）「教育再生実行会議第十次提言について」文部科学広報
内閣府（2020）「子供・若者の意識に関する調査（令和元年度）」村上徹也（2020）第 3 部有識者による考察「青少年教育の視点からの分析レポート」国立青少年教育振興青少年教育センター（<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r01/pdf/s3.pdf> 2020 年 10 月 29 日閲覧）。

内閣府「子供・若者インデックスボード」（2021）（https://www8.cao.go.jp/youth/index_board/pdf/print.pdf、2021 年 11 月 12 日閲覧）。

平成 30 年度劇場・音楽堂機能強化推進事業（劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業）自己点検報告書（https://gekijo-ongakudo.ntj.jac.go.jp/hyouka/2019hyouka_list1.html、2021 年 11 月 21 日）。

平成 30 年度劇場・音楽堂機能強化推進事業（地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業）成果報告書（https://gekijo-ongakudo.ntj.jac.go.jp/hyouka/2019hyouka_list2.html、2021 年 11 月 21 日）。

文部科学省国立教育政策研究所（2015）『生徒指導リーフ』第 2 版。

ユニセフ・イノチェンティ研究所「レポートカード 16 子どもたちに影響する世界 先進国の子どもの福度を形作るものは何か」による。（<https://www.unicef.or.jp/library/pdf/labore16j.pdf>、2021 年 11 月 12 日閲覧）。

「子ども・若者育成支援推進法」（2009）

子ども・若者育成支援本部（2021）『子供・若者育成支援推進大綱～全ての子供・若者が自らの居場所を得て、成長・活躍できる社会を目指して～』

< 刊行物 >

公益財団法人豊橋文化振興財団（2020）『PLAT NEWS』46 号、公益財団法人豊橋文化振興財団。

杉並区立児童青少年センター『ゆう杉並』（リーフレット）杉並区立児童青少年センター。

穂の国とよはし芸術劇場（2014）『高校生と創る演劇 転校生 報告書』穂の国とよはし芸術劇場

穂の国とよはし芸術劇場（2015）『高校生と創る演劇 赤鬼 報告書』穂の国とよはし芸術劇場

穂の国とよはし芸術劇場（2016）『高校生と創る演劇 女子にしか言えない 報告書』穂の国とよはし芸術劇場

穂の国とよはし芸術劇場（2017）『高校生と創る演劇 ガンボ 報告書』穂の国とよはし芸術劇場

穂の国とよはし芸術劇場（2018）『高校生と創る演劇 滅びの子らに星の光を 報告書』穂の国とよはし芸術劇場

穂の国とよはし芸術劇場（2019）『高校生と創る演劇 転校生 報告書』穂の国とよはし芸術劇場

穂の国とよはし芸術劇場（2020a）『高校生と創る演劇 Y に浮かぶ 報告書』穂の国とよはし芸術劇場

穂の国とよはし芸術劇場（2020b）『PLAT2019 アニュアルレポート』穂の国とよはし芸術劇場（<https://www.toyohashi-at.jp/archive/pdf/annual2019.pdf>2021 年 11 月 21 日）

穂の国とよはし芸術劇場（2021）『ミライハ』（リーフレット）穂の国とよはし芸術劇場

< 調査先資料 >

杉並区子ども家庭部児童青少年課事業係（2020a）『児童青少年センター施設概要』杉並区立児童青少年センター。

杉並区子ども家庭部児童青少年課事業係（2020b）『令和元年度 杉並区立児童青少年センター 事業報告』杉並区立児童青少年センター.

杉並区子ども家庭部児童青少年課事業係（2021a）『ゆう杉マニュアル』杉並区立児童青少年センター.

杉並区子ども家庭部児童青少年課事業係 OJT 担当（2021b）『令和3年度 OJT 計画』杉並区立児童青少年センター.

杉並区子ども家庭部児童青少年課事業係（2021c）『職員動き方マニュアル』杉並区立児童青少年センター.

<ホームページ等>

阿佐ヶ谷ジャズストリート HP (<https://asagayajazzstreets.com/about.html>、2021年12月1日閲覧).

株式会社 Schoo HP (<https://schoo.jp/teacher/2620>、2021年12月21日閲覧).

株式会社 bamboo HP (<https://bam-boo.biz/>、2021年12月12日閲覧)

CANPAN FIELDS HP (<https://fields.canpan.info/>、2021年11月21日閲覧).

厚生労働省 HP (<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/jidoukan.html>、2021年12月1日閲覧).

公益社団法人全国公立文化施設協会 HP (<https://www.zenkoubun.jp/about/index.html>、2021年12月21日閲覧).

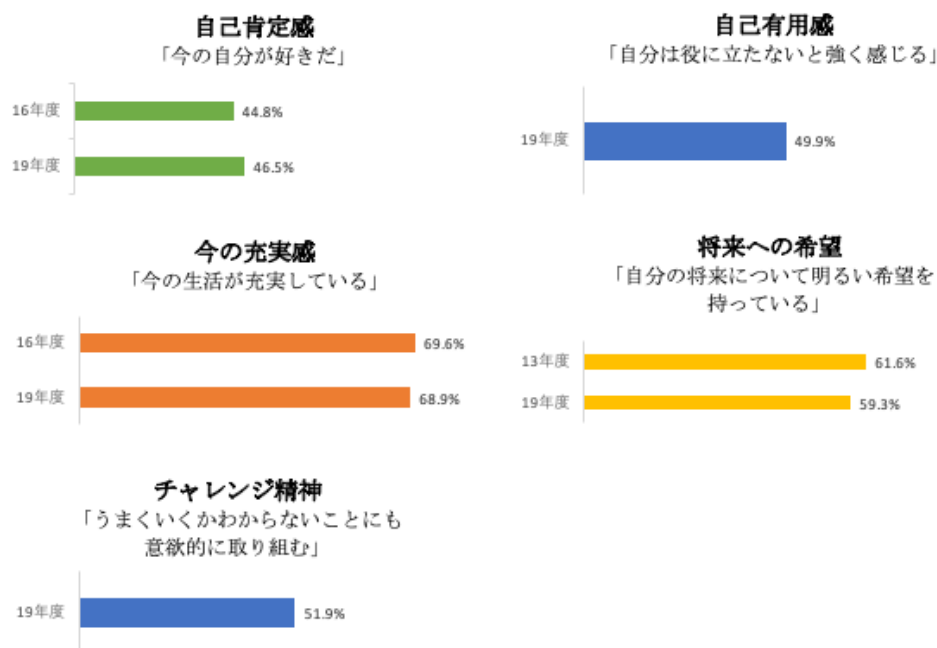
電通 News Release (2021年04月08日) 「LGBTQ+調査2020結果」 (<https://www.dentsu.co.jp/news/release/2021/0408-010364.html>、2021年12月6日閲覧).

豊橋市 HP (<https://www.city.toyohashi.lg.jp/item/17110.htm>、2021年12月1日閲覧).

横浜市民こどもミュージカル HP (<https://piiiiibou.wixsite.com/yokohamakidsmusical/blank-1>、2021年12月21日閲覧).

図表

(図 1) 子供・若者の意識—自己について



(出所) 内閣府 (2021) 「子供・若者インデックスボード」

(https://www8.cao.go.jp/youth/index_board/pdf/print.pdf 2021 年 11 月 12 日閲覧) より転載。

(表 1) 居場所の全体像

基準となるキーワード	+建築	+心理	+教育	+社会
居場所(5161)	977	553	1306	977
居場所感(207)	3	124	78	30
居場所づくり(793)	83	52	258	186

(注) 数字は論文数を示す。居場所というキーワードについての検索結果最上段 4 つの合計は 3813 件であり、居場所という語のみでの検索数 5161 のうち約 70%を占めている。

(出所) 2021 年 9 月時点の Cinii (NII 学術情報ナビゲータ) の情報より筆者作成。

(表 2) 居場所事例の概要

主たる支援目的	主たる対象	主たる場所
つながり（孤立防止、地域活性化、コミュニケーション）	子ども、中高校生、外国人児童生徒、高齢者	学校、公共施設、地域フリースペース、高齢者施設、カフェ
適応（自殺予防、ネット依存、不登校、ストレス）	発達障害、不登校、引きこもり、外国人児童生徒	学校、公共施設、病院
生活（食事、放課後、貧困、保育、介護、被災）	母子家庭、子ども、生活困窮者、外国人、被災者	公共施設、地域フリースペース、食堂
学習（生涯学習、スポーツ、学習、読書、就学、発達障害）	子ども、中高校生、外国人児童生徒、高齢者	学校、公共施設、地域フリースペース、高齢者施設、公園
自立（社会参加、就労）	不登校、引きこもり、生活困窮者、養護施設入所者	学校、公共施設、養護施設
健康（治療、予防、健康増進、防災）	高齢者、要介護者、疾病を抱える人	病院、高齢者施設、公共施設

（出所）2021 年 9 月時点の Cinii（NII 学術情報ナビゲータ）の情報より筆者作成。

(表 3) 2020 年度助成対象活動団体の前年度の若者対象活動

助成対象団体名（所在地）	施設名	若者対象活動
有限会社アゴラ企画（東京都）	こまばアゴラ劇場 アトリエ春風舎	高校演劇ワークショップ 高校演劇サミット
公益財団法人富山県文化振興財団（富山県）	富山県利賀芸術公園	高校生夏期演劇講習会
公益財団法人豊橋文化振興財団（愛知県）	穂の国とよはし芸術劇場	高校生と創る演劇「滅びの子らに星の祈りを」
公益財団法人兵庫県芸術文化協会 兵庫県立尼崎青少年創造劇場（兵庫県）	兵庫県立尼崎青少年創造劇場	ピッコロ演劇学校
特定非営利活動法人鳥の劇場（鳥取県）	鳥の劇場	高校演劇もっと盛り上げる事業 つくる高校生
公益財団法人北九州市芸術文化振興財団（福岡県）	北九州芸術劇場	高校生 [的] シアター

（出所）独立行政法人日本芸術文化振興会（2020）「令和 2 年度文化庁芸術振興費補助金による助成対象活動について」（https://www.ntj.jac.go.jp/assets/files/kikin/joho/R2/20200331_hojyokin.pdf、2021 年 11 月 21 日）、「平成 30 年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業（劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業）自己点検報告書」（https://gekijo-ongakudo.ntj.jac.go.jp/hyouka/2019hyouka_list1.html、2021 年 11 月 21 日）、

「平成 30 年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業（地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業）成果報告書」（https://gekijo-ngakudo.ntj.jac.go.jp/hyouka/2019hyouka_list2.html、2021 年 11 月 21 日）をもとに筆者作成。

(表 4) インタビュー記録

	年月日	時間	場所	対象
穂の国とよはし芸術劇場プラット	2020/10/1	14:00～16:00	PLAT、創造活動室D	プロデューサー
	2020/11/10	19:30～21:00	PLAT、創造活動室D	参加高校生9名
	2020/11/27	21:00～22:30	オンライン	演出家
	2020/12/4	15:30～16:30	PLAT、交流スペース	OB1名
	2020/12/5	16:00～17:00	PLAT、交流スペース	OG1名
	2020/12/16	17:30～18:30	PLAT、交流スペース	参加高校生1名
	2020/12/19	15:00～16:00	PLAT、交流スペース	参加高校生1名
	2020/12/25	13:30～15:00	PLAT、創造活動室D	参加高校生7名
	2021/1/7	14:00～14:45	オンライン	OG6名
	2021/2/16	16:00～17:00	PLAT、アトスペース楽屋	参加高校生4名
	2021/5/28	12:30～14:00	PLAT、交流スペース	担当者
	2021/10/20	13:00～14:30	PLAT、創造活動室D	担当者
	2021/11/8	13:30～14:30	オンライン	演出家
	2021/11/4	14:00～15:00	PLAT、交流スペース	制作助手
	2021/11/8	13:45～14:35	オンライン	演出家
	2021/11/14	17:00～18:30	PLAT、交流スペース	プロデューサー
	2021/11/28	11:00～12:00	PLAT、創造活動室D	プロデューサー
ゆう杉並	2020/8/21	メール		事業係長
	2020/10/13	10:00～11:30	ゆう杉並、ミーティングルーム	事業係長
	2020/11/27	10:30～11:00	電話	1階ロビー担当チーフ
	2020/11/27	11:00～11:30	電話	2021年度担当者
	2021/5/20	10:00～10:30	ゆう杉並、メインロビー	2020年度担当者
	2021/5/20	10:30～12:00	ゆう杉並、メインロビー	2021年度担当者
	2021/6/8	15:45～17:00	ゆう杉並にてオンライン	講師
	2021/6/9	17:00～17:30	ゆう杉並、ミーティングルーム	事業係長
	2021/9/16	10:30～12:00	ゆう杉並、メインロビー	2021年度担当者
	2021/11/6	9:30～10:30	オンライン	講師
	2021/11/6	10:30～11:00	オンライン	参加高校生1名
	2021/11/10	14:00～15:00	ゆう杉並、ミーティングルーム	事業係長
	2021/11/10	15:00～16:00	ゆう杉並、ミーティングルーム	2021年度担当者
	2021/11/10	17:45～18:00 20:00～20:30	ゆう杉並、メインロビー ゆうホール	参加高校生9名

(出所) 筆者作成。

(表 5) 観察、見学、アンケート記録

プラ ット	2020/11/3	18:30~20:00	PLAT、アートスペース	『Yに浮かぶ』公開通し稽古見学
	2020/11/8	13:00~15:00	PLAT、アートスペース	『Yに浮かぶ』本番観劇・アフタートーク
	2020/12/4		アンケート	参加高校生19名
	2021/1/7		アンケート	OB・OG
	2021/10/24	11:30~18:20	PLAT、創造活動室A	『ミライハ』練習 参与観察
	2021/10/31	16:00~18:00	PLAT、アートスペース	『ミライハ』公開通し稽古見学
	2021/11/7	13:00~15:00	PLAT、アートスペース	『ミライハ』本番観劇・アフタートーク
ゆう 杉 並	2021/5/19	18:00~19:30	ゆう杉並にてオンライン	参与観察
	2021/6/9	18:00~20:10	ゆう杉並にてオンライン	参与観察
	2021/7/21	18:30~19:45	ゆう杉並、ゆうホール	発表会 参与観察
	2021/8/4		アンケート	オフィシャル演劇参加者
	2021/9/10		アンケート	一般利用高校生
	2021/9/15	18:00~19:50	ゆう杉並にてオンライン	参与観察
	2021/11/10	18:00~20:00	ゆう杉並、ゆうホール	参与観察

(出所) 筆者作成。

(表 6) 目的内団体登録の内訳

	団体数
バンド	240
器楽	33
スポーツ	39
ダンス	19
演劇	4
その他	21
計	356

(出所) 杉並区子ども家庭部児童青少年課事業係(2020)『令和元年度杉並区立事業青少年センター事業報告』杉並区立児童青少年センターより転載。

(表 7) 「オフィシャル演劇」に参加する若者

		学年	性別	居住地	演劇部所属	参加時期とその動機
オフィシャル演劇	A	2	女	杉並区	○	高1の11月～、演劇部の活動に役立つから。(スタッフの声掛けあり。)
	B	2	男	杉並区	×	中1～、演劇に興味があったが活動の場がなかったので。
	C	3	女	不明	×ソフトボール	高1～
	D	2	男	杉並区	○	中2～、中学校の演劇部所属、演技の幅を広げようと、広報・ネットの情報から。
	E	3	女	杉並区	×水泳部	高2～、高1の文化祭での演劇体験で興味をもったから。
	F	1	女	世田谷区	○	高1～、先輩のいない演劇部活動を充実させるため。(学校でチラシをもらった。)
	G	2	女	町田市	○	高2～、演劇部の練習で「ゆうホール」利用の際、スタッフからの声掛けから。
	H	2	女	杉並区	×	高1～、中学演劇部の友人からの誘いで。
	I	2	女	渋谷区	×合唱部	高1～、声優希望で演技力の向上のため。(学校でチラシをもらった。)
	J	1	女	杉並区	○	高1～、部員の少ない演劇部活動を充実させるため。(学校で説明を聞いて。)
	K	1	女	杉並区	×	中2～
	L	1	女	不明	×	高1～

(出所) インタビューにもとづいて筆者作成。

(表 8) 「オフィシャル演劇」を主催する大人

	性別	役割	経歴
1	男	事業係長	事業係統括、保育専門学校卒業後、杉並区入庁、保育園、健康学園、児童館で勤務。2007年～2011年、「ゆう杉並」事業係勤務。オフィシャル演劇立ち上げ。その後、他の児童館勤務、2019年から事業係長として再び「ゆう杉並」に勤務している。
2	男	担当者	教育系大学卒業後、ゆう杉並を1年経験、杉並区職員として障がい者施設勤務を3年、その後ゆう杉並へ転勤して現在7年目、2階音楽系統係5年、1階ホール2年目、オフィシャル演劇担当の今年は2回目、1回目は2017年度。
3	女	担当者	嘱託職員、オフィシャル演劇担当2年目。
4	男	万田祐介講師	玉川大学にて表現教育を学ぶ。在学中に英語劇部に所属。東京セレゾンDXを中心に小劇場から大劇場まで数多くの舞台に出演。また脚本・演出・ファシリテーターとしても地域に根付いた活動を行い、演技ワークショップも定期的に行っている。劇団ひまわり演技講師。(横浜市民子どもミュージカルHP、講師紹介より) 8年前からオフィシャル演劇を指導している。前任講師の紹介で、教育活動をいずればやってみたいという意味もあったので引き受けたという経緯がある。

(出所) インタビューと「横浜市民子どもミュージカル HP」

(<https://piiiiibou.wixsite.com/yokohamakidsmusical/blank-1>、2021年12月21日閲覧) より筆者作成。

(表 9) 2021 年度「オフィシャル演劇」のスケジュール

月日	事項	備考
5月19日(水)	オンライン、初回活動日、活動計画	コロナ緊急事態宣言発令中は休み 1学期の流れ(ふんわり伝えて意見が言えるように、発表の中身)
26日(水)	オンライン、活動計画等	同上
6月2日(水)	オンライン、講師作台本「バトン」の練習	
9日(水)	オンライン、グループに分かれて台本読み	深堀り
16日(水)	オンライン、「バトン」・参加高校生創作台本「占い師」の練習	
23日(水)	今年度初の体面練習、「バトン」・「占い師」	小グループ活動も取り入れた。(体面練習開始時の緊張感があったが、うちとけた)
7月7日(水)	体面 舞台練習	
14日(水)	体面、舞台練習・照明入れての練習	
21日(水)	体面、18:30～発表会(12名)	
28日(水)	体面、ふりかえり、発表会記録映像鑑賞	
8月4日(水)	体面、後半の計画	
18日(水)	体面、何をやりたいかのミーティング	
9月1日(水)	体面、講師作台本「はじまるよ」について	
15日(水)	オンライン、台本読み	みんなの希望をまとめて提示、
22日(水)	オンライン、台本読み	
29日(水)	オンライン、台本読み	
10月6日(水)	体面、(3名)「はじまるよ」練習	
20日(水)	体面、「はじまるよ」練習	
27日(水)	体面、「はじまるよ」練習	
11月10日(水)	体面、参加高校生創作台本の初回練習	
11月17日(水)～12月15日(水) 18:00～20:00	体面で実施予定	
12月22日(水)	体面、「はじまるよ」発表会予定	
1月5日(水)～	体面で実施予定	
2月19日(土)	体面、発表会予定	
3月2日(水)～30日(水)	体面で実施予定。	(年間 講師指導32回予定)

(注 1) オンラインは、杉並区が使っている Webex ミーティングアプリ使用。対面は、ゆう杉並の「ゆうホール」で実施されている。

(注 2) 11月17日(水)以降は、予定である。太字の月日は筆者が観察したことを示す。

(出所) 「ゆう杉並」資料、インタビューをもとに筆者作成。

(表 10) オンライン活動例

6月9日(水) 18:00～ 「オフィシャル演劇」オンライン記録

時間	若者 A・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L	大人 万田講師・2担当者・3担当者
18:02	(A・B・D・E・F・H・I・J・K・L, オンライン入室)	2担当者: あとは、CちゃんとGちゃん
	I: Gちゃんが遅れるそうです。	2担当者: Gちゃんは遅れてくるって
	D: いえいえ	2担当者: ほんと すみません。本当に申し訳ございませんでした。僕まだ不慣れで あつ 先生
	D: いえいえ	万田講師: お願いします
		3担当者: 万田先生、ミュートになっている
		万田講師: みんなそろったかな みんな、テキスト、手元に行ってる? 行ってる人、手を挙げてもらっていいかな? IとH、充電をしながら3台あるので個別グループに分かれて練習する。そろっていないので先に談み合わせをする。Bは、何時にきますかね?
		3担当者: 特に遅れるという連絡はないのでもうじき来るかと思います。
		万田講師: ちょっと連絡とってもらってよいですか?
		3担当者: (連絡へ)
		万田講師: 確認してもらおうか、今やること、「バトン」か「古い師」半分半に分かれます。7月21日なので出欠状況によって組み合わせを決める。 出欠確認 (穴埋め) どちらか希望、何もない人は
18:08	(Bオンライン入室)	3担当者: Hちゃん、6月7月の予定
	H: 6月のテストがえっと30日だけ テスト前なんで難しいかなというはあるんですけど、あとは大丈夫。オンラインっていつまでですか? 16日に部活があるかも、遅れてだと7時くらい。	3担当者: 宣言中は遅れて参加できそう? 遅れてだと何時くらい? Iちゃん、7月は? Eちゃん、7月は? ミュートになっております。はい、OKです。 Bくんは、7月まで?
	E: 7月1日から部活、6月30、23休みたい、7月はたぶん行けます。(Dの接続が突如切れる)	万田講師: Dがどっかいった。Hちゃんは初めてだから自己紹介してもらっていいかな。名前と学年と部活、趣味とか。
	B: まだわからない	
18:11	H: 高2のHです。部活は演劇部に入ってます。以上です。	万田講師: OK 軽く自己紹介 講師の万田 みんなも軽く 名前と学年 じぶんたち いいよ (万田講師が一人ずつ指名)
	B: 高2Bです。	
	A: 高2A	
	K: 高1K	
	E: 高3E	
	I: 高2I	
	J: 高1J	
	F: 高1F	
	L: 高1L	ま: 2担当者さんたちも
		2担当者: 職員2担当者です。今日は本当にすみませんでした。
		3担当者: 同じく3担当者です。
		万田講師: オンライン上でやっていて、6月の... (プリンターの音) ごめんなさいね。プリンターの調子が悪くて印刷できなかったの...今、よくなって
		3担当者: 6月30日はお休み
		万田講師: 7月は2回、7日、14日
	(万田先生プリンター誤作動し、みんなにここに、にやにや、Bは特にここにしている)	2担当者: 宣言が延長しなければ6月23日も
	(挙手したりして反応、控えめ)	万田講師: メンバーというか...また、プリンターが始まっちゃった...なので、時間がないんです。グループ分けたい。「古い師」A、H、E 「バトン」他の人たちは。DくんとBに関しては、バトンの方かな、そっちで活躍した方がいいかな。 バトンの方やるって人、手を挙げて。Iと、OK、ちょっと待ってね。あと、GとC、この二人は参加できるのかな?
	(全員退室)	3担当者: 7月の予定はわからないので参加できるかな。
	(全員再入室、Dも再入室)	万田講師: Cは...、今からちょっとブレイクして、あつまた俺をホストにして、あつ、そっちでやった方がいいかな。バトンAはB、I、K バトンBはD、F、G CはB、C、L 古い師はA、H、E
18:30	(Cオンライン入室、しかし音声接続なし)	万田講師: タイミングが最高だね～
	(古い師: パー もなか、ジェスチャー)	万田講師: C声が聞こえない。もっかい入り直して イヤホーンのジャック もっかい入り直してもらおうか バトン、チョッキ、古い師、パー で見せて。C ごめんね。もっかい入り直していい? とりあえず、B、I、K、L、Gが来たら、Gもちょっと毎回接続で苦労してるけど OK みんなもどってき
	(もなかout ミュート解除できず)	た? A、何食べてきた? たこ?
	A: チョコ	2担当者: チョコ
		万田講師: Cが来たら、後でふってあげて、それから、連絡した方がいいかもしれない、Cに。
		(藤田: すごく連絡する。万田先生、Cちゃんのマイクトラブルに対応、すごく親身)
		万田講師: そしたら、全員集合したかな? Bくんはビデオオンにもらっていい? なぜかDが分身 Cは? Bは? いないの? 質問事項バトンの方から
		3担当者: 電話します。Cちゃん、電話してどうなるってもんでもないんだけど
	(以下、グループ練習 万田先生がぐるぐる各セッションを回る。万田先生の居ないところへスタッフが入ったり、スタッフは連絡調整)	万田講師: せっかく1時間あるから、この時間に覚えちゃおう、セリフ。相手の気持ち、動作を確認して、台詞覚える作業に後半入ります

(次ページに続く)

(前ページからの続き)

19:00	A・バトン・C 合	(バトンA・C合同グループ)	万田講師：この時間内で台詞を覚える	A・バトン・C 合同
		K：もうちょっと声を大きくしてもらえますか？	(3担当者、ここに入る)	
	バトン B	(バトンBグループ) 19:45	万田講師：「バトン」一回見せてもらってよい？	バトン B
		D：台本無しですか？	万田講師：無しでいけるなら	
		D：みんなはどうか？		
		(19:50 一回読み合う)	万田講師：丁寧に、どう？もっとと解放していい、心が動いてる、ちゃんと3人で会話をしてください。	
		(再度、読む)	万田講師：訂正されてる、「となみ～(台本「バトン」の役名)」すごくいいんです。ちゃんと相手のことを聞いていて	
			2担当者：めっちゃほめられた、二人の感情が伝わってきた。	
	占い 師	占い師 (配役決定・本読み、生き生きと練習)	万田講師：(19:30ミーティング) 会話しっかり、リアリティをもって、だからこの占いに入るところ、そこからは占いモード だましモードだから、モード変わって手相をみせる、見る芝居をやってくれる？「正直おすすめしない」リアルに言う。「そんなの辛すぎる」はどんなイメージ？、聞かイメージ、ちゃんとやると (お手本を見せる) ちゃんと芝居をして、芝居のリアリティがあるからこそいろいろ小出しにして、攻撃して...大きい爆弾発言もある。リアリティをもって言う。(19:40まで)	占い 師
		(めっちゃやだ、終わっちゃう。覚えきれなくてもとりあえず来ます。)		
			(万田講師は、接続できないCが可哀そうだと、気を使っている)	
20:10	L	これでオフィシャル演劇の活動を終わります。	万田講師：お疲れ様です、時間が過ぎちゃってすみません。台詞を覚えてきてください。「占い師」設定の謎、解明できた？来週これない人？(いない) 演技、ほめるとよくない どんどん変わる 相手が変わるので変わる L、挨拶してみようか	
			(若者退室後、担当者に) 万田講師：7月に入って、人が増えたら大変 6月いっぱいにはしましょうか。	

(出所) 参与観察記録をもとに、筆者作成。

(表 11) 「オフィシャル演劇」、「Y に浮かぶ」参加者に実施した質問用紙例

「ゆう杉並」利用の皆様へ		静岡文化芸術大学 藤田 仁美 2021/8																
<p>●これは、「ゆう杉並」利用の皆様に参加について研究するための調査です。</p> <p>●みなさんの「ゆう杉並」に来るようになる前と、今（利用するようになって）感じられていることを明らかにすることが目的です。</p> <p>●アンケートは全部で1ページで、設問は計11問あります。御協力、よろしくお願いいたします。</p> <p>●【2】～【10】の回答は、番号を口の中に御記入ください。（「その他」を選んだ方は自由に口の中に記入してください。）</p> <p>●【11】については、自由にご記入ください。</p>																		
<p>【1】あなた自身についてについてお尋ねします。該当するものを○で囲んでください。性別については、該当項目がない場合（ ）に御記入ください。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin: 10px 0;"> <tr> <td style="width: 20%;">年齢</td> <td style="width: 15%;">1 5</td> <td style="width: 15%;">1 6</td> <td style="width: 15%;">1 7</td> <td style="width: 15%;">1 8</td> </tr> <tr> <td>性別</td> <td>女</td> <td>男</td> <td colspan="2">()</td> </tr> <tr> <td>社会的立場</td> <td>高校生</td> <td>会社員</td> <td>自営</td> <td>アルバイト その他</td> </tr> </table>				年齢	1 5	1 6	1 7	1 8	性別	女	男	()		社会的立場	高校生	会社員	自営	アルバイト その他
年齢	1 5	1 6	1 7	1 8														
性別	女	男	()															
社会的立場	高校生	会社員	自営	アルバイト その他														
<p>【2】あなたは、平日（休日以外）、自宅の他に、主にどこで過ごしていますか。（利用前、現在の各欄にお答えください。）</p> <p>1、学校 2、職場 3、その他</p>	→	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">利用前</td> <td style="width: 50%;">現在</td> </tr> <tr> <td style="height: 30px;"></td> <td></td> </tr> </table>	利用前	現在														
利用前	現在																	
<p>【3】あなたは、平日【2】の場所で1日平均何時間くらい過ごしていますか。</p> <p>1、1～5時間 2、6～10時間 3、11～15時間 4、16時間以上</p>	→	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">利用前</td> <td style="width: 50%;">現在</td> </tr> <tr> <td style="height: 30px;"></td> <td></td> </tr> </table>	利用前	現在														
利用前	現在																	
<p>【4】あなたは、【2】の場所で何をして過ごしていますか。あてはまるものを全て選んでください。また、「2」を選んだ場合はその部活動名も書いてください。（複数回答可）</p> <p>1、授業等の勉強 2、仕事 3、()部の活動 4、SNS 5、ゲーム 6、動画観賞 7、友人等との会話 8、読書（漫画を含む） 9、その他</p>	→	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">利用前</td> <td style="width: 50%;">現在</td> </tr> <tr> <td style="height: 30px;"></td> <td></td> </tr> </table>	利用前	現在														
利用前	現在																	
<p>【5】あなたにとって、【2】の場所ではどのような場所ですか。あてはまるものを全て選んでください。（複数回答可）</p> <p>1、充実している 2、楽しい 3、あたたかい 4、安心する 5、疲れる 6、忙しい 7、窮屈だ 8、退屈だ 9、苦しい 10、その他</p>	→	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">利用前</td> <td style="width: 50%;">現在</td> </tr> <tr> <td style="height: 30px;"></td> <td></td> </tr> </table>	利用前	現在														
利用前	現在																	
<p>【6】あなたは、休日、主にどこで過ごすことが多いですか。</p> <p>1、自宅 2、学校 3、職場 4、友人・知人家 5、親戚の家 6、2～5以外の外出先 7、その他</p>	→	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">利用前</td> <td style="width: 50%;">現在</td> </tr> <tr> <td style="height: 30px;"></td> <td></td> </tr> </table>	利用前	現在														
利用前	現在																	
<p>【7】あなたは、休日【6】の場所で1日平均何時間くらい過ごしていますか。</p> <p>1、1～5時間 2、6～10時間 3、11～15時間 4、16時間以上</p>	→	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">利用前</td> <td style="width: 50%;">現在</td> </tr> <tr> <td style="height: 30px;"></td> <td></td> </tr> </table>	利用前	現在														
利用前	現在																	
<p>【8】あなたは、【6】の場所で過ごしているときに感じるの、どのような印象ですか。あてはまるものを全て選んでください。（複数回答可）</p> <p>1、充実している 2、楽しい 3、あたたかい 4、安心する 5、疲れる 6、忙しい 7、窮屈だ 8、退屈だ 9、苦しい 10、その他</p>	→	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">利用前</td> <td style="width: 50%;">現在</td> </tr> <tr> <td style="height: 30px;"></td> <td></td> </tr> </table>	利用前	現在														
利用前	現在																	
<p>【9】あなたが自分のらしくいられる場所だと感じる場所はどこですか。一番そう感じる場所を一つ選んで答えて下さい。「6」を選んだ場合は、その部活動名も書いてください。</p> <p>1、自分の部屋 2、自宅 3、学校 4、自分の教室 5、職場 6、()部の活動 7、その他 8、そういう場所はない</p>	→	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">利用前</td> <td style="width: 50%;">現在</td> </tr> <tr> <td style="height: 30px;"></td> <td></td> </tr> </table>	利用前	現在														
利用前	現在																	
<p>【10】【9】で答えた理由はどのようなものですか。（複数回答可）</p> <p>1、だれにも干渉されないから 2、仲間と一緒にいるから 3、一人になれるから 4、自分の話を聞いてもらえるから 5、居心地がよいから 6、安心するから 7、楽しいから 8、充実しているから 9、落ち着くから</p>		<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">利用前</td> <td style="width: 50%;">現在</td> </tr> <tr> <td style="height: 30px;"></td> <td></td> </tr> </table>	利用前	現在														
利用前	現在																	
<p>【11】「ゆう杉並」に来るようになる前と、現在の御自分の「生活習慣」、「友達や家族との関わり方」、「勉強や仕事へのモチベーション」、「新しいことへの取り組み」などについて変化があったかどうか教えてください。その変化はどのようなものか、なぜ変化したと思うかその理由についても書いていただけるとありがたいです。</p> <div style="border: 1px solid black; height: 50px; width: 100%; margin-top: 10px;"></div> <p style="font-size: small; margin-top: 10px;">以上で終わります。御協力ありがとうございました。</p>																		
連絡先：静岡文化芸術大学文化政策研究科 藤田 仁美																		

(注) 上は「オフィシャル演劇」参加者に実施したものである。「Y に浮かぶ」参加者アンケートは「企画名」のみ変更してある。

(出所) 筆者作成。

(表 12) アンケート結果「オフィシャル演劇」参加高校生

1	15歳	16歳	17歳	18歳							
	3	3	0	1							
	男	女	不明	自認男（女）							
	0	7	0	0							
	高校生										
2 平日	前	学校	その他								
		6	1								
	後	学校	その他								
		6	1								
3 平日時間		1～5	6～10	11～15	16以上						
	前	1	5	0	0						
	後	0	7	0	0						
4 すること		勉強	仕事	部	SNS	ゲーム	動画観賞	会話	読書	その他	
	前	6	0	4 (演劇・ハンドボール)	1	1	0	5	1	0	
	後	6	0	5 (演劇・ハンドボール・水泳)	1	1	0	6	1	0	
5 どのような場所		充実	楽しい	あたたかい	安心	疲れる	忙しい	窮屈	退屈	苦しい	その他
	前	4	3	0	1	3	2	0	0	0	0
	後	4	3	0	1	3	2	0	0	0	0
6 休日		自宅	学校	職場	友人・知人	親戚	外出先	その他			
	前	7	0	0	0	0	1	0			
	後	7	0	0	0	0	1	0			
7 何時間		1～5	6～10	11～15	16以上						
	前	0	1	0	6						
	後	0	1	0	6						
8 印象		充実	楽しい	あたたかい	安心	疲れる	忙しい	窮屈	退屈	苦しい	その他
	前	2	2	2	5	0	0	0	0	0	1
	後	2	2	2	5	0	0	0	0	0	1
9 自分らしく		自室	自宅	学校	自分の教室	職場	部	ゆう杉並	その他		
	前	1	4	1	1	0	0	0	1		
	後	1	4	1	1	0	0	0	1		
10 理由		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
	前	1	0	2	0	2	1	0	0	5	
	後	1	0	2	0	2	2	0	0	5	

10 選択肢	1、だれにも干渉されないから	2、仲間と一緒にいるから	3、一人になれるから
	4、自分の話を聞いてもらえるから	5、居心地がよいから	6、安心するから
	7、楽しいから	8、充実しているから	9、落ち着くから

11 自由記述	積極的に人と関わり合おうとする意識になった。
	演劇を学校以外で活動出来て、学校という縛りから解放された気がします。世界が広がりました。
	高校1年の時に「オフィシャル演劇」に入り、色々な人たちと関わり演技することが、さらに楽しくなりました。
	ゆう杉に来てから、交友関係が増えた。
	家で勉強に集中できないとき、ゆう杉という勉強できる場所を見つけた。
	変化なし
	私は演劇活動をするためにゆう杉と関わるようになったので、自分がやりたいことを見つけて活動できるようになり日常の楽しみが増えました。

(注) 2021 年 8 月に配布し、同年 9 月末に回収した。

(出所) 筆者作成。

(表 13) 「高校生と創る演劇」上演記録

		作者	演出	制作	高校生 キャスト	高校生 スタッフ	備考
2014年11月1日～3日	「転校生」	平田オリザ	広田淳一	矢作勝義、高田装子、永田直子	21	8	平成26年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業
2015年11月7日・8日	「赤鬼」	野田秀樹	黒澤世莉	矢作勝義、高田装子、永田直子	16	7	平成27年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業
2016年11月5日・6日	「女子にしか言えない」	山田佳奈	山田佳奈	矢作勝義、永田直子、大橋玲	18	12	平成28年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業
2017年11月3日～5日	「ガンボ！」	青木豪	稲葉賢恵	矢作勝義、永田直子、石田晶子	15	7	平成29年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業
2018年11月3日・4日	「誠びのうちに星の祈りを」	須貝英	須貝英	矢作勝義、石田晶子、大橋玲	12	8	文化庁劇場・音楽堂等機能強化推進事業
2019年11月2日～4日	「転校生」	平田オリザ	山本タカ	矢作勝義、石田晶子、長坂奈保美	21	10	
2020年11月7日・8日	「Yに浮かぶ」	藤原佳奈	藤原佳奈	矢作勝義、長坂奈保美、石田晶子	12	7	文化庁劇場・音楽堂等機能強化推進事業
2021年11月6日・7日	「ミライハ」	松原俊太郎	小野彩加・中澤陽	矢作勝義、長坂奈保美、伴朱音	10	6	

(出所) 穂の国とよはし芸術劇場(2021)『高校生と創る演劇 報告書』(2013年～2020年)、2021年リーフレットをもとに筆者作成。

(表 14) 「高校生と創る演劇」制作担当者の業務分担

	A (制作：財団職員)	B (制作：財団職員)	C (制作助手：契約スタッフ)
広報	○	○	
ロゴ・Tシャツ作成	○	○	
各種デザイン (ポスター・チラシ・当日配布パンフレット等)		○	
技術スタッフ 連絡調整	○		
稽古場対応			○
各部署連絡調整	○	○	

(注) ○印は主となる担当者を示す。

(出所) インタビューをもとに筆者作成。

(表 15) 高校生と創る演劇「Yに浮かぶ」参加者

人物	学年	性別	居住地	演劇部所属	参加動機	備考
①	3	男	大府市	○	コロナ禍で演劇大会を失ったから。	キャスト1・日大（芸術学部：演劇系進路）
②	1	女	豊橋市	×弓道部	不明	キャスト2
③	③	不明	豊橋市	×	幼少時から「演劇やりたい」と言っていたらしい。小学生の時にプラットのチラシを見て観劇した「熱海殺人事件」に衝撃を受けた。母親が豊橋市広報の企画募集を教えてくれて初回参加。高1時から参加。楽しかったから継続参加している。	キャスト3・通信制高校通学、3年間参加、名古屋芸大舞台美術領域進学予定。
④	3	女	豊橋市	○	友人と同じ舞台にキャストとして立ちたかったから。照明スタッフとして人生最後の演劇体験を終えたかったから。	スタッフ1（オーディションによりスタッフに変更）
⑤	②	女	豊川市	△	中2で「ガンボ」を見て、高1で「転校生」に参加、今回参加しない理由がないと思ったから。	キャスト4・2020年度の参加後、進路変更で通信制へ。2年連続参加。
⑥	3	女	蒲郡市	×	不明	スタッフ2
7	2	女	豊橋市	○	不明	キャスト5
8	3	女	豊橋市	×柔道	不明	キャスト6
⑨	3	女	高浜市	○	去年の「転校生」を見て、顧問から募集の情報を得ての参加。	スタッフ3
10	3	女	西尾市	○	不明	スタッフ4
11	3	女	岡崎市	○	不明	キャスト7
⑫	3	女	高浜市	○	将来の夢が照明スタッフなので、本物の舞台を体験したかったから。	スタッフ5
⑬	③	自男	湖西市	○	去年、母がたまたまPLATから「転校生」スタッフ追加募集のチラシを家に持ち帰ってくれ、プロの音響の仕事を観たいと思って参加、今年は、去年やって楽しかったから。大勢と何か一つの作品を作りたいと思ったから。そこでしか会えない人と出会いたかったから。	スタッフ6・2年間参加
⑭	1	女	豊橋市	×	舞台が好きで関わりたかったから。	キャスト8・通信制
⑮	2	男	稲沢市	△	偶然、ツイート（応募）を見て（昨年も迷ったけど）、高校演劇に飽きたから。	キャスト9・進路変更で通信制へ、名古屋の劇団所属
16	1	女	豊橋市	○	姉の参加を見ていたから。	スタッフ7
⑰	③	女	田原市	×文芸部	高1時、母に勧められて。2年時、またキャストがやりたかったから。3年時、前年終了後、大きな喪失感があったから。また参加したかった。	キャスト10・3年間参加
18	③	女	豊川市	○	不明	キャスト11・2年間参加
19	3	女	豊橋市	○	不明	キャスト12

(注) 「人物」欄の丸数字は、インタビュー対象者を示す。「学年」欄の丸数字は複数参加者の学年を示す。

(出所) インタビュー、アンケートをもとに筆者作成。

(表 16) 高校生と創る演劇参加経験者

人物	年齢	性別	居住地	参加年度と役割	参加動機	備考
㉔	20	男	愛知県	2017/2018キャスト	2016年「女子にしか言えない」を見て好奇心が刺激されたから。高校演劇との違いに圧倒されたから。	高校演劇部出身、PLATで豊橋市民劇参加、PLATでアルバイト中。大学生。
㉕	19	女	愛知県	2019スタッフ	高校演劇部の活動で演劇への興味が大きくなり、参加経験のある部活の先輩から「やってみる価値あり」と聞いたから。	高校演劇部出身、社会人1年目、税理士事務所で経理事務。また演劇に関わる機会があるとよいと思っている。
㉖	20	女	愛知県	2017スタッフ	(不明)	大学生。
㉗	20	女	東京都	2017キャスト	先輩がキャストで出演した劇を見にいき、自分も変わりたい、やりたいと思ったから。	高校演劇部出身、演劇のプロを目指している。
㉘	21	女	神奈川県	2016/2017キャスト	2015年「赤鬼」を見て自分もやりたいと思ったから。	映像専門学校生。
㉙	20	女	県外	2017キャスト	(不明)	
㉚	19	女	愛知県	2017スタッフ/2018キャスト	参加した姉が楽しそうだったから。	大学生。大学の演劇サークル所属。
㉛	19	女	県外	2017/2018スタッフ	先輩が誘ってくれたから。	演劇部入部経験。

(出所) インタビュー、アンケートをもとに筆者作成。

(表 17) 高校生と創る演劇「ミライハ」参加者

人物	学年	性別	居住地	演劇部所属
28	3	女	日進市	チアリーディング部
29	3	女	豊橋市	○
30	②	女	豊橋市	
31	3	女	豊田市	○
32	③	男	稲沢市	
33	3	女	豊橋市	○
34	3	女	豊橋市	○
35	3	女	豊橋市	○
36	1	女	豊橋市	弓道部
37	3	女	豊橋市	○
38	2	男	名古屋市	○
39	2	女	豊橋市	○
40	1	男	豊橋市	○
41	1	女	豊橋市	○
42	2	女	豊橋市	○
43	2	女	豊明市	○

(注) 「学年」欄の丸数字はリピーターであることを示す。2021年度「ミライハ」参加の16名には、インタビュー、アンケート調査を実施していないので、参加動機の記載はない。

(出所) 担当者からの聞き取りをもとに筆者作成。

(表 18) 「高校生と創る演劇」を主催する大人

	年齢	性別	居住地	役割	経歴
1	56	男	豊橋市	企画創設者 芸術文化 プロデューサー (公財) 豊橋文化 振興財団職員	東京都世田谷区出身。東京都立大学在学中から演劇活動開始。卒業後、学生時代の仲間との劇団活動を経て、1998年4月より世田谷パブリックシアター（公益財団法人せたがや文化財団）にて劇場勤務を始める。広報、施設管理、主催事業企画制作、舞台技術部庶務、学芸・教育普及事業などの業務を担当。2012年3月同財団退職。4月より『穂の国とよはし芸術劇場PLAT』開設準備のため公益財団法人豊橋文化振興財団事業制作チーフに就任。東三河地域の芸術文化の創造交流活動の拠点として2013年4月30日開館。2014年度（平成26年度）より劇場・音楽堂等活性化事業活動別支援事業に採択される。2015年4月より同館、芸術文化プロデューサー就任。愛知大学文学部現代文化コースメディア芸術専攻にて非常勤講師を務める。2019年2月より劇場、音楽堂等連絡協議会会長を務める。（公益社団法人全国公立文化施設協会 「全国劇場・音楽堂等総合情報サイト」 専門人材情報より）
2	31	女	豊橋市	企画担当者 (公財) 豊橋文化 振興財団職員	愛知県豊橋市出身。地元高校卒業後、名古屋の音楽系専門学校へ進学。卒業後、豊橋で音楽活動。2018年4月より豊橋文化振興財団職員となる。2019年「転校生」より「高校生と創る演劇」担当となった。
3		女	松本市	専門家	兵庫県姫路市出身。京都大学文学部卒業。2012年、演劇制作ユニットmizhen旗揚げ。以後全作品の脚本や構成、演出を担当。『夜明けに、月の手触りを』が、第21回劇作家協会新人戯曲賞最終候補にノミネート。演劇×動画の祭典 第5回クォータースターコンテストでグランプリ含む4賞受賞。『Sの唄』で、平成28年度希望の大地の戯曲 北海道戯曲賞優秀賞受賞。「日経COMEMO」でKOLとして連載中。2019年2月、取り壊しアパート一棟使い、能楽師・安田登氏をはじめとする異ジャンルゲスト9組と共に『裏参道フェスーおわりと、』を開催。（Schoo 講師情報より）

(出所) インタビュー、公益社団法人全国公立文化施設協会「全国劇場・音楽堂等総合情報サイト」(<https://www.zenkoubun.jp/about/index.html>、2021年12月21日閲覧)、株式会社 Schoo HP「講師情報」(<https://schoo.jp/teacher/2620>、2021年12月21日閲覧)より筆者作成。

(表 19) 2020 年度「Y に浮かぶ」企画のスケジュール

月日	事項	備考
2月9日(日)	募集告知開始	例年、東三河高校演劇合同発表会(会場: PLAT)中に告知開始
4月19日(日)	オーディション申込締切	キャスト希望23名、スタッフ希望3名 計26名の応募
8月11日(火)～15日(土)	オーディション・ワークショップ キャスト確定 (キャスト12名、スタッフ7名)	オーディション: ディベートやエチュードなど、ワークショップ: 歌、身体表現、シアターゲーム 例年は、5月～6月実施
9月4日(金)	自主練習開始(～稽古開始前まで)	高校生のみで取り組む。最終日に配役発表。
13日(日)	ボイストレーニング	
14日(月)	スタッフオンライン打ち合わせ	
21日(月・祝)	チラシポスター完成	
26日(土)	チケット発売開始	
10月3日(木)	舞台美術ワークショップ、スタッフ打ち合わせ	舞台美術の杉山至氏によるワークショップ
8日(木)	衣装ワークショップ	衣装の田島由深氏によるスタッフ向けワークショップ
25日(日)	衣装パレード(午前中)、「仮の本番」設定日	
26日(月)	舞台美術仕込み開始	テクニカルスタッフもこのころ会場入り
11月8日(火・祝)	公開通し稽古	
4日(水)・5日(木)	場当たり	
6日(金)	ゲネプロ	
9月28日(月)～11月6日(金)	稽古	
11月7日(土)・8日(日)	本番	7日13時入場者134名、18時108名、8日13時143名、17時88名 合計473名
2021年2月16日(火)	本番映像上映会	藤原佳奈氏を始めとする専門家も一緒に観賞

(出所) 穂の国とよはし芸術劇場(2020)『高校生と創る演劇 報告書』とインタビューをもとに筆者作成。

(表 20) 10 月 24 日 (日) 11:00 開場「ミライハ」於、創造活動室 A、観察記録例

時間	キャスト ②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩・⑪ スタッフ ⑫・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰	演出担当舞台作家2名(小野・中澤)、演出補、担当者、制作助手、音響、照明(6〜7名、出入りあり)
11:10	スタッフ⑮1名入室。	担当者と演出補は部屋にいた。
11:47		
12:03	キャスト5名集合、フロア中央に軽く円になり、リラックス、思い思いの姿勢	演出2名(小野・中澤)、演出補、集合。
	スタッフ4名増えて5名となる。	制作助手が忙しそうに若者の世話をやく
12:06	キャスト1名遅刻で、6名となる。	演出3名、和やか、声を張らずに語り掛ける感じ
	⑨発声リード、みんなで発声「めちやくちや笑うじゃん！」(スタッフに向かつて)	演出3名も一緒に発声 中澤：(ふざけているかのような動き) 小野：「ベロみっつにできる人〜？」演出補「遺伝子系・・・」 (中澤：ふらふらしている)
12:14	(みんな笑う、ベロ三つに反応)	演出補「レフト・ライト」(動いてみせる)
12:15	女子リードで発声	小野「ヨガの太陽礼拝A・B、パワーヨガをいくつかリードする」中澤：マイペース
12:20	(みんな反応) レフト！ ライト！	小野「終わります、ありがとうございます。」
12:24	(みんな声に合わせて左右に動く。ヨガも行う)	中澤「一人ひとりの動きを発明、振り付けでなくてもいいし、ふりつけでもいい。とっかかりとして、しつもんてやったことか思い出して、『動きを内包した場面』から動きだけ・・・高度じゃなくて、あくまで自分が提示できる動きを出してほしい。今やってる場面から言葉を取り出して動きを取り出す。この作品に自分が提供できる動きを発明してほしい。質問きそうだから、先に行っておく。動き続ける動きでも単発でもいい。創作物だから、自分が作ったものである責任を担保して作ってほしい。一つだけ。他の人にその動きを渡せるぐらい。1時間かけて」
	スタッフ：音響は作業 他は やや所在なさげ でもしっかり見ている	演出補「余裕じゃん 一人でやるんですか？」 中澤「比較したりしないので自分が動く。あやかさん(おのさん)が1分くらいで仕上げてくれるから」 中澤「いっしょに7つの動きができるというミラクル、やってみましょう。得意なところから拾ってきていい。一回⑨くん(高校生スタッフ)の身体をとおして考えてもいい。」
12:42	各自動き始める	中澤「1:30にすぐみせれるように。」
12:45	⑨が、小野さんに見せている	担当者：「⑨、5分になったら仕込み・・・みたらわかる」
12:48	女子、小野さんに見せる	小野、高校生の動きを確認して、(笑しく動いてあげている)そして、中澤に確認してもらう これを繰り返す。
12:50	⑨が背負う、みな「めっちゃいいい」	担当者：「⑨ちゃん、これ(白いクッション)をしょわせる」
12:55	各自、動きを模索	演出補：動きを小野さんにみせる
13:00	⑨が、動きを小野さんに見せる。	中澤「じゃ、⑨さん、練習して自分の動きを一番よいものにして」 小野：(いつもみんなの動きを笑しく再現)すごい 中澤・小野：小声で穏やかに相談しながら、進めていく
	⑨が、動きを見せる。	演出補：ティッシュ渡す。小野：「バンドエイド」演出補：バンドエイド取りに行く
13:05	女子、かさぶたはがれて流血	小野、⑨の動きの流れに息切れしながら動く。
13:06	⑨が、新たな動きの流れを提示	演出補：動きを提示
13:10		小野：(⑨に)「すごい」(見終わったら)「ありがとう」
13:15	⑨が、動きを見せる	中澤：⑨や⑨に話している。演出補：別の女子のそば 何かメモ
13:16	女子一人遅刻してくる。	演出補：遅刻してきた高校生と話す。
	女子一人、動きをみせに来る。(部活のアップのエロバージョン)	演出補：動きすぎてこけた。
13:25	女子、小野さんに見てもらう。	中澤：「みんなでやるからアップする人はアップ、身体をならして」
	女子、小野さんに見てもらう。 「ワクワクする〜」	
	「なんでこんなに口乾く今日?！」	中澤「乾燥してるからね〜、どんどん飲んで！」
13:30	⑨が2つパフォーマンス 一つ目から、動きの解説。(しっかり説明)	中澤「真ん中でやってもらって、他の人は見て、みんなに教えて」 中澤「みんな自分の身体に集中して！」
	(みんないっしょにやる)	(みんないっしょにやる)
13:35	⑨のパフォーマンス (みんな「あぶない」)	中澤「⑨くん」
13:39	⑨のパフォーマンス	中澤「⑨さん」
13:45	(動く)	中澤「古賀さん(演出補)」演出補パフォーマンス(かなり具体的にイメージを伝えている)
13:50	女子パフォーマンス	小野：「⑨ちゃん、右手が左足へ・・・」
13:55	女子パフォーマンス 見ている子が「トロイメージ」	中澤も一緒にやる。(中澤：音響の高校生に声かけた)
13:59	女子スタッフ、遅刻で到着	制作助手、遅刻対応
	女子パフォーマンス エロビ系、皆「すごい 楽しい」	中澤(座って)「動きが集まって、質量の大きい状態でやりたいので、自分の身体に集中して、最後、中途半端にならずに、ある種の身体的情動、熱狂、今までやったことのないぐらい 体を使う。ダンスをしたいわけじゃなくって身体的な活動を舞台上にたちあげたい、自分の作った動きを責任をもって持っていてほしい。つくる作業は1時間ぐらい動き続けるかもしれないし、シーンのにもどれぐらいになるか、わからない。今から15分くらい休憩して、そのあと動き続けて、つくります。」
14:05	(休憩)女子4名固まって話している。2名替古場の外へ	
14:18	(⑨衣装合わせ、4人の女子寝転ぶ、2人女子おしゃべり)	(小野・中澤 打合せしている。中澤主体に見えるが、小野も 静かな口調でしっかり対話している)

(次ページにつづく)

(前ページからのつづき)

14:20	時間通り (自然と集合)	中澤「動き始めたから動き終わるまで動き続けることを意識してください。最初はとりあえず彩花さんについていて、なれてきたら・・・、位置だけ広くって、基本的に説明なしで動きだけやって、繰り返す。タイミングとかもあわせなくていい。あやかさんが動きを変えたときも、1歩か2歩ぐらいあやかさんのあとに自分のタイミングでやりやすいように移行して、キューをださないで」
14:27	(動く)	中澤「どれだけ静かな動きでも、体の中ではアクティブに、見られてる身体を意識して」
	動き続ける。	中澤「動きを変更する動きも動きだから、ないがしろにしないで。自分の動き集中」
		(小野のリード)
		中澤「動きを反復する自分の動きを作ってフォーマットを削っていく。」
		中澤「動きと動きの間で身体を集中をきらないで。動きと動きの間も動き続けて、自分の集中を判断して、どれだけ動けるかを作っていく」
		中澤「あやかさん、全員を誘導したと思ったら、次の動きへ」
14:36		中澤「もう何も言わずに替えちゃっていいよ」
14:40		
14:55	スタッフ女子1名 室外へ	
15:20	休憩10分 (ぐったり)	(小野・中澤 二人で打ち合わせ)
15:30	(リフレッシュした感じ)	中澤:集まってください。ラストシーンを作ることに、今後のこと、ラストシーン雲の発声、はんなんさんが 引っ張るかもしれない。セリフ確認しながら、展開(舞台展開)と打ち合わせ。りおさん
	(口々に思ったことなど、小さめの声で質問する。)	中澤:みんな27ページから
	台本読み・セリフ合わせ (床に車座に全員で座っている。)	中澤:(演出しながら) みなと同じように車座になって座っている。
16:00		中澤:10の頭から、準備して～
16:40	劇後半の通し稽古	
17:40	終了	中澤:(通し終わって) みんなとりあえずなんかやって
		自分たちがやるべきことをどうやってやるか、集中して、考える(研究する)自分たちがどうやりたいか、僕らが決定したことの上に、間違えを一人のものにしない。正解は間違いは関係なく、自分たちで決定すること。自分たちで、(さっきのように)やってくればいい。本番に向けて自分たちが決定考えられることを徹底してやってくさい。集中・思考の仕方・・・、自分の中から出る集中が良い表現になる。周りがどうあれ、自分たちがかんがえたことがよい方向へ行く。舞台上では、僕らと一緒に舞台をつくること。アニメの話とかしたいときは楽屋で、ぼくらは受け容れるけど、舞台を支えてくれる大人の人たち、集中しようっていう関係性は作ってきたはず。クリエーションワーク、上演時間に何があっても対応できる、舞台上で危ないことをしていたら、お互いに注意できる関係性は作れている。ぼくらは環境をつくる、それに対して自分たちがやっていることを順応(変化)させる。それを徹底するのがみんなの来週やること。まず、自分がやることを極めれば、1+1+・・・=10という不思議なことが起きる。人生の時間を削っているなって感じ。
		小野:あんまり変なことは言いたくない。最終日みたい・・・。
		中澤:戯曲のレベルを深める。自分たちがやっていると、セリフの意味を繋げる。実感的つながりを作る。戯曲から生まれた上演の意味を考えてほしい。観念的なもの、イメージを身体に落とし込む。自分の身体面白さ、行っている言葉面白さとか、
		演出補:お風呂入ってタンパク質とって 中澤:ぼくらがいるかとか関係なくやってくれるってわかった。 担当者:あすお休みで・・・明後日から小屋入り。・・・準備運動を念入りに、楽屋変更、私物片付け、明後日から足袋

(出所) 筆者作成。

(表 21) アンケート結果「Yに浮かぶ」参加高校生

1	15歳	16歳	17歳	18歳
	3	0	8	8
	男	女	不明	自認男(女)
	2	15	1	1
	高校生			
2 平日	19			
	前	学校	その他	
		18	1(家)	
	後	学校	その他	
3 平日時間		16	3	
		1~5	6~10	11~15
	前	2	16	1
	後	2	15	0
4 すること		2	0	2
		勉強	仕事	部
	前	19	1	5 (演劇)
	後	18	0	2 (巧道・演劇)
5 どのような場所		充実	楽しい	あたたかい
	前	1	8	1
	後	4	5	1
		自宅	学校	職場
6 休日		友人・知人	親戚	外出先
	前	17	1	0
	後	14	0	0
		1~5	6~10	11~15
7 何時間		0	3	5
	前	0	3	5
	後	1	4	4
		16以上		
8 印象		充実	楽しい	あたたかい
	前	4	8	2
	後	8	8	2
		安心	疲れる	忙しい
9 自分らしく		窮屈	退屈	苦しい
	前	4	3	4
	後	3	4	3
		その他		
10 理由		その他		
	前	10	4	1
	後	8	3	1
		1	2	3
10 選択肢		6	2	9
	前	6	2	9
	後	7	3	6
		7	3	6

11 自由記述	1、だれにも干渉されないから	2、仲間と一緒にいるから	3、一人になれるから
	4、自分の話を聞いてもらえるから	5、居心地がよいから	6、安心するから
	7、楽しいから	8、充実しているから	9、落ち着くから
	仕事として演劇すること、部活としてすること、お金が発生(チケット料金等)すると、責任感が格段に違った。「Yに浮かぶ」に参加していなかったら、全く関わりのない人たちと親しくなれた。何か一つの目標に全力で頑張るグループがあったからかな?と人間関係の作られ方を考えるようになった。		
	思っていたより忙しい生活をしていたんだなと思いました。変化は特にないです。		
	自信が持てるようになりました。人前に立つことにより、自分と向き合うことが増えたため。3年間この高校生と創る演劇をやりとげることができたため		
	公演の直後からだんだん学校に行けなくなり、全日制高校を辞めることになりました。参加する前までは、何も考えずに行けていましたが、そんな自分がからっぽだと気が付いたのが原因だと思います。		
	参加後、しんどくても死にたいと思うことが少なくなりました。		
	参加前は自分の心や体の変化に流されるままに生きてきましたが、参加後は嬉しいとき、悔しいときの自分の変化に1つ1つ敏感になりました。		
	あまり変化はみられなかった。舞台を経ることによっても、変わらない日常が送れていると思います。		
	参加する前には出会ってなかった人たちと今は話すことがあって、より友達との会話が aumentando している気がします。		
	変化があった。稽古中、時間がないなか、稽古と学校のことを両立していたため、時間の使い方がうまくなった気がする。		
	人と関わるのが少し好きになった。(理由)学校で不通に生活していたら、絶対に仲良くならないような人と仲良くなったから。		
	いつでも死ぬように行動することが多くなった。(いつ死んでも後悔しないという意味)その場を楽しむを自分だけじゃなくみんなまきこもうと思きした。		
	演劇に対しての心がまえ、演劇とは奥深いものであり、頑張らねばと思った。高校退学になった。		

(注) 2020 年 11 月に配布し、同年 12 月末に回収した。

(出所) 筆者作成。

(表 22) 二事例の比較

		ゆう杉並	PLAT
施設	根拠法	児童福祉法	文化芸術基本法・劇場、音楽堂等の活性化に関する法律
	施設の種類	児童館	公立文化施設
	設置者	杉並区	豊橋市
	指定管理者	直営	豊橋文化振興財団
	目的	①中高生の居場所・成長支援 ②参画 ③心理的援助 ④行政機関等との連携推進	①地域住民のための演劇・舞踊・音楽等の芸術文化の振興 ②芸術文化を活用した市民の交流 ③創造活動の活性化
	ニーズ	若者のニーズ	若者を含む地域住民
演劇活動	目的と若者へのアプローチ	表現技術の向上と区内イベントや他施設での発表 心の解放、①～④ゆう杉並の目的と同一「支援」のアプローチ	プロのスタッフとの協働で作品創造する機会を提供 経験重視、豊橋に帰ってきて劇場と関わってほしい、①～③PLATの目的と同一、「協働」のアプローチ
	開始時期	2011年度～	2014年～
	期間	4月募集、5月～3月 毎週水曜日 18:30～20:30 (習い事的)	4月募集、5月オーディション、8月ワークショップ、9月～11月の上演まで稽古 (集中的)
	内容	講師作や若者作の短い (5分～約10分) 台本練習、シアターゲームなど (週に1回2時間で行えること)	発声、身体を動かす、シアターゲーム、上演時間1時間半の本格的芝居作り
	場所	ゆうホール・オンライン (・例年は地域老人施設等でも)	PLAT創造活動室、アトスペース
	場所の設備	照明・音響	プロによる舞台セット・衣装・音響・照明
	発表の機会	年に3回～ 観客は保護者、関係者、ゆう杉並利用者、地域住民	チケット販売、2日か3日間に4～5回、一般客も観劇 (公開リハとグネプロあり)
	参加者定員	約10人	キャスト10～21、スタッフ6～12
若者	対象	中・高校生	高校生
	性別	女子多い	
	学年	3年少ない (受験対策)	3年多い (高校生活の集大成、最後の思い出)
	参加理由	演劇への興味	上演企画への興味 (過年度の上演を見て)、演劇への興味
	継続理由	(12人のうちの8人) 活動の楽しさ 交流の楽しさ	(数人) 参加経験の充実度
	演劇部所属	5割	7割
大人	人数	約3人	16人
	役割	講師、担当者2名	演出家、演出助手1～2名、舞台関係プロ約9名、担当者2名、制作助手1名
	若者への関わり方	「教えない」(待つ・断言しない・文末をぼかす)、「個の尊重」(若者一人ひとりへの興味・関心、比較しない、レベルを問題にしない)、「対等」「主体性重視」(若者の意見発信、自己決定をうながす)	
関わり方を生む仕組み	研修 (OJT)	ロビーワーク、接し方研修、マニュアル	なし
	職場環境	円滑な職場内コミュニケーション、良好な大人同士の関係性あり。	
	演劇	非効率・無駄な時間・人から見られる発表体験・特別なスキルや準備不要・多くの役割あり	
	若者へのアプローチ	若者の可能性を信じるポジティブな若者観を持つての若者のやりたいことの「支援」	有料上演の責任分担をする「協働」、協働する相手として力を認めるポジティブな若者観
	キー・パーソン	業務係長とプロデューサー	
	人員配置、継承	若手、1～3年で一人ずつ交代 (引継ぎ容易)	

(注) 網掛け部分は共通する点を示す。

(出所) 筆者作成。